

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第83集

公共開発関連出土品等整理報告書

門前橋詰・舩海戸遺跡 高野原遺跡

1989

群馬県教育委員会

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第83集

公共開発関連出土品等整理報告書

門前橋詰・外海戸遺跡 高野原遺跡

1989

群馬県教育委員会

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

利根郡川場村は群馬県北部の沼田盆地北部に位置し、西南方にあります奈良古墳群とかかわりをもつ地域と判断されます。門前・舁海戸遺跡は縄文時代から古墳時代に至る複合遺跡ではありますが、弥生時代の開発が農業適地を求めて利根川上流域の谷筋に及びその後の開発が連続と続けられた事を物語っています。

また高野原遺跡も弥生時代の良好な住居跡等の資料が出土しています。

調査は遺跡地における開発行為に先行する記録保存の形で計画実施されました。調査は昭和53年8月から昭和54年にかけてあわせて3箇月間でありました。

調査は利根郡川場村教育委員会とセノー工業が群馬県教育委員会の協力により実施しました。整理事業は群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会の委託を受けて昭和63年度事業として実施しました。

遺跡の調査と整理によりまして沼田盆地における弥生時代の山村集落や古墳時代の集落等についての貴重な資料をえることができました。沼田盆地の古代を知るうえで貴重な資料と言えましょう。

発掘事業、整理事業の実施に当たりまして種々ご配慮を頂きました関係各位の皆様には感謝致しますとともに本書により沼田盆地の古代史究明がさらに進むことを期待して序文とします。

平成元年2月25日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

- 1 本書は昭和46年と昭和48年に発掘調査が行なわれ、群馬県利根郡川場村と一部沼田市にかかる門前橋詰・舛海戸遺跡と同村高野原遺跡の調査報告書である。
- 2 門前橋詰・舛海戸遺跡の発掘調査は川場村門前地区の農業構造改善事業に伴なう事前調査で、高野原遺跡の発掘調査は同村生品と沼田市横塚にまたがるセノー工業株式会社建設のための事前調査であり、群馬県教育委員会文化財保護係（昭和48年に文化財保護課と改称。）が調査を実施した。
- 3 調査担当職員は以下の通りである。
門前橋詰・舛海戸遺跡 神保侑史・水田 稔
高野原遺跡 清水一夫・飯塚卓二・野本孝明（現東京都大田区役所勤務）
- 4 両遺跡の整理事業は群馬県教育委員会より委託を受けた群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。担当職員は以下の通りである。
事務担当職員 常務理事 白石保三郎 事務局長 松本浩一 管理部長 田口紀雄 研究部長 上原啓
巳 庶務課長 住谷 進 第3課長 巾 隆之 主任主事 笠原秀樹 主事 須田朋子
小林昌嗣 吉田有光 柳岡良宏
- 5 本書の整理担当職員は以下の通りである。
本文執筆 森田秀策（高崎市立南小学校校長）（第Ⅲ章1） 神保侑史（文化財保護課埋蔵文化財第2係長）（第Ⅱ章1・3） 水田 稔（文化財保護課主幹）（第Ⅰ章・第Ⅱ章2・3・5） 巾隆之（事業団第3課長）（第Ⅲ章2・3） 石塚久則（事業団主任調査研究員）（第Ⅱ章4）
編 集 下城 正（事業団主任調査研究員）
整理業務 佐藤美代子 金子恵子 富永セン 高橋裕美 小久保トシ子 本多琴恵 小林恵美子
柳井さよ里 平林照美 生巢由美子
- 7 調査ならびに本書作成にあたって多くの方々に協力を願いました。記して感謝の意を表わす次第です。
- 8 両遺跡の出土遺物等の資料は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本書において住居・土坑図の縮小率は1/60、古墳は1/200に統一した。また、遺物図は門前橋詰・舛海戸遺跡は1/4で、高野原遺跡は1/3で掲載した。
- 2 関連資料として川場村公民館所蔵の弥生土器7点を図示した。
- 3 遺構図中にあるトーンは焼土を表わす。

目 次

序

例 言

凡 例

第Ⅰ章 川場村の地理的・歴史的環境	1
第Ⅱ章 門前橋詰・舛海戸遺跡	4
1 調査に至る経過	4
2 調査の概要	5
3 遺 構	6
4 遺 物	11
遺物観察表	
5 結 語	16
第Ⅲ章 高野原遺跡	17
1 調査の経過	17
2 遺 構	20
住居跡	20
土 坑	27
古墳と墓坑	28
3 遺 物	31
遺物観察表	

目 次

<p>図版1—1 門前橋詰遺跡透視 2 門前橋詰遺跡トレンチ設定状況</p> <p>図版2—1 橋詰1号住居跡 2 橋詰1号住居跡の炉 3 橋詰1号住居跡遺物出土状態</p> <p>図版3—1 橋詰2号住居跡 2 橋詰2号住居跡遺物出土状態 3 橋詰2号住居跡遺物出土状態</p> <p>図版4—1 橋詰3号住居跡と溝状遺構 2 溝状遺構 3 橋詰3号住居跡遺物出土状態</p> <p>図版5—1 門前外海戸遺跡透視 2 外海戸1号住居跡</p> <p>図版6—1 外海戸2号住居跡 2 外海戸3号住居跡</p> <p>図版7—1 橋詰1号住居跡出土遺物とグリット出土石器 2 橋詰2号住居跡出土遺物(1)</p> <p>図版8—1 橋詰2号住居跡出土遺物(2) 2 橋詰3号住居跡出土遺物</p> <p>図版9—1 外海戸2号住居跡出土遺物 2 外海戸3号住居跡出土遺物と溝状遺構出土墨書土器</p> <p>図版10—1 高野原遺跡透視(北東より) 2 高野原遺跡全景(北より)</p> <p>図版11—1 高野原遺跡トレンチ設定状況(南西より) 2 高野原遺跡調査風景</p> <p>図版12—1 高野原7号住居跡上面のF P 2 高野原12号住居跡上面のF P 3 高野原3号墳周溝上面のF P</p> <p>図版13—1 高野原2号住居跡(東より) 2 高野原2号住居跡遺物出土状態(北より)</p> <p>図版14—1 高野原3号住居跡(西より) 2 高野原3号住居跡遺物出土状態(北西より)</p> <p>図版15—1 高野原4号住居跡(南より) 2 高野原4号住居跡遺物出土状態</p>	<p>図版16—1 高野原5号住居跡(西より) 2 高野原6号住居跡(南より)</p> <p>図版17—1 高野原7号住居跡(西より) 2 高野原7号住居跡遺物出土状態(東より)</p> <p>図版18—1 高野原8号住居跡(南東より) 2 高野原遺跡見学会の参加状況</p> <p>図版19—1 高野原1号土坑(南より) 2 高野原2号土坑上面の状況(南東より) 3 高野原2号土坑下面の状況(南より)</p> <p>図版20—1 高野原1号墳(西より) 2 高野原3号墳(北西より) 3 高野原4号墳と1～4号墓坑(東より)</p> <p>図版21 高野原2号住居跡出土遺物(1)</p> <p>図版22 高野原2号住居跡出土遺物(2)</p> <p>図版23—1 高野原3号住居跡出土遺物 2 高野原4号住居跡出土遺物(1)</p> <p>図版24—1 高野原4号住居跡出土遺物(2) 2 高野原5号住居跡出土遺物(1)</p> <p>図版25 高野原5号住居跡出土遺物(2)</p> <p>図版26 高野原6号住居跡出土遺物(1)</p> <p>図版27 高野原6号住居跡出土遺物(2)</p> <p>図版28—1 高野原7号住居跡出土遺物 2 高野原8号住居跡出土遺物</p> <p>図版29—1 高野原9号住居跡出土遺物 2 高野原10号住居跡出土遺物 3 高野原11号住居跡出土遺物</p> <p>図版30—1 高野原1号土坑出土遺物 2 高野原2号土坑出土遺物</p> <p>図版31—1 高野原2号墓坑出土遺物 2 高野原4号墓坑出土遺物</p> <p>図版32 グリット出土遺物</p>
--	---

目 次

<p>第1図 遺跡分布図 3</p> <p>第2図 門前橋詰・外海戸遺跡全体図 5</p> <p>第3図 橋詰1号住居跡 6</p> <p>第4図 橋詰2号住居跡 7</p> <p>第5図 橋詰3号住居跡 8</p> <p>第6図 外海戸1・2号住居跡 9</p> <p>第7図 外海戸3号住居跡 10</p> <p>第8図 橋詰遺跡出土遺物 14</p> <p>第9図 橋詰・外海戸遺跡出土遺物 15</p> <p>第10図 高野原遺跡全体図 19</p> <p>第11図 高野原2号住居跡 22</p> <p>第12図 高野原3・4号住居跡 23</p> <p>第13図 高野原5号住居跡 24</p> <p>第14図 高野原6・7号住居跡 25</p> <p>第15図 高野原8号住居跡 26</p>	<p>第16図 高野原1・2号土坑 27</p> <p>第17図 高野原1・2・3号墳 29</p> <p>第18図 高野原4号墳と墓坑(1～4号) 30</p> <p>第19図 高野原2号住居跡出土遺物 43</p> <p>第20図 高野原3・4号住居跡出土遺物 44</p> <p>第21図 高野原5・6号住居跡出土遺物 45</p> <p>第22図 高野原6号住居跡出土遺物 46</p> <p>第23図 高野原7・8・9号住居跡出土遺物 47</p> <p>第24図 高野原10・11号住居跡出土遺物 48</p> <p>第25図 高野原1・2号土坑出土遺物 49</p> <p>第26図 高野原2・4号墓坑出土遺物 50</p> <p>第27図 高野原グリット出土遺物(1) 51</p> <p>第28図 高野原グリット出土遺物(2) 52</p> <p>第29図 関連資料 川場村公民館蔵出土土器(1) 53</p> <p>第30図 関連資料 川場村公民館蔵出土土器(2) 54</p>
---	---

第I章 川場村の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

川場村は、県の東北部、武尊山(2158m)の南斜面に位置する。標高は役場付近で約520mを測る。村の84%は武尊山塊の森林に占められ、そこから流れ出す薄根川・桜川・溝又川・田沢川が標高約600mにかかるあたりからその流域に平地を形成する。この平地は、幅約1km・長さ約4kmにわたり、各河川に沿ってほぼ北東から南西に続くが、上記の四河川がほぼ平行している(全て村内で薄根川に合流)ため、利根郡内の他の利根川支流の平地より広いのが特徴である。

この平地上を詳細に観察すると、かなりの起伏があり、微高地上に集落・畑地が、低地部に水田が展開していることがわかる。しかし、近年、ほ場整備等でこれらの起伏がならされてしまった地区が多い。

川場村への交通路としては、現在、県道平川・沼田線、富士山・横塚線が主要道路として沼田市から通じ村内各集落を結んでいるが、北を険しい武尊山に遮られているため、袋小路の感は否めない。しかし、現在の平川・沼田線は、かつての会津街道の一路として重要な路線であった。川場湯原から木賊と、薄根川を廻行し、赤倉山と武尊山の鞍部の花咲(背嶺)峠を越え、現在の片品村花咲を経て戸倉に至る路線である。会津街道は、近世以降、沼田から白沢村高平・追貝・戸倉・尾瀬を経て会津に至る路線が本道とされているが時代によりそれぞれの路線の盛衰があったと考えられる。

2 歴史的環境

川場村の遺物散布地は、上記各河川に沿った平地、及び平地縁辺部の丘陵斜面に集中する。しかし、発掘調査例が少なく詳細は不明であるが、耕作時等に表採された資料をもとに、各時代を概観してみたい。

【旧石器時代】 この時代の遺跡は、現在のところ確認されていないが、生物化石として、ナウマン象の臼歯が、富士山地区桜川左岸の川場湖成層の粘土層中から発見されている⁽¹⁾。古川場湖の年代は、50万年前とされている。

地形的にみて、平地縁辺部の丘陵上に、この時期の遺跡が存在する可能性はあると考える。

【縄文時代】 村内平地部、及び縁辺部の丘陵斜面で遺物の散布が見られる。特に、萩室・立岩・別所・門前の平地縁辺の丘陵地帯に集中する。時期は前期から後期にわたるが、中期後半の加曾利E式土器の出土が多い。発掘調査されたこの時期の遺跡は、橋詰遺跡の他、萩室・内手遺跡がある。内手遺跡では、落とし穴と思われる土坑が確認されている。この内手遺跡に隣接する、白沢村寺谷遺跡⁽²⁾では、加曾利E式期の住居跡が10数軒確認されている。この内手遺跡・寺谷遺跡⁽³⁾の位置する地形は、雨乞山(1067m)の西麓に、田沢川の平地に向かって形成された小扇状地で、扇端部ほぼ全面に遺物の散布がみられる。

【弥生時代】 川場村は、利根郡内において、弥生時代の遺物集中地の一つである。平地の微高地上を中心に、遺物が出土している。時期は中期から後期にわたるが、後期の樽式期が中心である。

中期の遺物は、立岩で竜見町式土器⁽⁴⁾と、北陸から東北地方南部に分布する山草荷式土器⁽⁵⁾が出土している。この山草荷式土器などは、会津方面からもたらされたものであろう。このほか、前述した白沢村寺谷遺跡から、多量の竜見町式土器片が出土し、この時期の住居跡が1軒確認されている。中期の出土例は少なく、断言できないが、中期の遺物の分布は、平地縁辺部の丘陵部に展開するようである。

後期の樽式土器は、前述した各河川に挟まれた平地の微高地上を中心に出土している。発掘調査された遺跡は橋詰遺跡・高野原遺跡のみであるが、耕作中に発見されている遺物では、この時期のものが最も多い。

利根郡内における、弥生時代の川場村の優位性の理由として考えられるのは、前述したように、他の河川流域に比して平地が広いこと、さらに河川と平地との標高差が少なく、灌漑に適していたことなどが指摘できよう。河川に沿った低地に水田、微高地上や平地を見渡せる縁辺の丘陵上に集落が営まれていたと考えられる。

[古墳時代] 川場村の古墳は、天神古墳群・生品古墳群が知られている。天神古墳群は、溝又川と薄根川の合流点の北、両河川に浸蝕された舌状台地の先端に分布する。生品古墳群は、やはり薄根川と田沢川に挟まれた舌状台地の先端部に分布する。残念ながら、天神・生品古墳群から出土した遺物はほとんど地元に残されていないが、これらの古墳は共に横穴式石室を有する小円墳であり、六世紀末から七世紀初頭にかけて築造された群集墳で、沼田市奈良古墳群・秋塚古墳群と共に、薄根川中流域の古墳群を形成している。

このほか、田沢川流域の丘陵縁辺部の萩室・立岩にも小古墳群の存在が知られている。

古墳時代初期の住居跡は、近年利根・沼田地方で多くその発見が報じられているが、川場村においても、高野原遺跡でS字口縁を有する土器を出土する良好な住居跡が確認されている。

しかし、発見される土器の多くは、和泉式から鬼高式期にかけてのものが多い。弥生時代樽式土器を出土する立地と共通した地域から発見され、その点数も多い。白沢村寺谷遺跡においても、石製模造品を伴うこの時期の住居跡が一軒発見されている。

なお、榛名山二ツ岳の噴火による軽石(FP)は、保存状態の良い箇所では約50cmの堆積が見られる。弥生時代樽式期や古墳時代和泉式期の住居跡に、レンズ状に堆積している。FAは、寺谷遺跡でわずかにその存在が確かめられただけであり、一般的な鍵履とはならない。なお浅間山C軽石は認められないが、B軽石は良好に認められる。しかし、ほとんど耕作土に混在してしまっている。寺谷遺跡では、平安時代の住居跡の覆土に30cmの純層として認められた。

[奈良・平安時代] 律令制度下の川場村は、利根郡四郷の内の「男信(奈万之奈)郷」に比定されているが、この時代から平安時代にかけての遺物の出土例は、弥生・古墳時代に比して少なく、その概要は、不明な点が多い。今後の調査例を待ちたい。

[中世以降] 谷地に大友館がある。この館は、正平18年(1363)大友刑部氏時が創始したと伝えられる。大友氏は、南北朝時代の利根庄の地頭職を有している豊後の守護である。門前の吉祥寺や別所の観音堂の創建も大友氏による。館の一部は、昭和58年に調査され、堀及び土塁が確認されている。⁽⁶⁾

天神字城腰に、永禄年間に沼田顕泰が隠居したと伝えられる天神城がある。

(1) 新井房夫・庵間時夫「群馬県利根郡川場村産象歯化石について」『地質学雑誌』1955年10月号

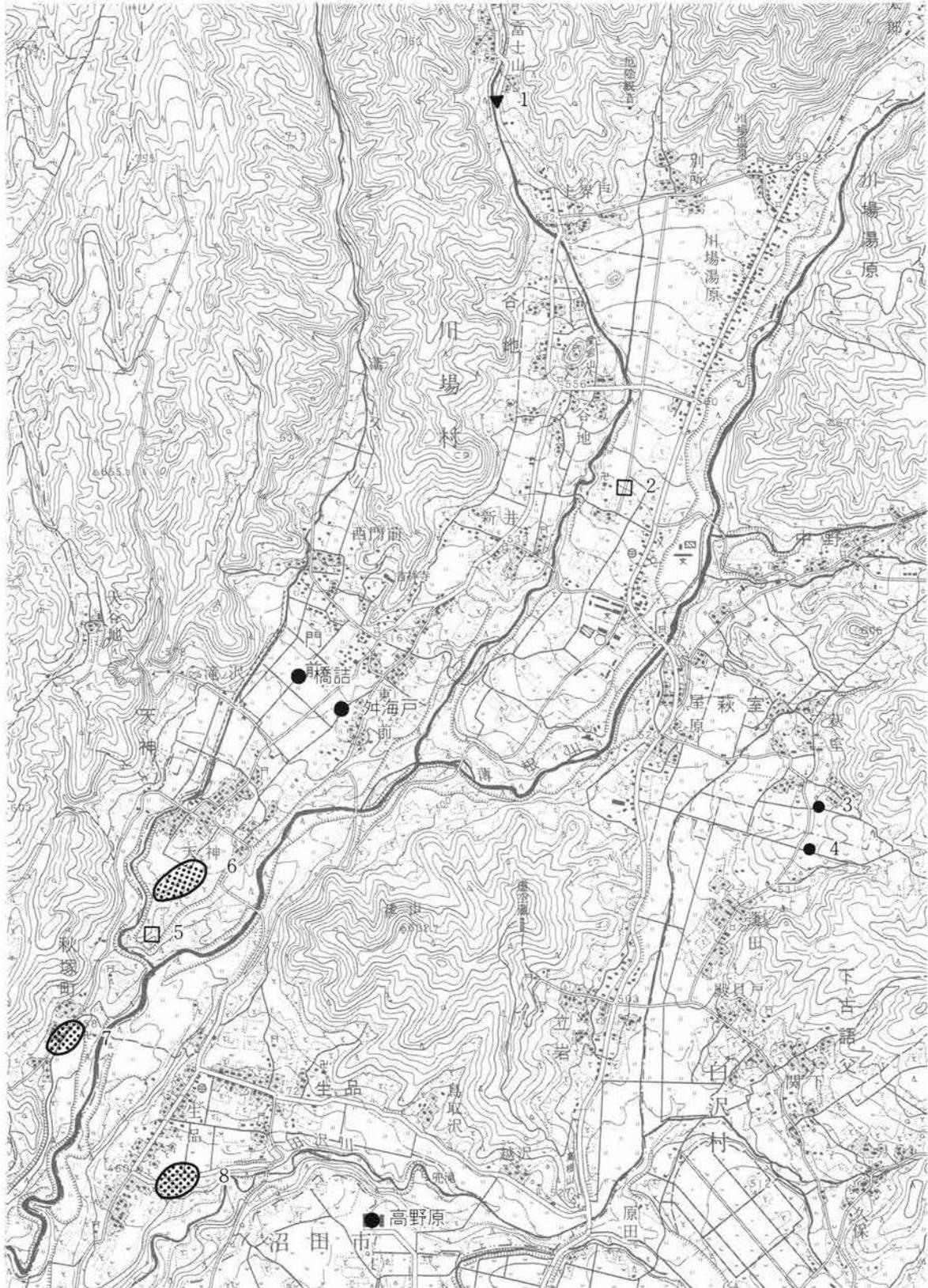
(2) 川場村教育委員会「内手遺跡発掘調査報告書」昭和55年3月

(3) 白沢村教育委員会「寺谷遺跡発掘調査報告書・図版編」昭和55年3月

(4) 川場村教育委員会「写真集・川場村の文化財 第二集」昭和60年3月

(5) 群馬県立博物館「群馬県地域における弥生時代資料の集成Ⅰ」昭和53年12月

(6) 川場村教育委員会「大友館跡発掘調査報告書」昭和58年12月



- 1 ナウマン象臼歯出土地 2 大友館 3 肉手遺跡 4 寺谷遺跡 5 天神城 6 天神古墳群
7 秋塚古墳群 8 生品古墳群

第1図 遺跡分布図

第Ⅱ章 門前橋詰・舂海戸遺跡

1 調査に至る経過

川場村門前地区の農業構造改善事業において、埋蔵文化財が問題とされたのは昭和46年度になってからである。同年5月に川場村教育委員会より県教育委員会社会教育課文化財保護係に事業区域内の埋蔵文化財に関する取扱いの協議があり、関係者で検討した結果、大字門前字橋詰地区において埋蔵文化財包蔵地が認められた。そこで遺跡の有無を確認すべく道路・水路が予定されている箇所を中心に試掘調査を行い、その判断を待つこととした。試掘調査は5月13日、14日の2日間、文化財保護係員により川場村教育委員会桑原社教主事、戸丸川場門前土地改良区理事長立合いのもとに行なった。その結果、主要地方道平川・沼田線の西側にあたる小字橋詰に予定されている道路・水路部分に弥生時代の樽式土器を出土する住居跡が確認された。

試掘調査で確認された遺構の調査は、構造改善事業の工事が本格化した昭和47年度に行なった。調査は川場村教育委員会に埋蔵担当の職員がいないことから、当時水上町立水上中学校の事務主事をしてきた水田稔氏に発掘調査担当を依頼し、47年11月27日より12月18日までの間行なった。この年は例年になく雪が早期より降り、雪中での調査は何度も中断される中で実施され困難をきわめたが、弥生時代の樽式土器を検出する住居跡2軒及び縄文時代前期の住居跡1軒を調査することができた。

橋詰地区の発掘調査が進む中で構造改善事業工事は早いスピードで行なわれていたが、当初計画に入っていなかった舂海戸地区が急拠工事区域に入れられ、しかもその一部が全面削平されることとなった。工事の変更計画が県教育委員会に協議された段階で、当該地区の試掘の必要性を説いたが、遺跡はないと主張する川場村との間で話が平行線となり、12月26日の川場村長、同教育長、門前土地改良区理事長、県教育委員会文化財保護室長、同主査等の協議で、工事の際文化財保護室員が立合い、遺構確認の折は調査を実施することで協議がととのった。工事立合いの結果、舂海戸地区の削平箇所は住居跡3軒が確認され、その調査は昭和48年1月5日より13日までの間、県教育委員会文化財保護室員により実施された。舂海戸地区の調査は雪が降り続く中で橋詰地区以上の困難があったが、関係者の努力によりこれを終了することができた。

橋詰・舂海戸地区の埋蔵文化財発掘調査は、川場村教育委員会の桑原栄重教育長、桑原忠社会教育主事の奔走と川場門前土地改良区理事長戸丸一二氏の文化財に対する理解・協力があつたからこそ、厳しい気候条件の中、これを調査することができた。調査した成果

はその後種々の事情により報告書作成のための整理に着手することができず未実施であったが、昭和62年度に過年度公共事業の整理事業に取り上げられ、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団においてこれを整理し、報告書を刊行することとなった。以下に報告するところの内容は調査の成果であるが、上記に記した人々の努力によりようやく報いることができた。



調査中の橋詰遺跡

2 調査の概要

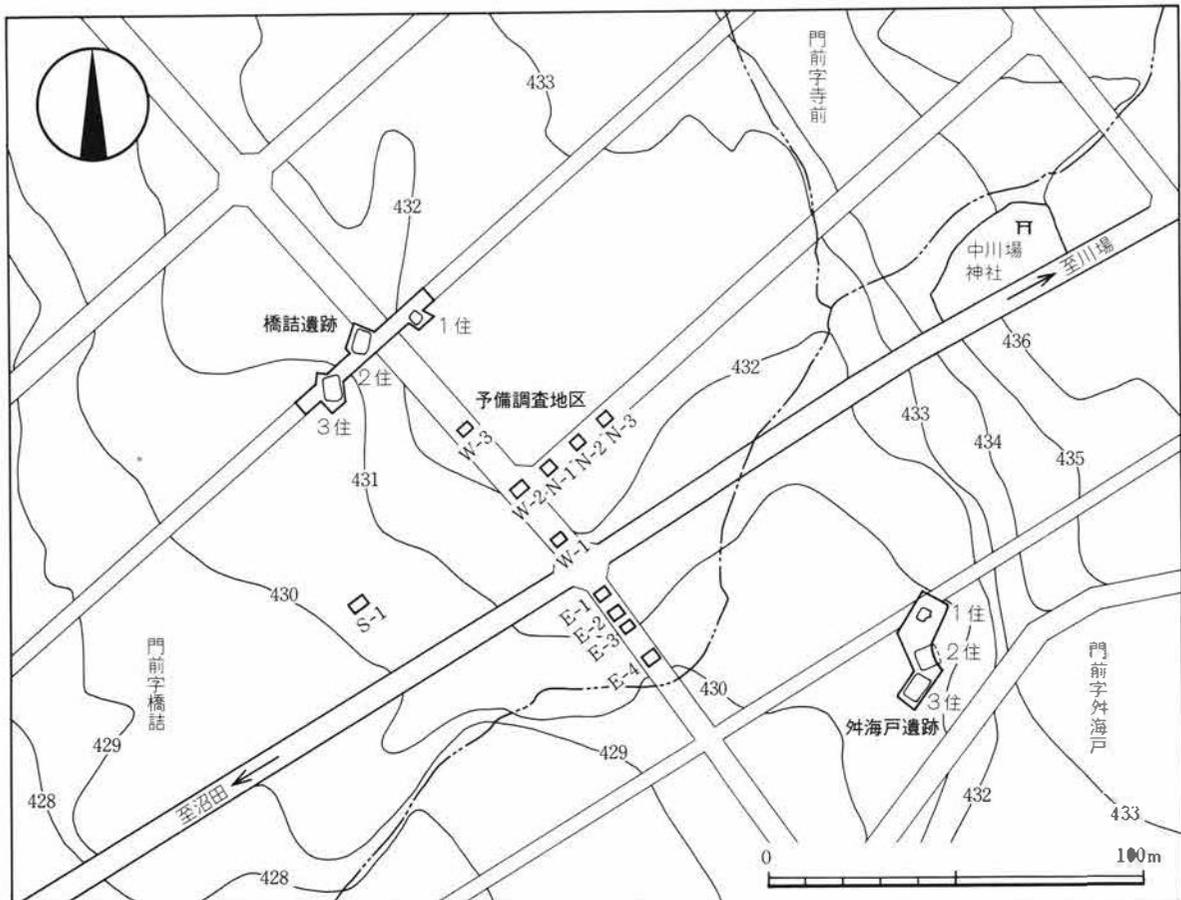
本遺跡の発掘調査は、川場村門前地区で計画される土地改良事業に先立ち実施された。橋詰遺跡は、川場村大字門前字橋詰、舁海戸遺跡は、同字舁海戸に所在する。それぞれ土地改良事業に伴い敷設される水路・道路部分の発掘調査である。

調査期間は、橋詰遺跡が、昭和47年11月27日から12月18日まで、舁海戸遺跡が昭和48年1月5日から1月13日まで実施した。

調査方法は、水路・道路をトレンチに見立て、遺構等が確認されたら、そのつど拡張して、遺構の全景を把握することとした。最終的な調査面積は、橋詰遺跡250m²、舁海戸遺跡220m²であった。

調査の結果検出された遺構は下記のとおりである。

〔橋詰遺跡〕	縄文時代前期諸磯式期住居跡	1軒（1号住居）
	弥生時代後期樽式期住居跡	2軒（2号～3号住居）
	平安時代溝状遺構	1条
〔舁海戸遺跡〕	弥生時代後期樽式期住居跡	1軒（3号住居）
	古墳時代前期住居跡	1軒（2号住居）
	平安時代住居跡	1軒（1号住居）



第2図 門前橋詰・舁海戸遺跡全体図

3 遺構

橋詰1号住居跡(第3図 図版2) 発掘区北側の微高地を外れた、水田から発見された。住居中央部で3.7mを測る隅丸方形の住居跡で、ローム層を約40cm掘り込んでいる。地表面から床面までは、1.2mを測る。その間の土層は、6層が確認できるが、住居の掘り込みはローム層でしか確認できなかった。

柱穴は、径約20cmのものが4本検出された。東西1.4m、南北1.8mの長方形に配置されるが、南東の1本はその矩形にのらず、南方向にずれる。これは、後述する床面下の土坑を避けての配置と考えられる。

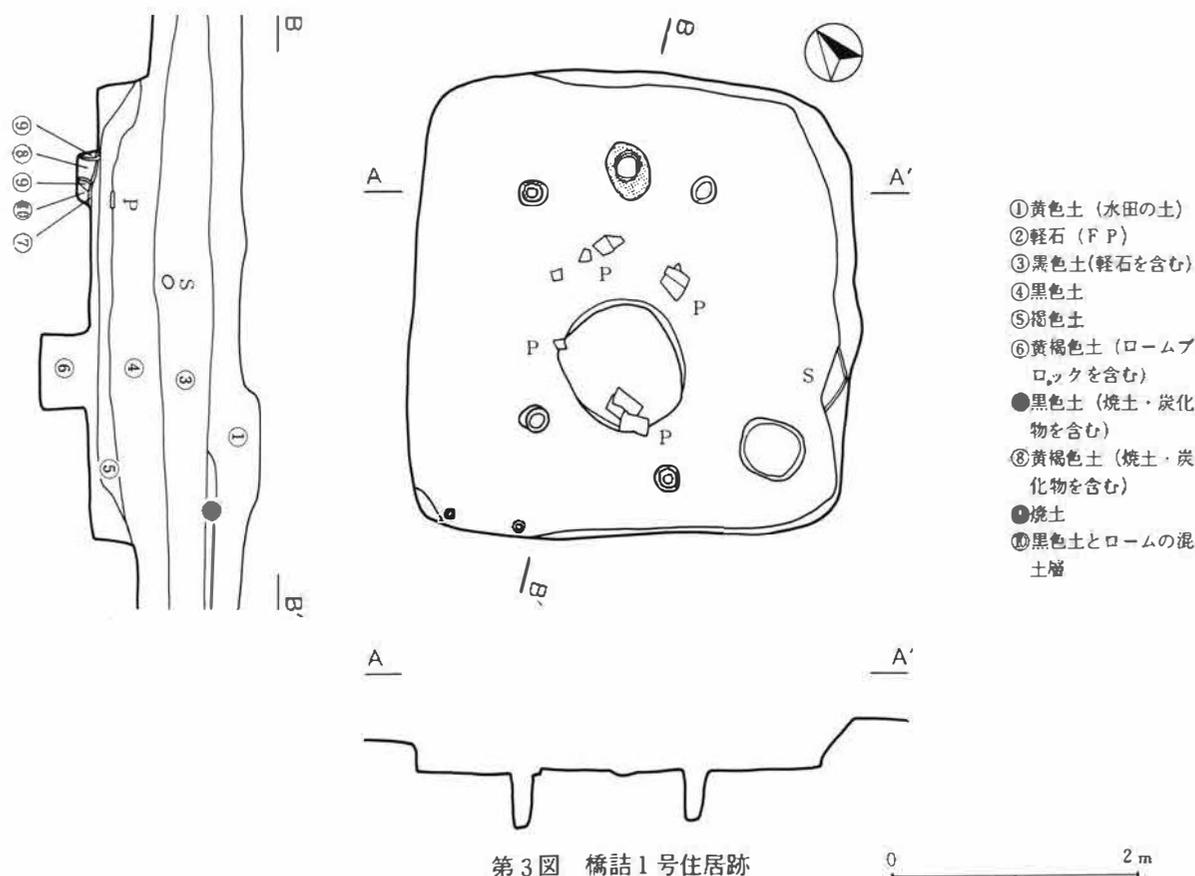
住居内の中央から南壁よりの所で、径約1m、深さ40cmの土坑が検出された。住居の床面は、ロームが踏み締められていたが、この部分だけは、やや窪んでおり、容易に確認できた。土坑内の土層は、床面を覆っていた、黄褐色土層であった。この土坑上から土器が出土しており、生活はこの土坑を埋めた状態で行われていたはずであるが、その性格は不明である。

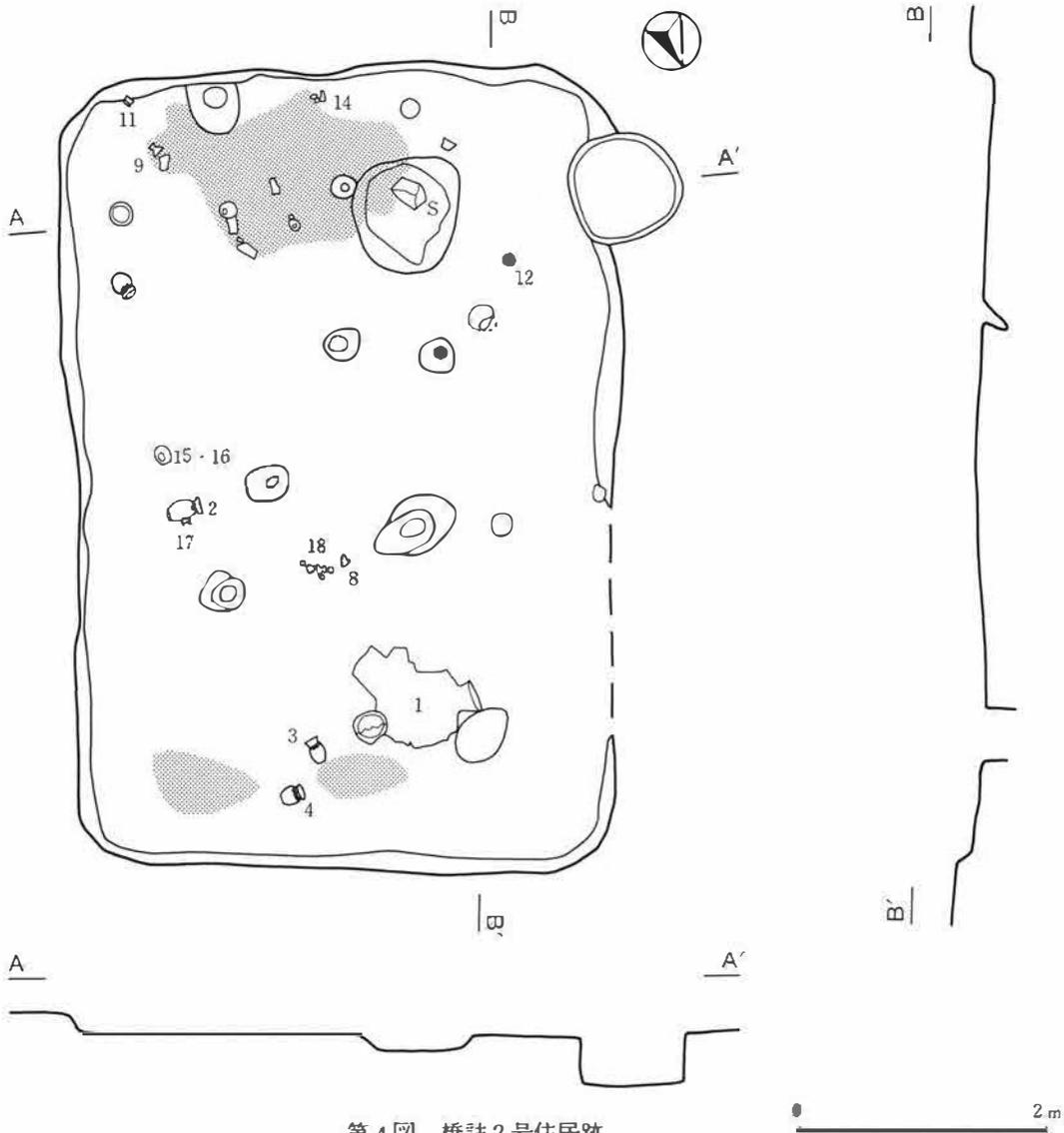
この他、住居南東コーナーに径約50cm、深さ5cmの浅い窪みが確認された。また東壁に立て掛けられた状態で、1辺40cmの三角形、厚さ約6cmの偏平な安山岩が出土している。前述の浅い窪みに納まる石であり、この窪みに敷かれていた可能性がある。

炉は、北壁寄りの柱穴間に、埋甕炉が検出された。埋甕は口縁部・底部を打欠いた土器を使用している。床面に表れている部分の径は約20cmであった。土器の周辺は、焼けて赤く変色しているが、土器の内部は、焼土粒や炭化物を含む黄褐色土層が混入していた。

出土遺物は、この埋甕の他、床面より約20cmの所から1個体出土している。(第8図-1)

この住居跡の時代は、これらの土器より縄文時代前期諸磯式期と考えられる。





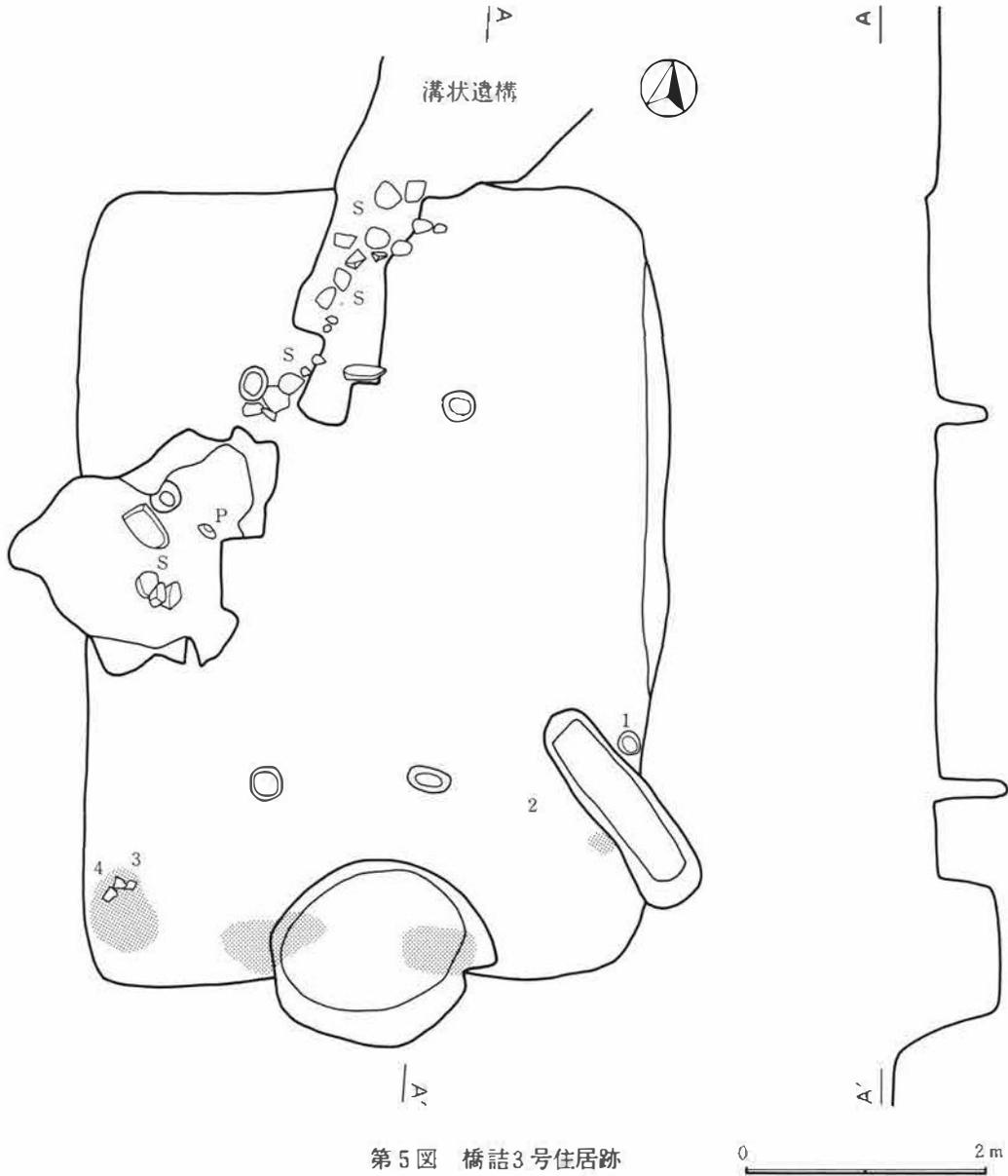
第4図 橋詰2号住居跡

橋詰2号住居跡（第4図 図版3） 微高地上の桑畑で検出された。表土下約40cmはF Pを含む耕作土、その下に黒色土層が約20cm存在しローム層となる。本住居跡は、表土下の黒色土層からロームを約20cm掘り込んで構築されている。住居の覆土には、F Pが純層として存在している。

住居は、長辺約6.5m、短辺約4.2mの長方形を呈する。柱穴に想定されるピットは確認されなかった。西南コーナー、南壁の東寄りに約40cm～50cmの深さを待つピットが検出されたが、住居に伴う可能性は少ない。他の小ピットも同様である。床面は非常に柔らかく、凹凸もあり、短期間の居住を想像させる。炉跡も検出されなかった。ただ南と北壁近くの床面上に焼土が多量に堆積していたが、南の焼土中から土器の出土もあり、投棄されたものと考えられる。

出土遺物は多く、ほぼ完形の土器が17個体（第8図・第9図）、石鍬1が床面上から出土している。その中で、南東コーナーに近い位置に胴下半部を打ち欠いた土器（第8図-5）が、正位に置かれた状態で出土している。

土器の出土の多さ、短期間の住居使用などから、この住居跡の破棄が尋常で無かった可能性が高い。本住居跡の時代は、その出土土器より弥生時代後期の樽式期である。



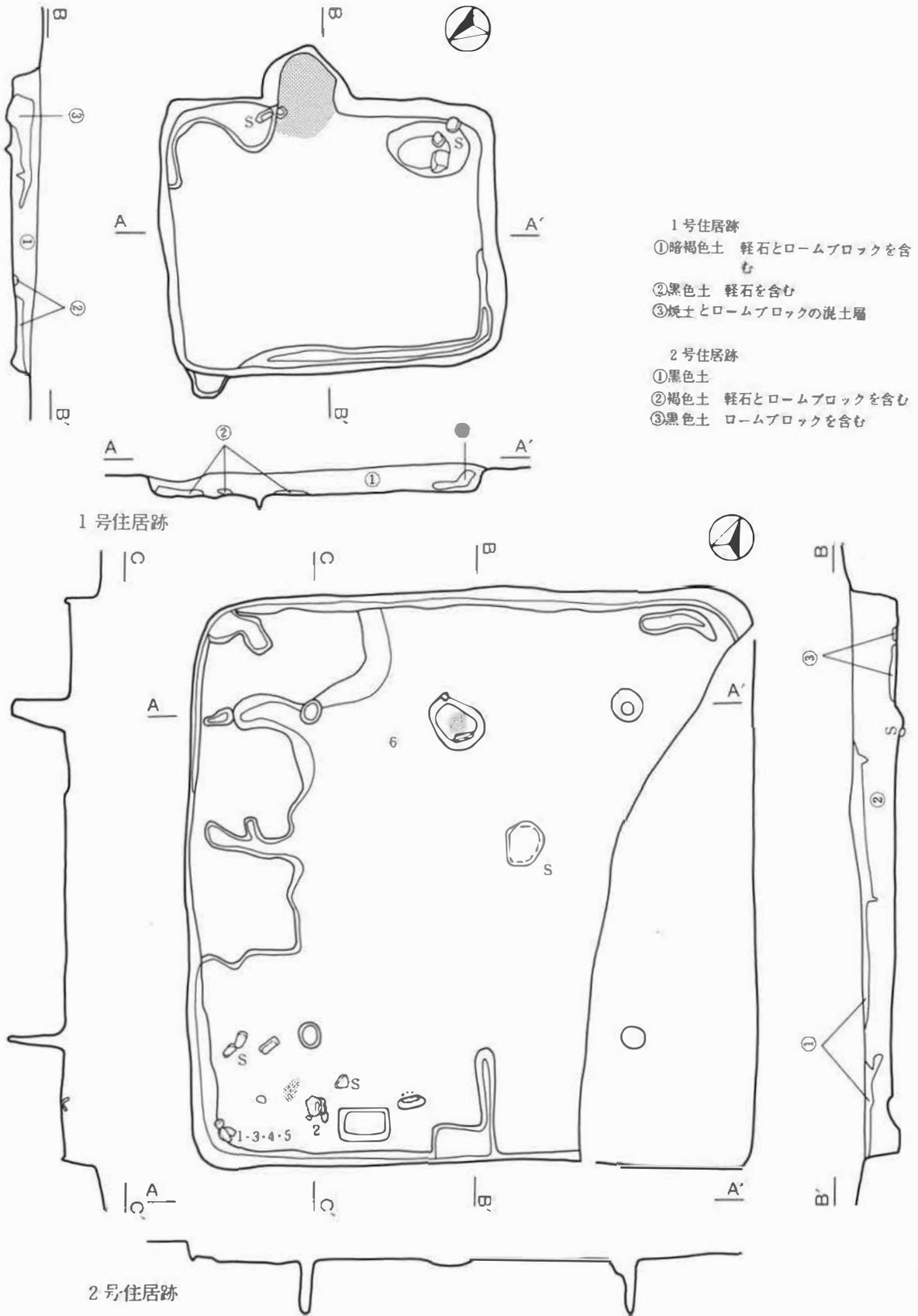
第5図 橋詰3号住居跡

橋詰3号住居跡（第5図 図版4） 発掘区南側の微高地から低地に移る傾斜地で検出された。住居は、ローム層の上層の黒色土層から掘り込み、約50cmの壁高を測る。長辺6.5m、短辺4.6mの長方形を呈する。

柱穴は、径約20cmの4本で長辺約3m、短辺約1.6mの矩形となる。この住居跡は、南辺中央部、南東コーナーで円形及び長方形の土坑で切られている。この土坑の時期は不明であるが、住居との関係は無いと思われる。また北壁中央部から西壁中央部にかけて、溝状の遺構に切られる。この溝は底部に砂が堆積し拳大の礫が混じり、床面を削っている。特に西壁部分では深さ20cmの溜まりとなっている。この溝の時期は、溝中から、糸切り底の土器（第9図）が出土していることから平安時代と考えられる。なおこの土器には、「車」と内外面に墨書されている。

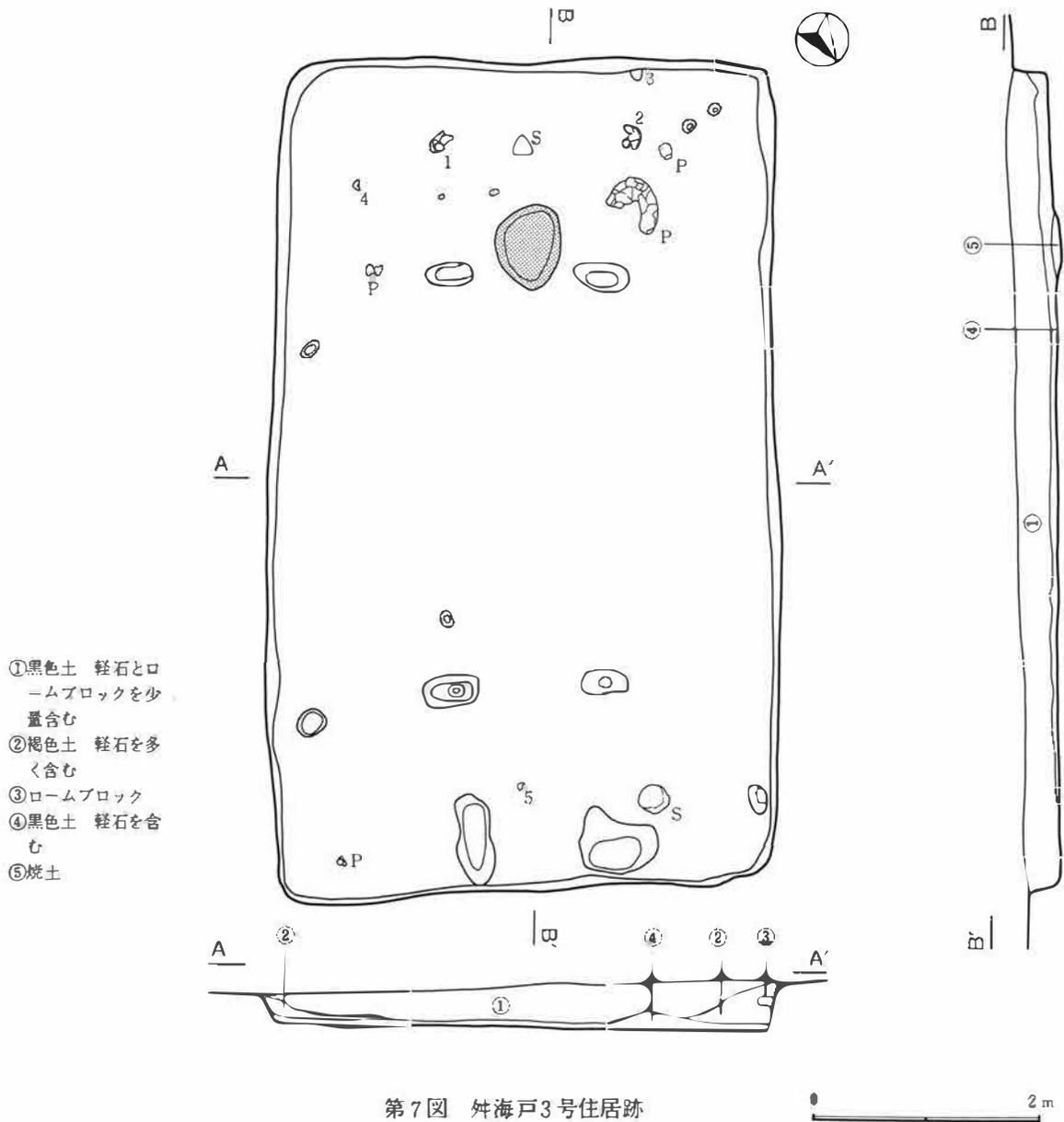
本住居跡の炉は、前述の溝に切られて確認できなかった。また南壁に沿って、多量の焼土が検出された。

出土遺物は少なく、4個体が出土している。（第9図）南西コーナーに2号住居跡と同じ状態で胴部を欠く土器が正位で出土している。この住居跡の時代は2号住居と同時期と考える。



第6図 舩海戸1・2号住居跡

0 2m



外海戸1号住居跡 (第6図 図版5-2)

本遺跡調査住居跡の北端に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は3.45m×2.80mである。主軸はN-122°-Eを示す。竈は住居東南壁の東寄りに付設されている。壁高は東北壁22cm、西南壁23cm、東南壁28cm、西北壁18cmである。住居内床面は固く踏み固められ、南隅にはピットがあった。出土遺物はない。本住居跡の時期は出土遺物がないため明確でないが、施設等から推定して国分期と考えられる。

外海戸2号住居跡 (第6図 図版6-1)

本遺跡調査住居跡の中央に位置する。平面形は方形を呈し、規模は3.9m×3.9mである。主軸はN-65.5°-Eを示す。壁高は北壁46cm、南壁30cm、西壁14cmである。東壁部分は未調査である。各々の壁下には壁周溝がある。炉跡は北壁中央部より約1mほど南に入ったところにある。規模は60cm×45cmである。住居内床面は固く踏み固められているが、西壁の中央部より西北隅にかけて幅1mほどのベッド状遺構があった。また住居西南隅には白粘土が床面に敷きつめられた状態であり、南壁中央部分には壁に接して35cm×65cm

の規模を有する長方形の固く踏み固められた状態の高まりが見られた。状況からして南壁の中央部分は本住居の入口と推定される。ピットは南壁に近い付近に長方形のものがあつた。本住居の柱穴は4穴と推定され、内3穴が確認調査された。他の1穴は未調査部分に入っているものと考えられる。出土遺物は完形の樽式土器の甕、S字状口縁を有する土師器の甕、完形の鉢等がある。本住居跡の時期は出土遺物からして、古墳時代初頭のものと考えられる。

舩海戸3号住居跡 (第7図 図版6-2)

本遺跡調査住居跡の南端に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は7.11m×4.42mである。主軸はN-36°-Eを示す。壁高は東北壁30cm、東南壁40cm、西北壁24cm、西南壁26cmである。炉跡は東北壁中央部より西南へ1.5mほど入ったところにある。規模は60cm×70cmである。住居内の床面は固く踏み固められている。ピットは西南壁付近に2箇所ある。柱穴は4穴である。出土遺物は石製紡錘車、樽式土器の壺の口縁部分、鉢等がある。本住居跡の時期は出土遺物からして、弥生時代後期のものと考えられる。

4 遺物

遺物観察表

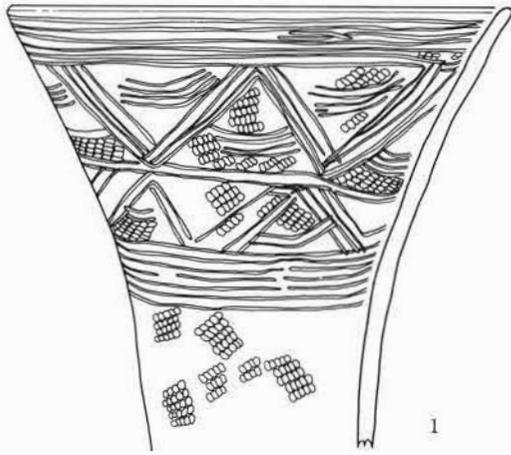
(法量:①器高②口径③底径()は復元径)

遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法量 (cm)	① 色調 ② 胎土 ③ 焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	備考
橋詰 1住 No.1	鉢	底部欠損	① (23.5) ② (28.5)	① 橙色。 ② 小石多量含む。 ③ 良好。部分的に 黒斑あり。	「ハ」の字状に開き口縁部は丸く終る鉢である。上段に6条、中段に2条、下段に7条の平行線、沈線を篋でめぐらせる。3段の平行線の間に山形文を4本の篋で描き、三角形の中を4本の弧線で埋める。	地文に縄を外面にころがし、篋により施文する。外面の胴下半部には篋ミガキを施す。口縁部から内面全体に椀状の篋ミガキを施す。	
グリ ット 出土 No.1	石匙	完形	全長 58mm つまみ長さ 20mm 刃部長さ 39mm 刃部幅 39mm	① 灰オリーブ色。	縦型の石匙である。つまみを先端のなす軸線に対して肩部は25°の角度で右に下る。	表面に自然面を残す。つまみ部分と刃部周縁は丁寧な仕上げを施す。刃部はにぶく厚い。	
グリ ット 出土 No.2	石錐	完形	全長 62mm つまみ幅 29mm 錐長さ 20mm	① 灰白色。 ● 黒色頁岩。	つまみ部分は端部にかけて薄い。先端部の錐の断面は4角型である。	錐先端部は欠損している。錐先からつまみの一部は丁寧な仕上げである。	
橋詰 2住 No.1	壺	ほぼ完形	① 77.6 ② 33.8 ③ 20.0 頸部径 21.2 胴部径 53.4	① 茶褐色。 ② 少量の砂粒を含む。 ③ 良好。部分的に 黒斑あり。	折り返し口縁はくの字状にくびれてあまり張らない肩部につづく。胴部最大幅は中位にあり、ゆるやかに底部に続く。頸部には波状文と簾状文、擬走する平行線で区画する。	口縁部の波状は2段、頸部は簾状文を1条巡らしたのちに波状文を4条巡らせる。簾状文から波状文を縦に切る平行線文が5箇所にある。その下端に丸い横1本沈線のボタンが2個1組で貼付。	底部内面は中央に向かって盛り上がる。
橋詰 2住 No.2	甕	ほぼ完形	① 24.8 ② 14.2 ③ 8.9	① 褐色。 ② 砂粒含む。 ③ 良好。腹部に黒斑あり。	折り返し口縁部から頸部にかけてはくびれはゆるく胴部も張らない。胴下半部もくびれないで大きな底部にいたる。	口縁部1条、頸部3条、胴上半部3条の波状文を巡らせる。胴下半部横篋ミガキ、内面全体横篋ミガキ、底部も篋ミガキ。	内外面の整形地文に縦方向刷毛目を使用。

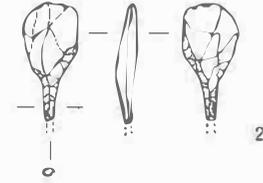
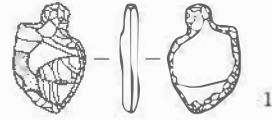
第II章 門前橋詰・外海戸遺跡

遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法量 (cm)	① 色調 ② 胎土 ③ 焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	備考
橋詰 2住 No.3	甕	完形	① 18.7 ② 12.1 ③ 5.8 胴径 12.5	①暗褐色。 ②砂粒含む。 ③あまり良くない。	直線的にひろがる口縁部分。 胴部は強く張らない。	刷毛目を使用した成形後、口縁部分を横ナデする。頸部に1条の簾状文、上部に3条、下部に1条の波状文がめぐる。	煤付着。
橋詰 2住 No.4	甕	完形	① 16.0 ② 13.6 ③ 5.5	①茶褐色。 ②砂粒含む。 ③良好。	くの字状口縁径は胴径12.8cmよりも大きく、肩部は張らず胴部は下ぶくらみで上げ底風にいたる。	成形に刷毛目を使用し、口縁部分は横ナデする。頸部は1条の簾状文がめぐり、その下に波状文が1条めぐる。	
橋詰 2住 No.5	甕	口縁～胴上半残存	① (17.9) ② 18.7 ③ (17.5) 胴径 18.9	①明赤褐色。 ②2mmの砂粒を含む。 ③良好。	くの字状に立ち上がる口縁部。肩を持たない。胴の最大幅は下方に位置する。	成形に刷毛目を使用する。口縁部分は横ナデを施す。頸部に簾状文を1条。口縁部に5条、胴部に2条の波状文を施す。	
橋詰 2住 No.6	甕	頸部～底部残存	① (18.5) ② (11.8) ③ 6.0	①橙色。 ②1～3mmの砂粒を含む。 ③良好。	口縁部は欠損。胴部は球形を呈し、最大幅は19.5cmを測る。頸部には1条の簾状文がめぐる。	成形には刷毛目が残る。器面内外に横方向の荒い篋ミガキが施こされる。胴中央部に黒斑が残る。	
橋詰 2住 No.7	甕	口縁部～体部残存	① (14.6) ② 17.2 ③ (13.7)	①にぶい黄褐色。 ②3mmの砂粒を含む。 ③良好。	口縁部は「く」の字状に直線的に開く。肩は無く腹部は下方でやや張り、15.3cmを測る。	内外面ともに成形には刷毛目を使用している。先づ頸部に1条の簾状文・口径部に2条、胴部に1条の波状文をめぐらせる。	胴部下半に煤付着。
橋詰 2住 No.8	甕	胴下半部欠損	① (12.2) ② 17.5 ③ (22.5)	①にぶい黄褐色。 ②砂粒含む。 ③良好。	水平軸に対し約60°のくの字状を呈する口縁である。肩部は無くただらたとして、胴部最大幅は下方にゆく。	内外面ともに荒い刷毛目が残り、胴部に巻きつくように口縁部に連結する。口縁部は横ナデ、内面は横方向篋ナデ。	
橋詰 2住 No.9	台付甕	ほぼ完形	① 16.1 ② 13.6 ③ 7.7	①赤褐色。 ②砂粒含む。 ③良好。	コの字型にまで外反する口縁はくびれて胴にいたる。胴下半部はゆるやかに細くなり短かい脚に連結する。	頸部の波状文は2条にめぐる。胴下半部全体は篋ケンマが丁寧に施されている。器内も全面篋ケンマ。脚内面は篋ケズリ。	脚先端は角型でしっかりしている。胴から脚にかけ煤付着。
橋詰 2住 No.10	台付甕	坏残存 脚部欠損	① (9.0) ② (18.6) ③ (3.2)	①にぶい黄褐色。 ②1～4mmの砂粒を含む。 ③良好。	コの字型を呈するように外反する。口縁部の最大幅は胴下半部にあり、脚部との間が屈曲するようにみえる。	刷毛目による成形後、口縁部分は横ナデ調整。頸部は上段から波状文を3条めぐらせる。その後、篋ミガキを全体に施す。	胴部外面に煤付着。
橋詰 2住 No.11	台付甕	脚部のみ残存	① (6.0) ② (3.4) ③ 7.4	①黄褐色。 ②石英含む。 ③良好。	No.9の台付甕と同類である。広口の甕が乗っていた。脚は直線的である。	器表面は荒れているが、内外面とも刷毛目調整。外面縦篋ミガキ残る。	
橋詰 2住 No.12	台付甕	脚部のみ残存	① (6.7) ② (4.0) ③ 9.6	①にぶい橙色。 ②赤褐色土粒含む。 ③良好。	No.9の台付甕と同類である。脚はNo.11よりも大ぶりでやや内湾気味の脚である。	内外面とも刷毛目による成形後、外面は縦方向の篋ナデで調整する。	
橋詰 2住 No.13	小型甕	底部欠損 口縁部 少々欠損	① (7.3) ② 9.4 ③ (5.0)	①橙色。 ②2mmの砂粒を含む。 ③良好。	底部は欠損している。胴径8cmに対して口径9.4cmと大きく、くびれ部も弱い。頸部に4条の波状文がめぐる。	内外面を刷毛目成形後、口縁指ナデ調整、波状を施文後、外面の胴部は施文を消さぬ様に縦方向篋ナデ。	煤付着。
橋詰 2住 No.14	碗	約残存	① 6.5 ② 14.5 ③ 4.3	①にぶい黄褐色。 ②砂粒を含む。 ③良好。	小さな平底の底部から下膨らみの胴下半分のような体部となる。	器表面の一部は荒れているが刷毛目成形、横ナデ調整後、全体に篋ミガキ。	
橋詰 2住 No.15	碗	完形	① 6.3 ② 13.4 ③ 4.3	①赤褐色。 ②砂粒を含む。 ③良好。	平面軸から55°の角度に立ち上がる体部をもつ内湾気味の器形である。	刷毛目を使用した成形後、口縁横ナデ、その後全体に縦方向の篋ケンマ。	
橋詰 2住 No.16	碗	完形	① 6.6 ② 13.5 ③ 4.4	①明赤褐色。 ②砂粒含む。 ③良好。	器表、底部付近は荒れている。水平軸から約55°の角度に立ち上がる。	成形には刷毛目を使用。底部剥落部分以外は全て丁寧な篋ケンマ。	

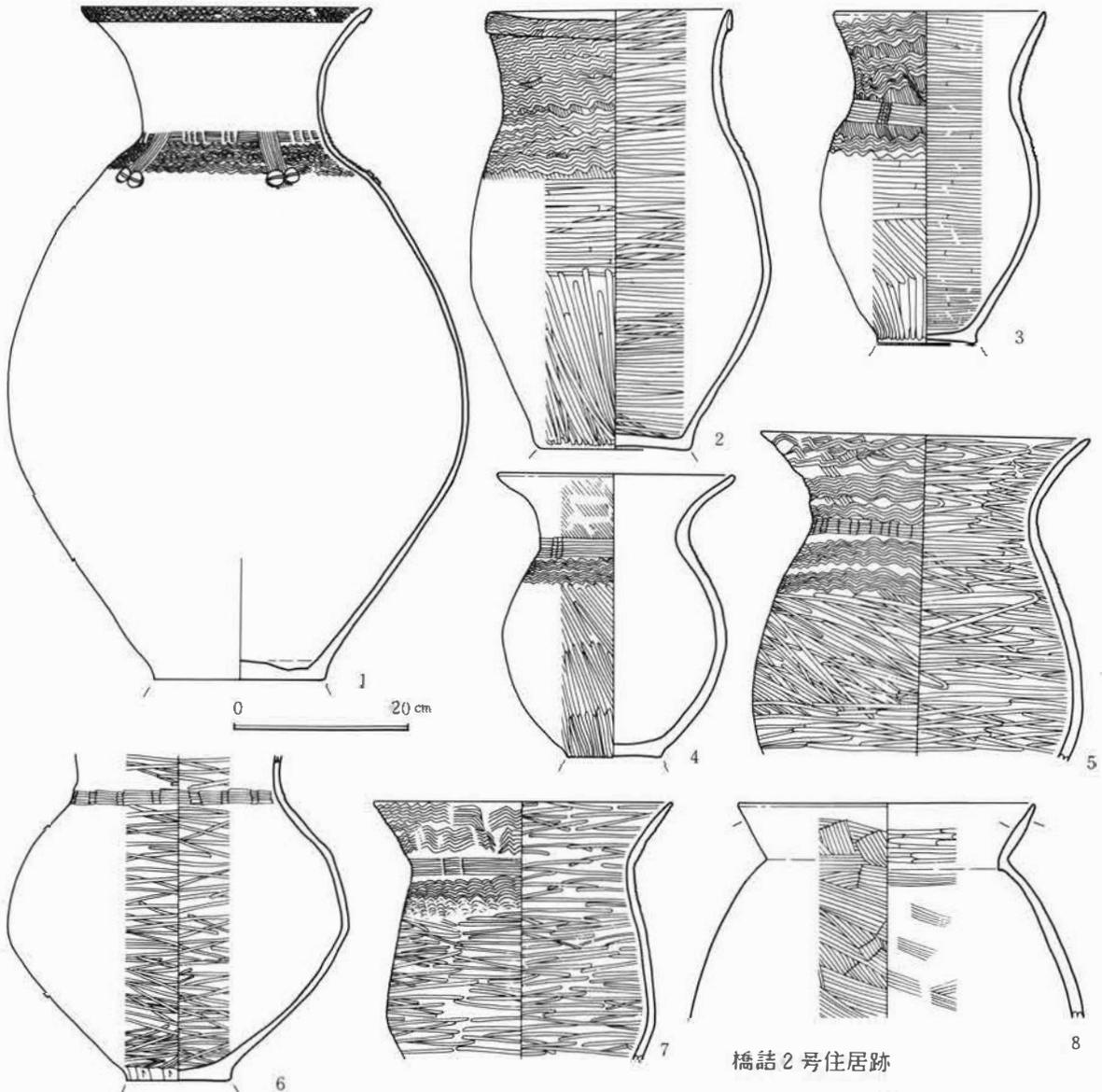
遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法量 (cm)	① 色調 ② 胎土 ③ 焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	備考
橋詰 2住 No.17	碗	1/2残存	① (5.7) ② (2.5) ③ (3.3)	①浅黄橙色。 ②石英を多く含む。 ③良好。	口縁部周囲と、内面の一部分は荒れている。底部は抜けている。内湾する体部。	刷毛目による成形、口縁部には横ナデを施す。全体に篋ミガキ認められる。	黒斑あり。
橋詰 2住 No.18	石鉢	完形	全長 17.1 最大幅 9.7 厚さ 1.6		先端の形は一方は丸く調整部分は厚い。片側は尖り気味で刃部と思われる箇所は磨耗している。	重さ329kgである。体部中央はくびれて28cmを測る。全体的に厚さは平均化している。	
橋詰 3住 No.1	甕	口縁部～ 頸部残存	① (13.4) ② 19.2 ③ (18.0)	①明黄褐色。②小石少量含む。③良好。黒斑あり。	折り返し口縁は小さく、コの字型の口縁から胴部に移行する。肩部はない。	荒い刷毛目を残し頸部に1条の簾状文、その他は波状文でうめる。	内面横方向の篋ケンマ。
橋詰 3住 No.2	小型甕	口縁部～ 底部残存	① 12.3 ② 11.6 ③ 6.2	①茶褐色。 ②砂粒含む。 ③良好。	コの字状の口縁部の径より胴部径11.3cmと小さい。胴部最大径は下方にあり、上げ底の底部にいたる。	刷毛目で成形後、横ナデ調整、2条の波状文を施した後胴下方は斜方向。内面は横方向の篋ケンマ。	胴上半部分に煤付着。
橋詰 3住 No.3	片口鉢	口縁部～ 胴部	① 5.7 ② 8.7 ③ 6.2	①明褐色。 ②1mmの砂粒を含む。 ③良好。	上げ底風の底部と内湾する体部である。片口幅は3.5cm、注口の突出は1.4cm。	刷毛目の成形後、全体を篋ケンマ。片口の内外面は指ナデ。	
橋詰 3住 No.4	碗	ほぼ完形	① 6.2 ② 13.1 ③ 3.7	①黄橙色。②石英含む。③良好。黒斑あり。	水平軸からは約55°を測る。体部は内湾しながら立ち上がる。	底部は荒れている。内外面とも一部刷毛目を残すが全体を篋ミガキ。	
外海戸 2住 No.1	甕	口縁部～ 底部残存 南壁	① 18.1 ② 14.3 ③ 6.3	①橙色。②砂粒少量含む。③良好。黒斑あり。	ゆるやかにくびれる頸部から胴部はややふくらみ13.9cmを測る。	頸部には1条の簾状文をめぐらせ、上に2条、下に1条の波状文を施す。	部分的に篋ミガキ剥落する。
外海戸 2住 No.2	甕	口縁部～ 頸部残存 南壁	① 11.5 ② 14.1 ③ 18.8	①暗赤褐色。 ②砂粒を含む。 ③普通。	高さ5cmもある長い口縁部と球胴を呈すると考えられる胴上半部。	口縁部外面には巻き上げ痕跡5段。胴外面は斜め、内面は横の篋ケンマ。	部分的に煤が付着する。
外海戸 2住 No.3	甕	口縁部～ 頸部残存 南壁	① (4.7) ② (13.5) ③ (12.5)	①橙色。 ②砂粒含む。 ③良好。	くの字状を呈し3段に巻き上げた口縁部と球胴の胴上半部。	内面は丁寧な篋ナデ。口縁部分も横方向のナデ。胴上半部は縦刷毛目。	
外海戸 2住 No.4	甕	約1/2残存 南壁	① (11.7) ② (13.4) ③ (10.8)	①橙色。 ②砂粒少量含む。 ③普通。	コの字状を呈する口縁部。口径に近い胴径は13.1cmを測る。体部全体篋ケンマ。	頸部には横1条の簾状文。上段、下段にも1条づつの波状文を施す。	
外海戸 2住 No.5	碗	口縁部～ 底部残存 南壁	① 8.0 ② 19.3 ③ 5.1	①赤褐色。 ②砂粒を含む。 ③良好。	上げ底風の底部である。体部は球形を呈するほど丸く立ち上がる。	内外面全て篋ケンマ。体部は縦方向。口縁部は横方向の篋ケンマ。	
外海戸 2住 No.6	台付甕	口縁部～ 胴部残存 中央	① (11.0) ② 12.7 ③ (18.4)	①暗褐色。 ②砂粒含む。 ③普通。	S字状口縁は直立気味に立ち上がり口唇端部は丸い。胴最大部は肩部にはなく下方に下がる。	胴部外面は下方より上方への浅い刷毛目。内面は丁寧な横ナデ。	土器の内外面に煮こぼれ痕。
外海戸 3住 No.1	甕	口縁～胴 上部残存。 北壁	① 8.0 ② 14.0 ③ (11.0)	①橙色。②5mm以下の小石を多量含む。③良好。	くの字状にゆるやかに口縁部は立ち上がる。胴部は強く張らない。	刷毛目を使用する成形。口縁部7条の波状文。その他全て篋ミガキ。	
外海戸 3住 No.2	碗	ほぼ完形 北東隅	① 8.1 ② 16.0 ③ 5.6	①にぶい黄橙色。 ●小石含む。③不良。黒斑あり。	上げ底風の底部。内湾気味に水平軸から55°の角度に立ち上がる体部。	内外面ともに刷毛目使用の成形。口縁部横ナデ。全体に篋ミガキ。	器面が荒れている。
外海戸 3住 No.3	蓋	ほぼ完形 北東隅	① 8.0 ② 14.8 つまみ径 2.5	①褐色。 ②砂粒含む。 ③良好。	平面形は円形に近いものつまみの中軸は斜めに倒れる。先端部は角形でしっかりとっている。	全体に刷毛目を使用した成形。つまみ部分は指頭によるナデ仕上げ。内側を環状に煤付着。	
外海戸 3住 No.4	紡錘車	1/2残存 北壁	直径 6.2mm 軸径 (5.0mm) 厚さ (5.5mm)	①淡緑色。 ②緑色凝灰岩。	円板で片面は平坦である。反対の面は中央部分が平坦で周辺は斜めとなる。	平坦面は荒れて薄く剥落しているものの調整・仕上げは丁寧であった。	
外海戸 3住 No.5	紡錘車	1/2残存 南壁	直径 6.4mm 軸径 (6.0mm) 厚さ 6.8mm	①淡緑色。 ②緑色凝灰岩。	表面、裏面ともに平坦である。周縁も直に仕上げ厚さは変化しない。	片面が荒れているものの円状は全面研磨の上仕上げであった。	
橋詰 溝状 遺構	高台付 碗	口縁～底 部残存	① 5.0 ② (14.4) ③ 6.6	①灰黄褐色。 ②砂粒、石英含む。 ③良好。	水平軸から57°の立ち上がりをもつ碗である。低く丸い高台からゆるやかな腰をもって口縁にいたる。	体部中央に沈線状のくぼみがめぐる。体部の内外面各1ヶ所に「車」の墨書が正位置に書かれる。	焼成は甘く軟質須恵器とも呼ぶのか。



橋詰1号住居跡



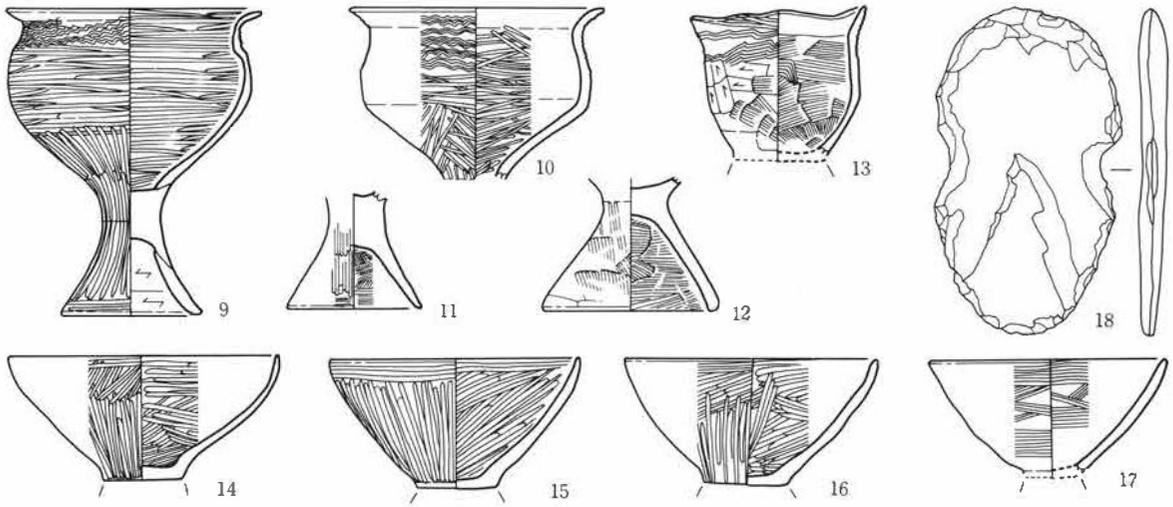
グリット出土石器 0 10cm



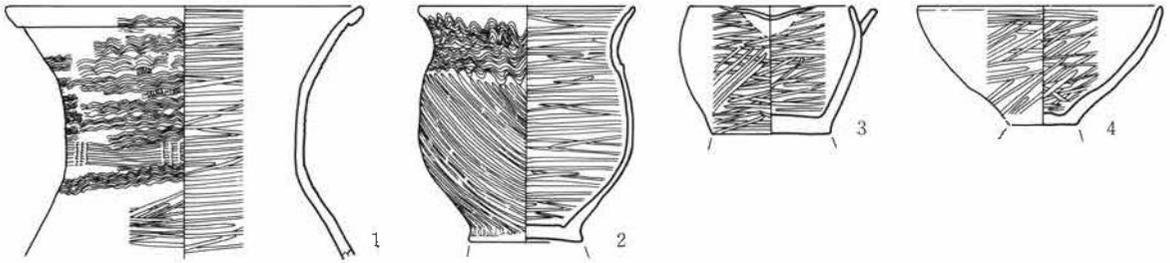
第8図 橋詰遺跡出土遺物

橋詰2号住居跡

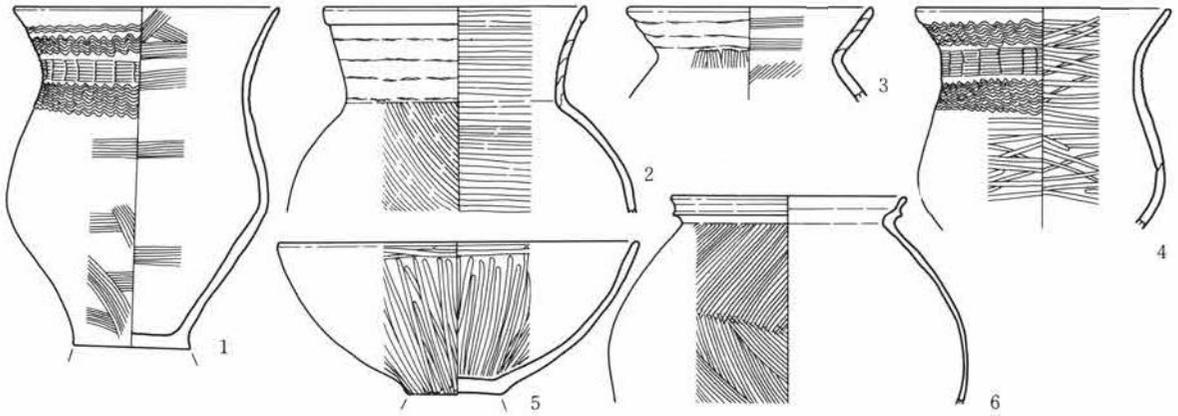
0 10cm



橋詰 2号住居跡



橋詰 3号住居跡



舛海戸 2号住居跡



舛海戸 3号住居跡



溝状遺構出土墨書土器「車」

第9図 橋詰・舛海戸遺跡出土遺物



5 結 語

橋詰・舩海戸遺跡は、溝又川と桜川に挟まれた平地に位置する。この地域の土地改良に伴う道路及び水路の建設予定地内の発掘調査であったが、縄文時代前期・弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代の住居跡が確認された。川場村では、各時代遺物の出土は知られていたが、発掘調査が実施されたのは、本遺跡が最初である。面積的には少ない発掘であったが、次のような成果や問題点が指摘できよう。

〔成果と問題点〕

- ① 河川に挟まれた平地も、良く観察すると1mから数10cmの微高地が複雑に入り組み、その微高地上を中心に遺跡が広がること。
- ② 縄文時代の住居跡は、この微高地以外の低地にも広がる可能性があること。
- ③ 弥生時代後期の住居は、他の地域と同じように長方形のプランを呈すること。
- ④ 古墳時代前期の住居跡がこの地域でも確認されたこと。またその住居のプランは、正方形に近いこと。
- ⑤ 古墳時代前期の住居跡から、S字口縁を持つ土器と共に、口縁部に輪積痕跡を残す土器が出土していること。
- 平安時代の溝状遺構から「車」の墨書土器が出土していること。同じ墨書土器が、川場村公民館所有の中にもう一例ある。

〔問題点〕

- ① 橋詰1号住居跡に見られる、住居内土坑の性格について。柱穴の位置より住居に伴うことは間違い無いと思うが、その位置が住居のほぼ真中であり、当然埋められていたはずであり、その性格は不明である。奈良時代以降の住居跡からは、床下土坑といわれる土坑の確認例は知られているが、この時代での例は初めてであり、今後の調査例を待ちたい。
- ② 橋詰2号・3号住居跡で南東コーナーに、胴部以下を欠いた土器が正位に床面に置かれた状態で出土していたが、その位置や土器の状態に共通性があり、何らかの意味が考えられる。他遺跡でも同様な例が知られており、今後検討が必要である。
- ③ 橋詰2号住居跡に見られる、土器の出土状態は、3号住居跡・舩海戸3号住居跡に比べその数が異常に多い。この住居跡の床面が柔らかく、建設から破棄までの間が短いことと考え合わせ、その破棄の状況が尋常で無かったことが推定される。
- ④ 舩海戸2号住居跡から、樽式土器の他、S字口縁土器と口縁部に輪積痕を持つ土器が出土している。S字口縁の土器は石田川式土器であり、輪積痕の土器は、赤井戸式土器の影響を受けた土器と考えられる。古墳時代前期の混沌とした様子がこの土器の伴出状態からも知られる。近年古墳時代前期の住居跡の発見が、利根・沼田地方で相次いでおり、それらの検討がなされれば、この混沌とした時代の様相が解明されよう。
- ⑤ 橋詰3号住居跡を切る状態で検出された、溝状遺構で出土した土器に「車」の墨書があるが、川場村内での同墨書土器は二例目である。墨書の目的・意味がはっきりしない現在、「車」についての考察は差し控えたいが、「車郷」との関係も考慮する必要があるだろう。

第Ⅲ章 高野原遺跡

1 調査の経過

昭和40年代に入り、わが国は経済の高度成長を続け、新設工場の建設など設備投資が活発化し、全国的にみても工場進出が極めて高い水準で進んでいた。しかし、同時に、都市への人口集中という傾向が進行して、都市部での過密と、農山村での過疎という事態が生じ、従来の地域整備の関係法や地域開発の制度では対処が難しくなってきたのである。このため、国は、昭和45年に、「過疎地域対策緊急措置法」を、ついで翌46年には「農村地域工業導入促進法」を制定した。国のこうした動きに対応して、群馬県は、昭和45年にまず「群馬県過疎地域における県税の特例に関する条例」を、ついで昭和47年に至り、「群馬県農村地域工業導入地区における県税の特例に関する条例」を制定した。これによって事業税・不動産取得税・県固定資産税の課税免除など、企業に対する優遇措置を講じて当該地区地域への工業導入の促進をはかろうとするものであった。

市町村が計画主体となって動いたのは、昭和46年度に勢多郡新里村、吾妻郡吾妻町、多野郡吉井町、北群馬郡小野上村等であった。そして群馬県が計画主体となってきたのは、昭和46年度の、吾妻郡吾妻町の川戸地区、ついで沼田市と利根郡川場村にまたがる横塚・生品地区が昭和47年度に設定された。高野原遺跡は、この横塚・生品地区にかかわるものであった。

群馬県における農村工業導入地区の設定状況

市町村名	地区名	計画区分	立地企業名	面積 (㎡)	設定年度	立地年	操業年
沼田市 川場村	横塚・ 生品	県	ニューポート(株)	443,691	昭47	昭47	昭49
			東洋住宅工業(株)			47	49
			群馬セノー(株)			47	55
新里村	新川	市町村	ホリール(株)	46,456	46	47	48
富岡市	富岡	〃	サンヨー食品(株)	75,240	47	48	51
吾妻町	川戸	県	不二紙工(株)	201,000	46	49	50
吉井町	馬庭	市町村	高崎金属工業(株)	64,490	46	49	51
吾妻・東村	岡崎	〃	(有)永沼製作所	48,290	48	49	—
北橋村	上南室	〃	北海道PSコンクリート	36,610	49	49	52
月夜野町	栃原	〃	オー・ケー・ピー(株)	36,610	49	49	51
小野上村	村上	〃	群馬カートン	(28,021)	46	50	50
				15,986			
				昭和55年に縮小			
新里村	峯岸山	市町村	(株)三ツ葉電機製作所	45,502	48	50	51

(昭和57年「現代群馬県政史」第3巻より作成)

昭和40年代に入って、本県の文化財保護行政は大きな変革を迫られていた。すなわち大規模な開発事業によって、各地における埋蔵文化財の破壊が相ついでおこり、その対応の遅れが現実的になってきていた。また、国レベルにおける大型プロジェクト事業(上越新幹線・関越自動車道・上武国道)をはじめ住宅団地・

工業団地・道踏・土地改良・河川改修・区画整理・採石採土などのほか学校や公共施設の建設計画が相つぎ、これらに加えて、異常なまでのゴルフ場建設計画が浮上してきていた。群馬県教育委員会はこうした事態を重要視して、それまで社会教育課の文化財係の数名では対応しきれないとして、昭和47年4月、まず文化財保護室(10名)を設置し、さらに翌48年には文化財保護課(30名)をスタートさせ、本格的に対処することになり、県段階においても大規模な開発事業に際して事前の調整に対応していくことが出来るようになった。

県商工労働部の繊維工鉦課が主管していた農村工業導入地区の具体的事業との調整で、沼田市と川場村にまたがる横塚・生品地区の埋蔵文化財の問題が表面化してきたのは、昭和48年6月25日のことである。この日、進出を決めていた勢能株式会社の担当者が初めて県教委の文化財保護課に来庁され調整が始まった。もともとこの地区、つまり沼田台地の縁辺、薄根川と田沢川周辺には古墳や弥生時代後期の土器の出土地(門前の橋詰遺跡や寺谷遺跡)の存在が知られ、当該地区からも農作業などで弥生土器の単独出土が周知されていた。また平安時代当初の文献である「和名抄」には、利根郡内には「沼田・男信・笠科・呉桃」の4郷が挙げられているが、そのうちの沼田は沼田、男信は生品として現存地名が充てられることから、古代における文化遺産の存在は当然注目される地域でもあった。

会社側との調整の第一段階は、包蔵地の場合(1)建築物などを地区除外(2)ひろがりによっては地区に取りこんで保存(3)やむを得ずかかるものについては記録保存を前提にして発掘調査をする、といった考えが基本的な方針であり、且つ又一般論でもある。7月18日になり、保護課の職員、柿沼恵介を現地に派遣して視察(表面観察)をすることにした。7月20日の現地調査では、地表面に散布している遺物は須恵器片が主であるとのことであった。この年すなわち昭和48年は「事業を進めるためには何としても発掘調査をすることが前提である」こととしながらも、県教委はこの年スタートしたばかりの上越新幹線・関越自動車道・上武国道などの大型プロジェクトに手一杯なため対応出来ないまま推移した。

昭和49年3月12日、会社側は設計変更図を提示する等努力をみせてきたもののその案も発掘調査の結果如何で何ともしがたく、両者による模索が続き、地元の沼田市や川場村側からの対応も調査担当者がみつからないという現状の中で具体的な進展はみられないままで、企業側の憂慮は深刻なものとなってきていた。

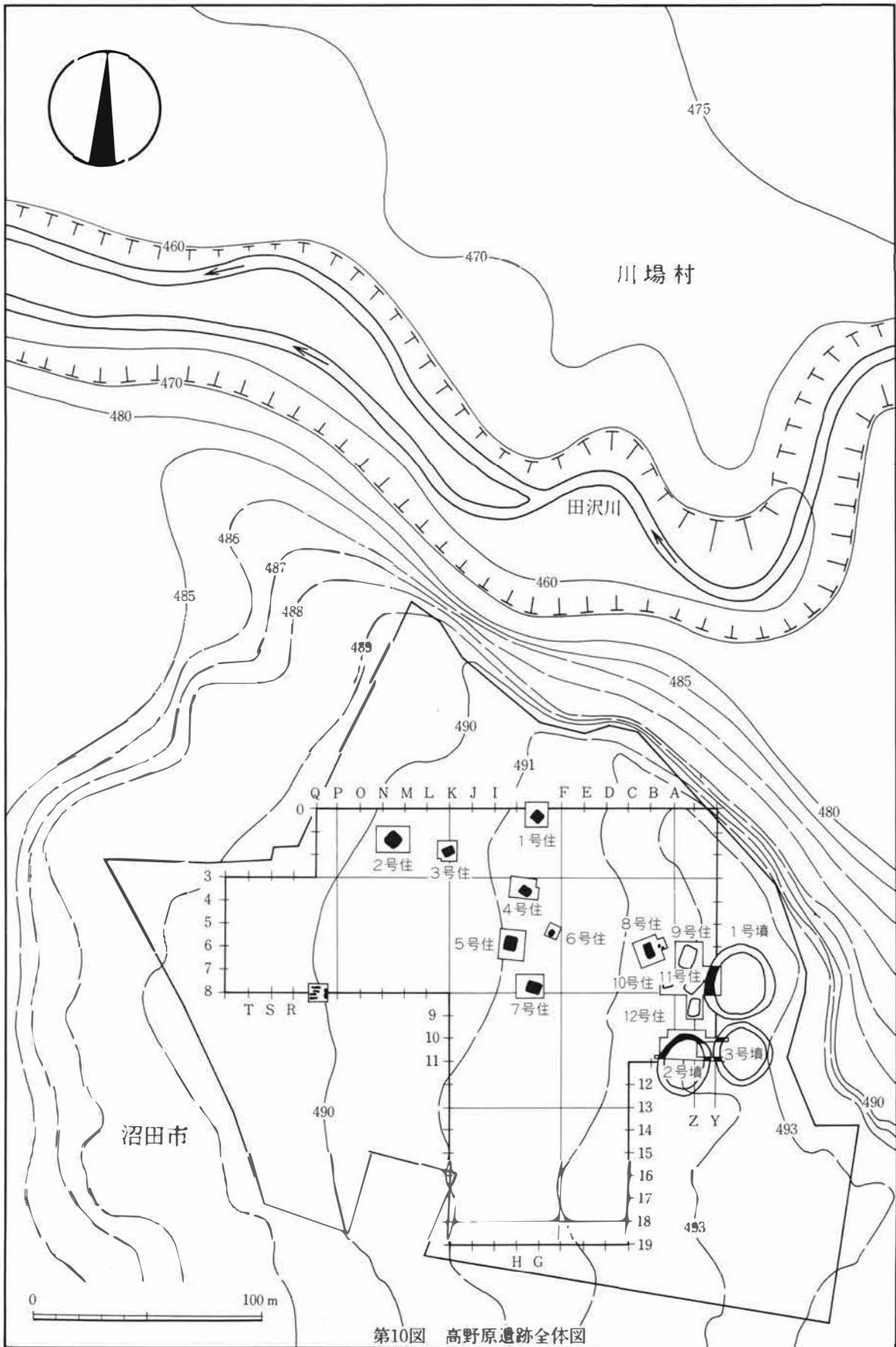
昭和49年度に入り、4月18日、再び県職員(森田秀策と清水和夫)が現地に赴き、テストボーリングを2か所設け地層の確認(榛名山からの軽石堆積があること)のほかは特に遺物の確認が不可能であった。周知の個所からは若干の距離があるようにみられた。そして、5月以後の調査についても協議をし県教委が会社側の申し入れにより、調査を担当することもやむを得ない状況であることとなり、4月20日に至り発掘届などの事務的準備を進め、5月8日、発掘担当者の飯塚卓二、清水和夫が会社側と協議、5月13日からおよそ1か月の予定で予備調査に入ることにした。

5月の後半に入り、弥生時代の住居跡3か所を確認し、引続き周辺の確認を急ぐことにした。

6月15日には、全部で区域内に12戸の住居跡が存在しており、ほかに古墳の周堀が3か所存在することと等、かなり全体の情報が得られた結果、(1)工場の建設計画との調整が可能になってきたこと、(2)今後の調査計画の対応のみとおしもできることになった。

6月17日、勢能株式会社側との折衝の結果、(1)マット工場1棟は西へずらし(2)他の1棟は南へずらす(3)その結果No.1とNo.9~12の5つの住居跡と、3基の周堀は除外することができ、No.2~8の7か所を精査することとし、当初の予備調査予定から、本調査へと継続していくことになった。

こうした基本方針にもとづき、6月21日、会社側も調査の継続について了解し、8月9日までにすべての現地調査を終了し、翌10日、器材や出土遺物の引揚げなどを実施し一段落をみたものである。



第10図 高野原遺跡全体図

2 遺構

本遺跡からは住居跡12軒と、弥生時代後期の土坑2基、古墳4基、墓坑4基が検出された。発掘調査の実施にあたって、関係者間で話し合いがもたれ遺構の残すことが可能な地区については極力緑地として残すことが決定された。従ってすべての遺構を調査しているわけではない。

住居跡

住居跡は12軒を確認した。そのうち発掘調査を実施したのは2号～8号の7軒であり、残りの5軒は工事にかからないためプランの確認で調査は終了している。住居跡同士の切り合い関係はなくすべて単独の住居跡である。

1号住居跡

住居跡のプランを確認したのみで内部の発掘は行っていない。遺跡の最北部のG-00区に位置する。長軸4.9m、短軸4.5mの正方形に近い形を呈している。本遺跡の住居跡の中では中規模の大きさである。遺物は出土していない。

2号住居跡 (第11図 図版13)

M-01区にあり、遺跡の最西端に位置している。東側に3号住居跡がある。長軸6.48m、短軸6.26mで、長軸方位はN-70°-W。今回調査した住居跡群の中で最大の大きさを誇る。壁高は確認面から平均65cmで、壁下には周溝が全周する。主柱穴は4本であるが、南西隅に支柱穴と思われるピットがある。炉跡は、P1とP2の中間にある。不整形で中央部は良好に焼けている。また、焼土上面に細長い枕石が設置されている。貯蔵穴は西壁中央やや北寄りの壁下で発見された。不整形で深さ40cmを測る。本住居跡は焼失家屋で、炭化材と焼土が大量に検出されている。特に北壁付近及び貯蔵穴付近と南東コーナー付近で良好な状態でみられる。

出土した遺物(第19図)には壺・甕・埴・高坏などがみられるが、スプーン状土製品が出土しており、注目される。時期は古墳時代初頭石田川期である。

3号住居跡 (第12図 図版14)

K-02区にある。長軸5.16m、短軸4.11mの隅丸方形を呈し、長軸方位はN-62°-N。壁高は確認面から26cmで、周溝はない。柱穴は4本確認できた。東壁と西壁の壁下中央部に径55cmほどの柱穴2本(P1・P2)及び反対の辺の中央部に径23cmのやや小さな柱穴(P3・P4)の2本である。床面はよく踏み固められており、ところどころに粘土がみられる。また炭化物が炉跡を中心に12片ほど散在して検出されたが、床面等に焼土等を検出しないことなどから焼失家屋ではないものと考えられる。炉跡は住居跡中央部にある。やや広がりを見せる横長の形状で、1個の枕石を持つ。

出土遺物(第20図)は、それほど多くない。折り返し口縁を持つ壺形土器(1)、小型壺(2)高坏(3・4・6)、埴形土器(5)と紡錘車(7)がある。時期は古墳時代初頭石田川期である。

4号住居跡 (第12図 図版15)

G-03区にあり、長軸4.92m、短軸4.37mの隅丸方形で、長軸方位は、N-81°-W。壁高は35cmで、周溝が東壁下及び北壁と南壁の東寄り付近に認められる。柱穴は主柱穴としてP1・2・4があるが、北西部分では発見されなかった。また南東コーナーの周溝中に壁柱穴が4から5本認められる。床面は貼り床となっている。状態は炉跡付近が堅固であるものの、周辺にいくとやや軟弱となる。炉跡は住居跡中央よりやや北側にある。掘り込みが浅く焼土も薄い。使用状況が良くなかったことが想像される。貯蔵穴は南壁の中

中央壁下にあり、53×41cmの楕円形で深さ28cmであった。遺物は出土していない。住居跡内からは炭化物がわずかに検出されているが、焼失家屋ではない。

出土遺物（第20図）は、甕の完形（1）と折り返し口縁を持つ壺（2）のほか高坏等がある。また特殊遺物として2号住居跡からも出土したスプーン状土製品がある（9）。出土土器等から本住居跡は古墳時代初頭石田川期である。

5号住居跡（第13図 図版16-1）

H-06区にあり、遺跡のほぼ中央部に位置する。東に6号住居跡、南に7号住居跡がある。長軸5.96m、短軸5.84mの隅丸方形で、長軸方位はN-5°-E。住居跡の大きさでは2号住居跡に次ぐ規模である。壁高は44cmであり、周溝は東壁下で一部途切れるもののほぼ全周している。柱穴は4本で、各々直径が22~26cmと細いものの、深さは1m程に及ぶ。貯蔵穴は、南壁下中央部やや西寄りにあり、1.4m×0.78m、深さ20cmの不整楕円形を呈する。床面は良好で、全体的に中央から壁方向に向けて傾斜している。炉跡は、北のP1・2の中間地点で検出された。地床炉で、炉内に石を持つ。住居跡内からは大量の炭化物が検出された。出土状況を見ると住居跡中央部を中心として、放射状に広がっている。また各壁際には大量の炭化物があり、壁を見ると部分的に焼けており、凹凸がみられ、炭化材付近では焼土が広がり床面も焼けている状態であった。以上の状況から本住居跡は焼失家屋であると考えられる。

出土遺物（第21図）は、破片の状況ながら大量に出土している。（1）のS字口縁甕形土器は胴下半部を欠損するものの、北壁の近くで床面に密着して検出したものである。（2）は、貯蔵穴付近から出土したものでこれも床面に密着して検出したものである。そのほか高坏（4）が住居跡中央部で発見されている。住居跡の年代は床面密着の遺物などから古墳時代初頭石田川式のものである。

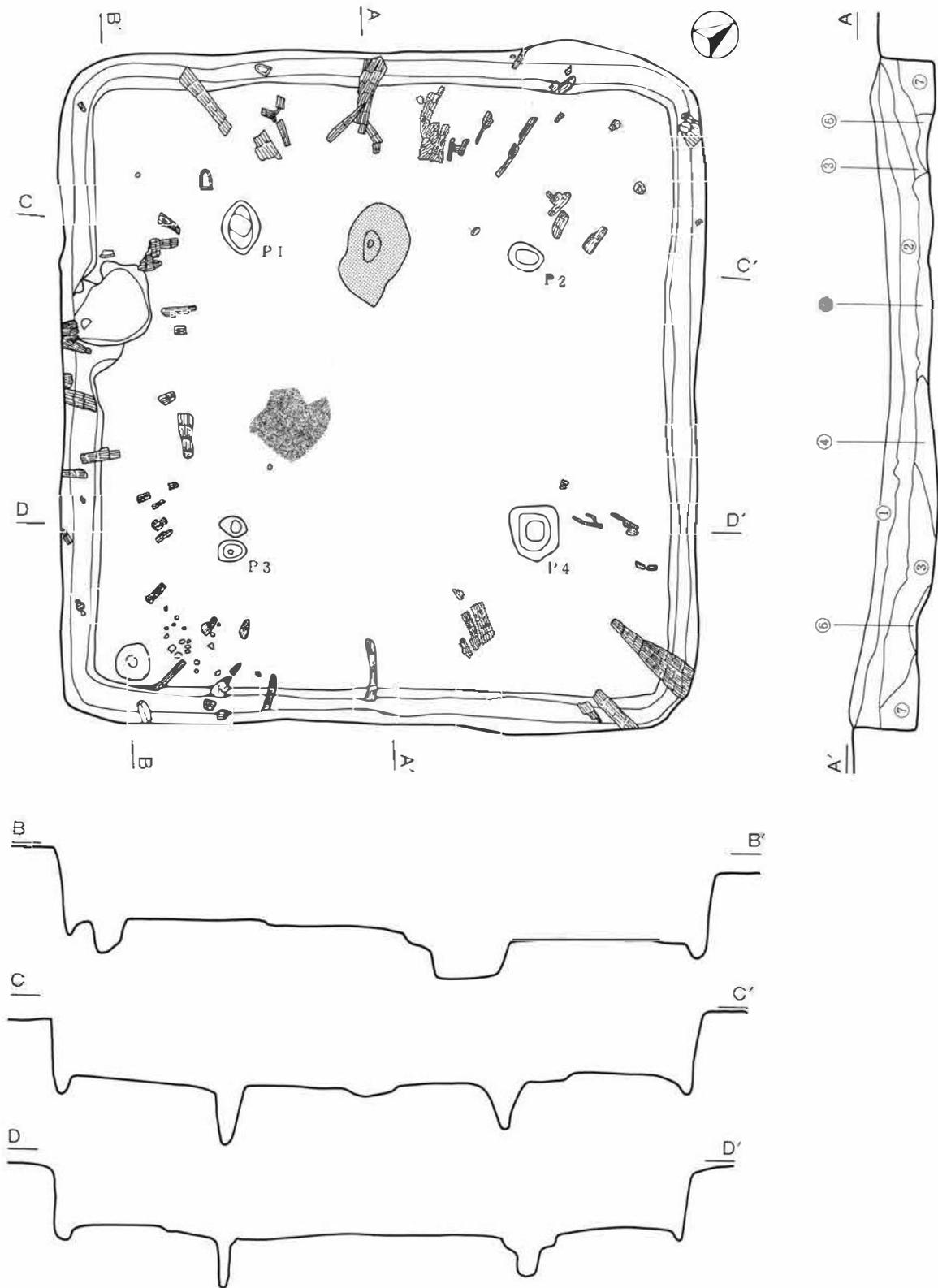
6号住居跡（第14図 図版16-2）

F-05区にあり、長軸3.20m、短軸2.64mの隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-25°-E。本遺跡の中で最も小さな住居跡である。主柱穴は発見されていない。壁下に6本の小ピットが検出されたが、住居跡に伴うものであるかは不明である。床面は全体に固く踏み固められている。貯蔵穴及び周溝は検出されていない。また、炭化材と焼土が大量に検出されていることから、焼失家屋であると考えられる。炉跡は住居跡中央部やや北寄りにあり、52×46cmの不整円形を呈し、深さ11cmで枕石2個を配している。焼土の状況も良好であり、よく使用されていたことが分かる。

出土遺物（第21・22図）は、小型の住居跡の割には大量に発見されている。大型の甕6個体（1~5・8）と小型の甕（6）、大型の鉢（10）、小型の鉢（7）、壺（9）、片口の鉢（11）等である。弥生時代後期樽式のものである。

7号住居跡（第14図 図版17）

G-8区にあり、長軸5.78m、短軸5.58mの隅丸方形を呈し、長軸方位はN-0°-E。主柱穴は4本で、そのほか4本の小ピットがあるが、住居跡に伴ったものかは不明である。周溝は検出されていない。貯蔵穴は南壁中央部にあり、中から遺物が出土している。住居跡北側のP1とP2の中間に径50cmほどの円形を呈する炉跡があり、中央部に枕石がある。炉跡の南には長径1.4m、深さ0.5m程のピットが隣接しており、内部には炭化物が大量に詰まっている。炉跡に伴う灰出し用のピットではないかと考えられる。床面において大量の炭化物を検出している。特に北壁と東壁に近いところから大量に検出されている。焼失家屋と考えられる。出土遺物（第23図）のうち（1）は貯蔵穴から出土した台付きの甕である。そのほか鉢形土器等を検出しているが遺物量は少ない。



①黒色土 F:P直下の土層でF:Pを多量に含む。 ②暗褐色土 ローム粒子・軽石を少量含む。 ③暗褐色土 ローム粒子・軽石を極少量含む。 ④茶褐色土 ローム粒子を多量に含む。 ⑤暗褐色土 ローム粒子・炭化物を少量含む。 ●焼土 ⑦明褐色土 ロームブロックを多量に含む、炭化物を少量含む。

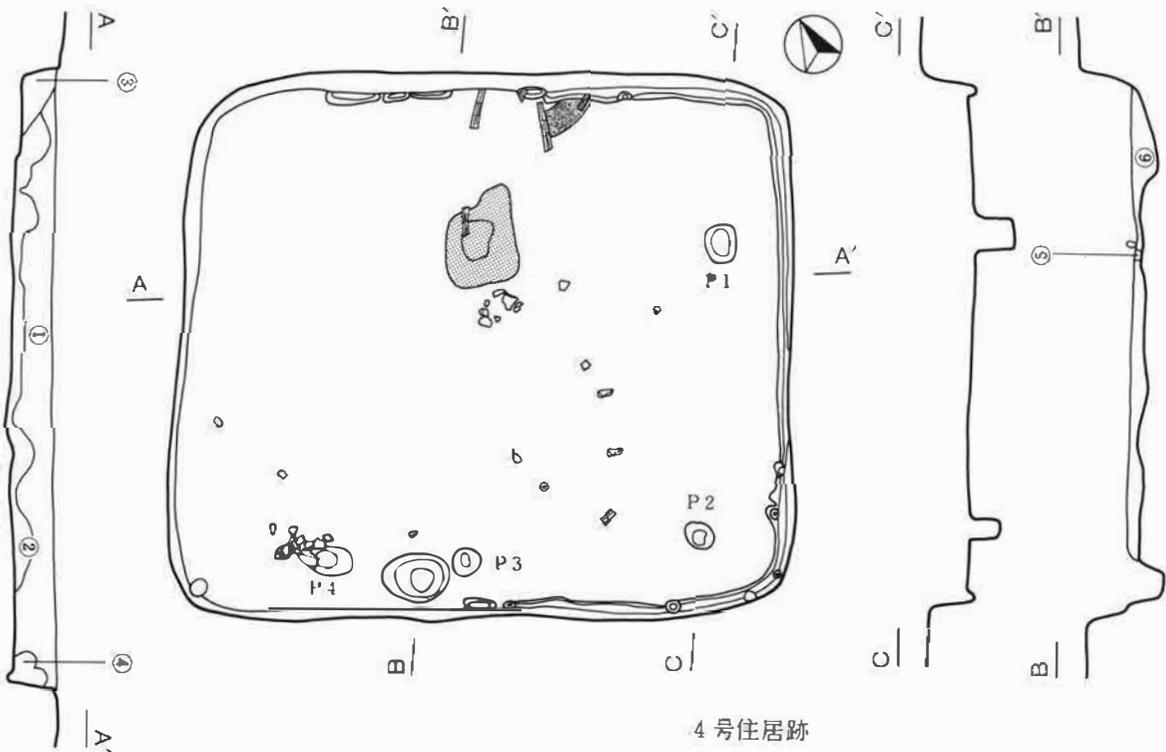
第11図 高野原2号住居跡

0 2m



3号住居跡

- ①黒色土 ローム粒子と炭化物を少量含む。
- ②褐色土 ローム粒子を多量に含み、炭化物を極少量含む。

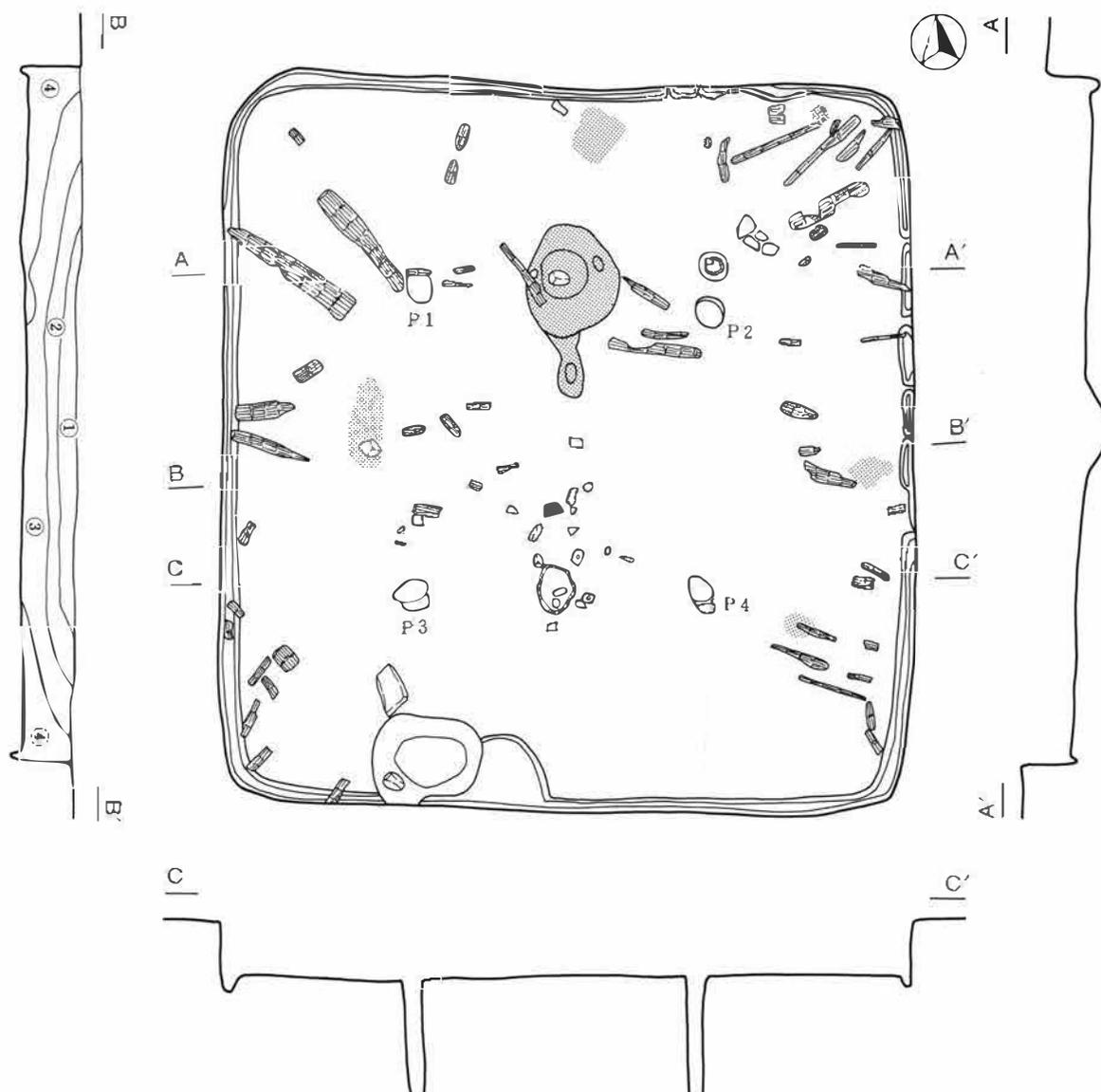


4号住居跡

- ①黒褐色土 ローム粒子を極少量含み、粘性弱く荒い土層。
- ②暗褐色土 ロームブロックをやや多く含む。
- ③黒褐色土 軽石を含み、粒子が荒い。
- ④暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- ⑤焼土ブロック
- ⑥明褐色混土層

第12図 高野原3・4号住居跡

0 2 m



●黒色土 FPを多量に含み、荒く堅い土質。 ●黒色土 ローム粒子を多量に含み、粒子の密な土質。 ③黒褐色土 ロームブロックを多く含み、炭化物を少量含む。 ④黒褐色土 焼土・炭化物を多量に含む。

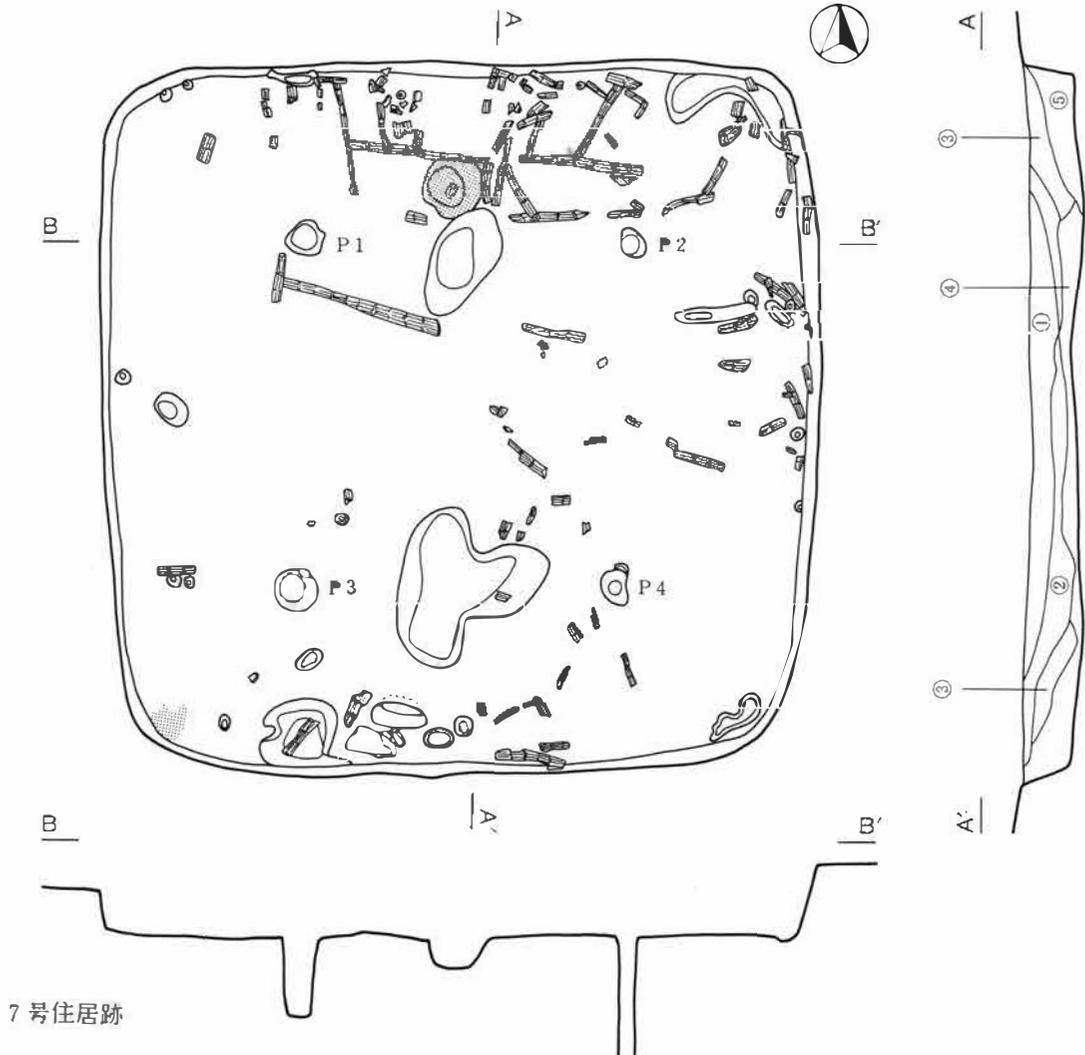
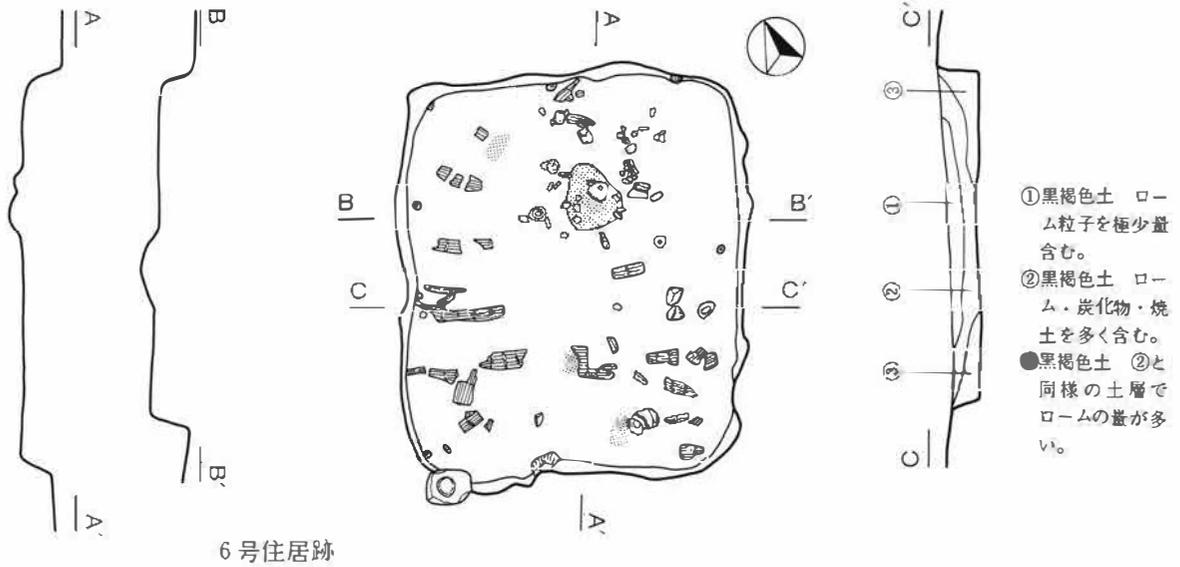
第13図 高野原5号住居跡

0 2m

8号住居跡 (第15図 図版18-1)

B-6区にあり、長軸6.82m、短軸3.40mの隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-28°-W。主柱穴は4本で、そのほか南壁下に2本の柱穴がある。おそらく入口遺構の柱受けではないかと想像される。西壁中央部の点線で表示したピットは、内部の土壌が柔らかく、木の根等による攪乱ではないかと考えられる。炉跡は、住居跡北寄りの中央部にある。径50cmほどの円形を呈している。また、柱穴で囲む住居跡の中心部が若干くぼんでいる状況がみられる。

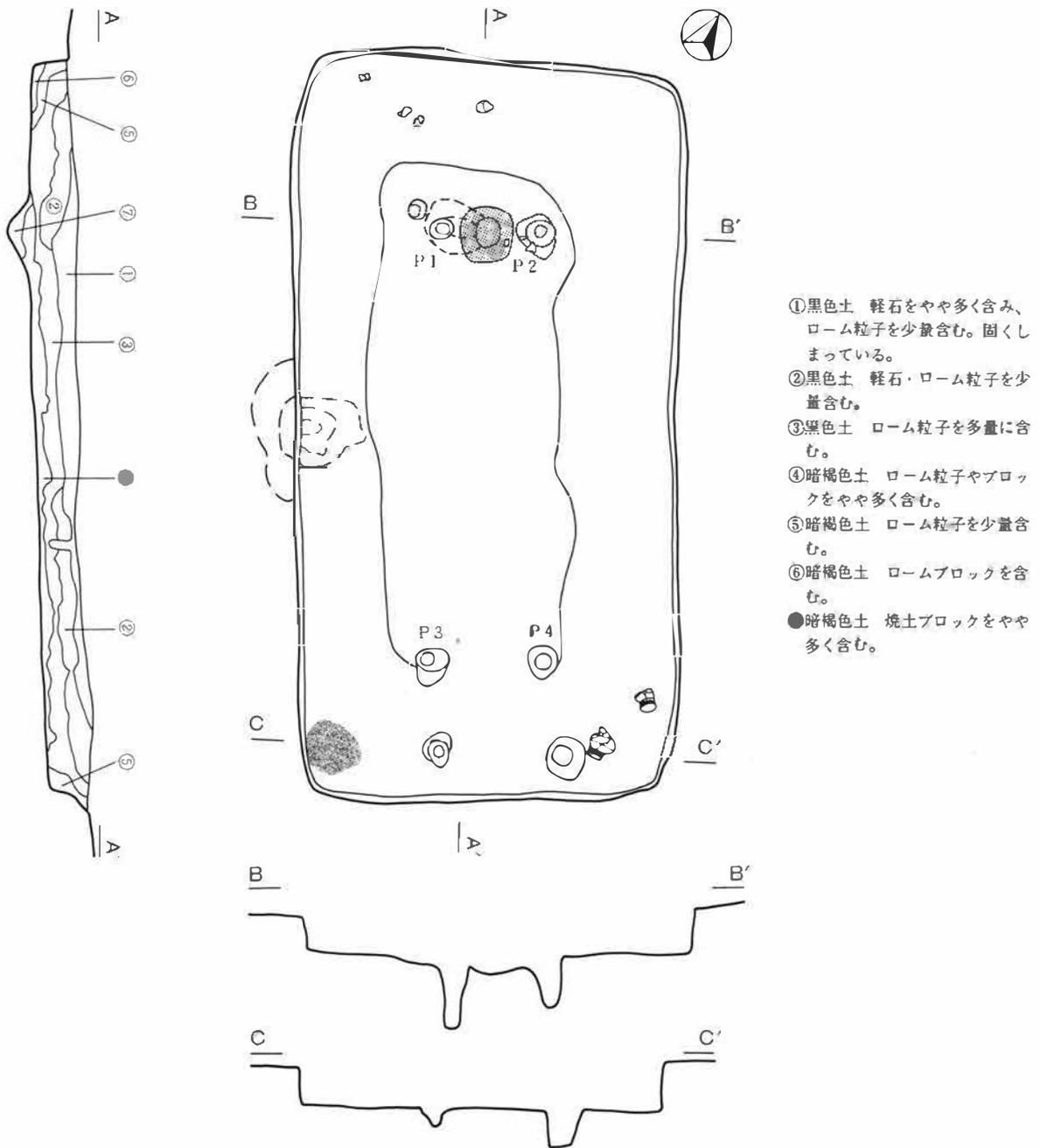
出土遺物 (第23図) は、住居跡内からまんべんなく出土している。特に南東コーナー付近で出土した甍形土器の完形品 (1・2) をはじめ、そのほか鉢形土器 (5) 等がみられる。住居跡の年代は遺物等から弥生後期樽式の時期である。



①黒褐色土 軽石を少量含む。②黒褐色土 ローム・焼土粒子を含む。●褐色土 ローム・焼土・炭化物を全体的に含む。●褐色土 ローム粒子を全体的に含む。⑤褐色土 ロームブロックを多く含み、焼土・炭化物を含む。

第14図 高野原6・7号住居跡

0 2 m



第15図 高野原8号住居跡

9・10・11・12号住居跡

遺跡の東側に点在する住居跡群で、保存が決定したため発掘調査は実施していない。各住居跡の確認面での規模は次の通りである。

9号住居跡。長軸9.00m、短軸6.00m、長軸方位N-16°-E。

10号住居跡。長軸4.60m、短軸2.70m、長軸方位N-104°-W。

11号住居跡。長軸8.00m、短軸5.80m、長軸方位N-36°-E。

12号住居跡。長軸6.90m、短軸4.50m、長軸方位N-10°-E。

土坑

1号土坑 (第16図)

A-05区にあり、不整長楕円形を呈し、長軸2.22m、短軸0.88m、深さ0.88m、長軸方位N-36°-W。土器が土坑の北側よりから出土した。底面から若干浮いた状態で口縁部を下にして設置している。胴部は最大径のところまで残存している。胴部下半部及び底部は耕作による削平を受けており検出していない。

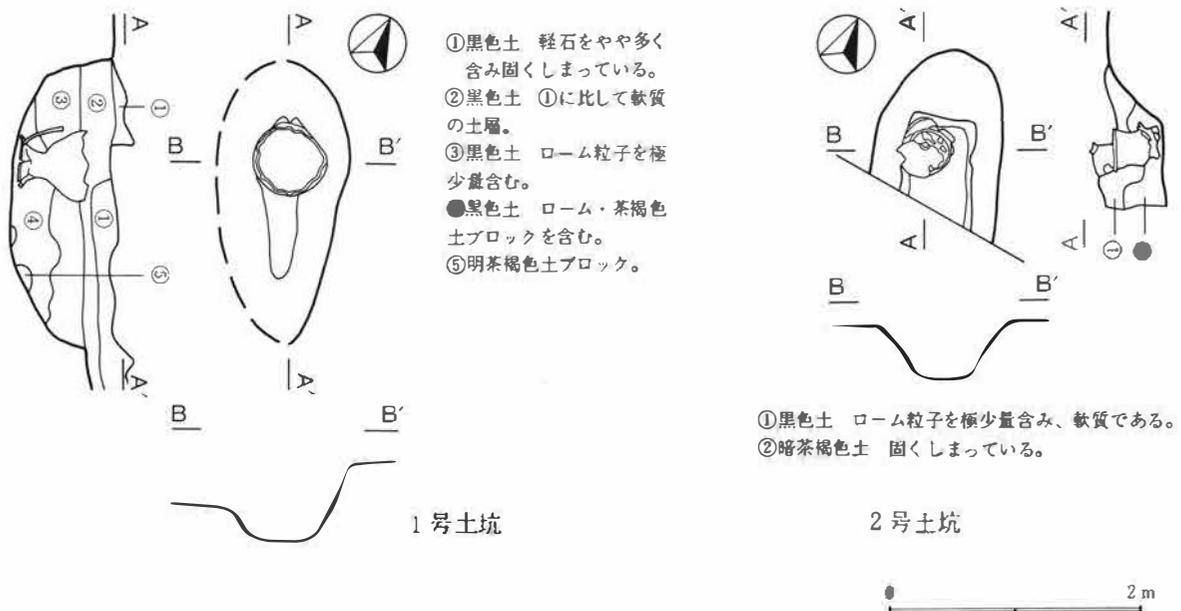
土器(第25図上段1)は、弥生時代後期樽式の大型甕形土器である。最大径は胴部のかなり下部にあり、下半部が欠損しているため不明であるが、かなり下膨れする器形と考えられる。口縁部は折り返しとなっており、3~4単位の波状文が、折り返し口縁部と頸部に施文されている。

2号土坑 (第16図)

1号土坑と同じA-05区にあり、南東に1m程離れる。本土坑の南には確認調査時のトレンチが走っている。その際に程土坑を削り落としてしまった。従って全体の形状ははっきりしない。現存する規模は、長軸1.5m、短軸1.02m、深さ0.4mで、長軸方位はN-24°-Wを測る。

土坑内から出土した土器は、1号土坑同様北寄りの位置で検出した。全部で4個体であるが(第25図下段1~4)、特異な形で出土した。床面に接して頸部以下を欠損する甕形土器(2)を、口縁部を上にして設置し、その上に同じく胴下半部を欠いた甕形土器を(1)、口縁を上にした形で重ねている。(1)の口縁部の中には、(3)の土器が破片ではあるが出土し、更にその上を(4)の赤色塗彩した高坏が、脚部を上にして(3)の土器を包むように設置している。

甕形土器を重ね合わせ、その上に赤色塗彩した高坏で蓋をするような形をみせており、この土坑が特別な意味をもっていると考えても差し支えないものと思われる。



第16図 高野原1・2号土坑

古墳と墓坑

古墳は遺跡の東側に3基が、南側に1基が確認された。墳丘自体は削平を受けていたため明らかでないが、周辺には相当数の古墳が点在していたとみて差し支えないものと考えられる。

1号古墳（第17図 図版20-1）

Y-7区で検出された古墳で、東に展開する3基の古墳の中では1番北に位置する。周堀のみの確認であった。溝幅は上端で3.5mを数える。周堀中には東の墳丘部から流れ込んだ葦石が大量に出土した。

主体部は不明。遺物は出土していない。周堀の規模から本古墳は直径約30m程の円墳と考えられる。古墳の時期は不明である。

2号古墳（第17図）

1号古墳の南にあり、X-10区に存在する。本古墳は3号古墳の調査の際に、東側の様子を確認するためトレンチを設けたところ、新たに発見された古墳である。確認できた周堀の上端幅は約3mであった。

主体部は不明。本古墳に伴う遺物は出土しなかったが、古墳の規模は周堀から考えて1号古墳と同じく直径約30mほどの円墳と考えられる。古墳の構築時期は、周堀の中位に榛名山二ッ岳噴火のF層が堆積していることから6世紀中葉以前の構築になるものと考えられる。

3号古墳（第17図 図版20-2）

Z-10区にあり、2号古墳の西にあたる。古墳のほぼ半周程度の周堀を確認した。墳丘上部は耕作のため削平されており、封土については不明であるが、墳丘裾部において一部黒色土の封土が確認できる。周堀の上端部幅は約3mである。葦石は、墳丘裾部と周堀内に散在するが、原位置を示すものはない。

主体部は不明。遺物は発見されていない。周堀の規模から直径23mほどの円墳と考えられる。古墳の構築時期は周堀内中位で榛名山二ッ岳F層が純層で堆積していることから、6世紀中葉以前の構築と考えられる。

4号古墳（第18図 図版20-3）

P-07区付近にある。周堀はトレンチ調査を行った際、確認面が浅かったため削平してしまった。上端幅2.3mで他の古墳と較べるとやや細い。葦石は、古墳の東側で根石の一部と崩壊した石が発見された。

墳丘上は新しい時期の墓地となっているため主体部は不明であった。また、本古墳に伴う遺物は出土しなかった。古墳の規模は不明である。本古墳は、榛名山二ッ岳F層を切って構築されている。6世紀中葉以前の構築になるものである。

墓坑群（第18図 図版20-3）

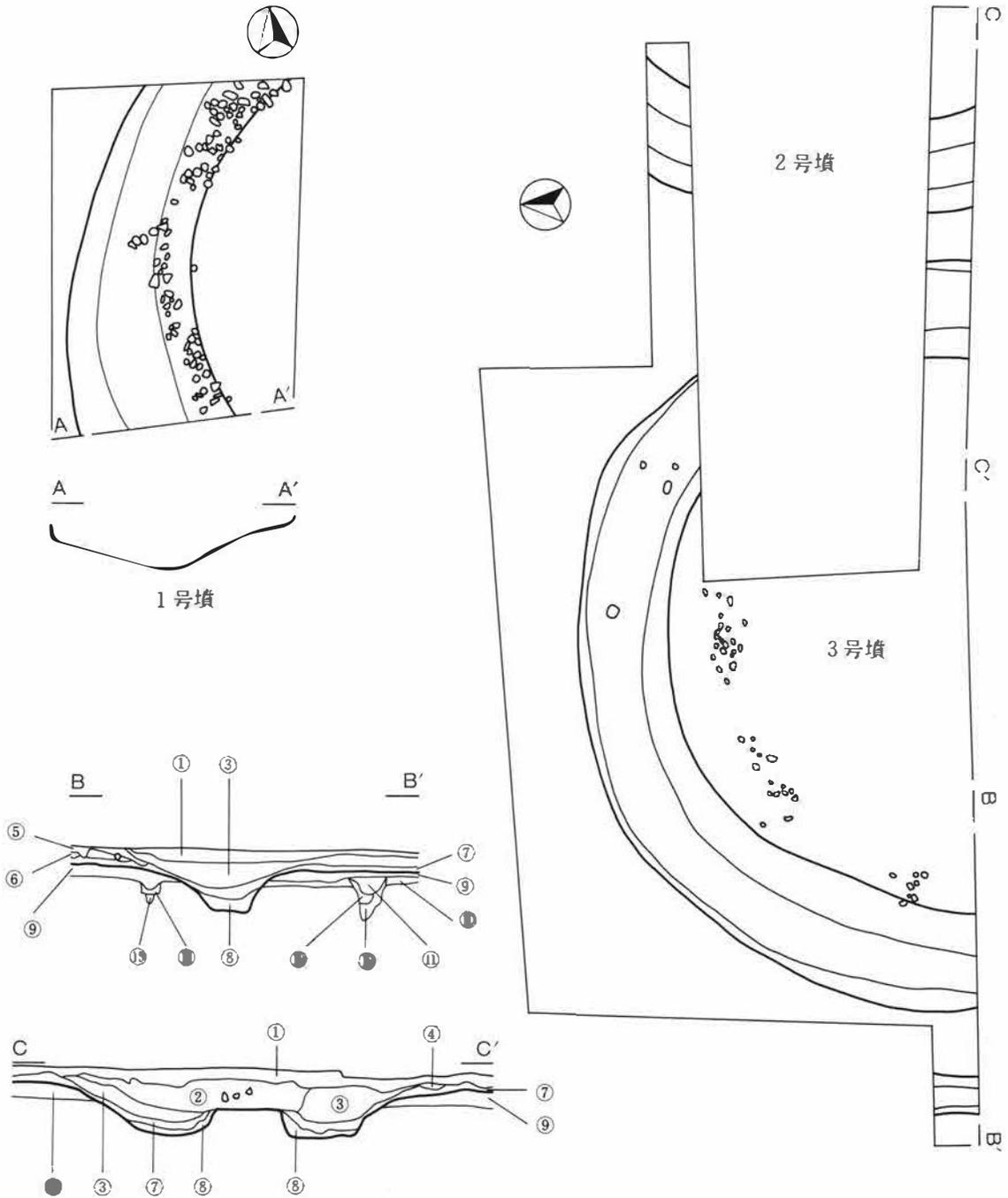
4号古墳の墳丘上に4基の墓坑が検出された。墓坑は共通の方向性を持ち、石を敷き詰め榛名山二ッ岳のF層を切ってつくられている。第26図に示したように9世紀代の須恵器坑・甕・短頸壺等が出土しており、構築の時期を示していると考えられる。（弥生後期の土器も少量混入。）各墓坑の規模は下記のとおりである。

1号土坑 長軸4.40m、短軸1.10m、長軸方位N-85°-W

2号土坑 長軸3.54m、短軸0.94m、長軸方位N-86°-W

3号土坑 長軸3.46m、短軸1.10m、長軸方位N-79°-W

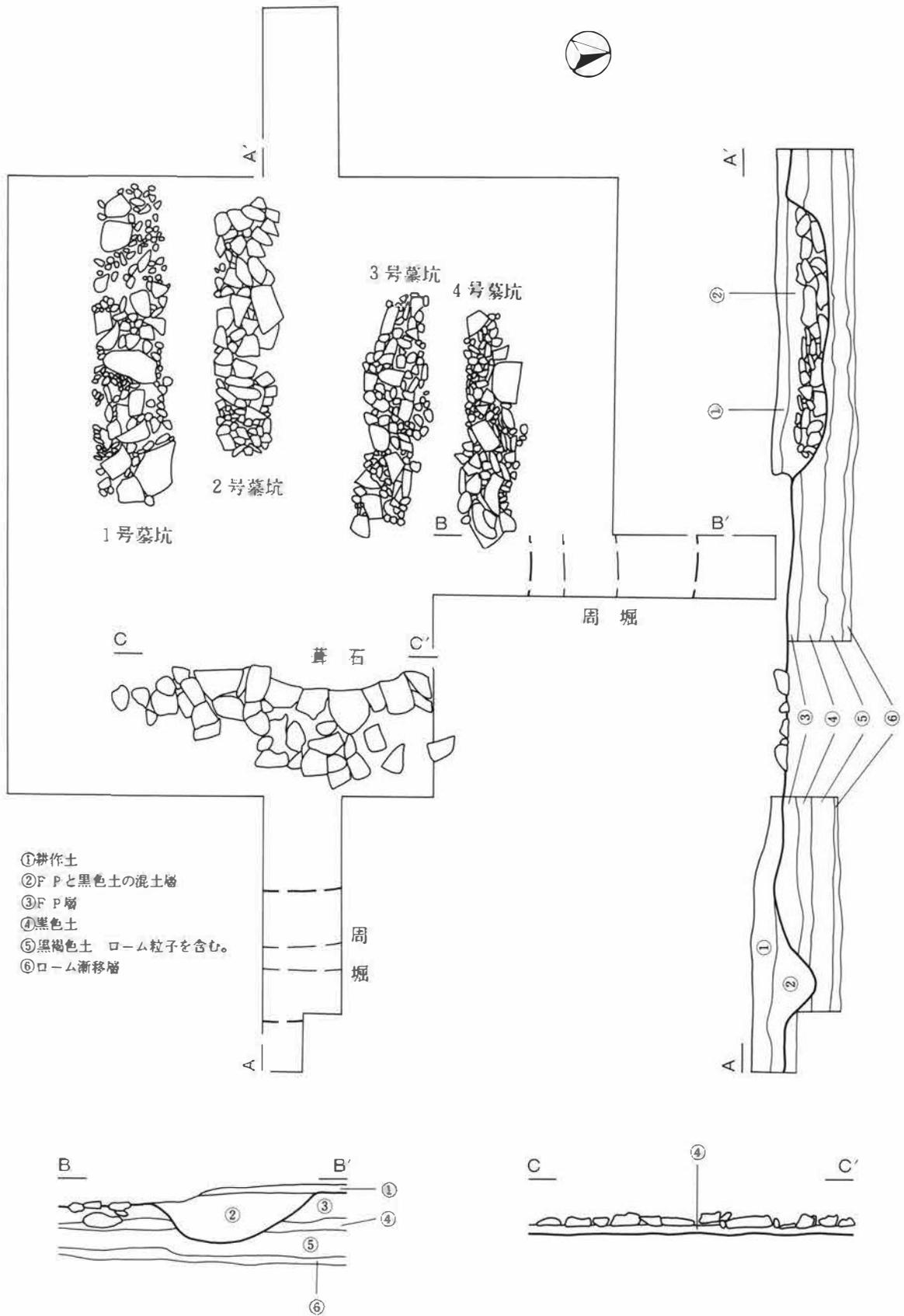
4号土坑 長軸3.28m、短軸0.84m、長軸方位N-86°-W



- 耕作土
- ②攪乱層
- ③F P層 上面に部分的に黒色灰層が堆積。
- ④褐色土 ロームブロックを含む。
- 褐色土 軟質な土層。
- 褐色土 ロームブロックが混入。
- ⑦黒褐色土 ローム粒子を極少量含む。
- ⑧黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- ⑨褐色土と黒褐色土の混土層。
- ⑩黒褐色土 ロームブロックと粒子を含む。
- 黒褐色土 ややしまっている。
- ⑫黒色土 やや軟質な土層。
- ⑬黒褐色土 ローム粒子を極少量含む。
- ⑭黒褐色土 ローム粒子が少量混入。
- ⑮褐色土 ロームブロックを多く含む。

第17図 高野原1・2・3号墳

0 10m



第18図 高野原4号墳と墓坑(1~4号)

3 遺 物

遺 物 観 察 表

[法量：①器高②口径③胴径④底径 ()は残存径、復元径]

遺物番号	種 類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
2住 No. 1	壺	口縁部破片 北東隅	① (35) 隆径18.0 ③ — ④ —	①にぶい橙色 ②鉱物粒を含む ③良	有段口縁をもつ壺の有段部。 外面 細かいクシ状工具によるナデ。 内面 ヘラ磨き。	
2住 No. 2	壺	口縁部破片 北東隅	① (7.0) ② (14.5) ③ — ④ —	①黄褐色 ②鉱物粒を含む ③良	頸部から口縁部にかけて外反。 外面 口縁部横ハケ、口唇部横ナデ、胴部ヘラケズリ。 内面 ヘラ磨き。	
2住 No. 3	小型壺	口縁～胴部破片 覆土	① (5.0) ② (8.0) ③ (8.0) ④ —	①明赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	頸部からやや直気味に立ち上がり口縁部で外反する。胴部以下はあまり張らない。 外面 口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。 内面 ヘラ磨き。	
2住 No. 4	壺	口縁部破片1/2 北壁	① (5.0) ② (13.3) ③ — ④ —	①赤褐色 ②鉱物粒・砂粒を含む ③良	頸部からわずかに外反する。折り返し口縁をもつ。 外面 口縁部横ナデ、頸部縦ハケ。 内面 ヘラケズリ。	
2住 No. 5	小型壺	口縁部欠損 北壁(床直)	① (4.8) ② — ③ 9.8 ④ 4.5	●橙色 ②鉱物粒を含む ③良	胴部はあまり張らない。 外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラケズリ。	
2住 No. 6	小型壺	ほぼ完形 北壁覆土	① 11.2 ② 9.5 ③ 9.2 ④ 3.3	①明赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	有段口縁で頸部から胴部へ張り出す。最大頸部に約5mmの穴があく。 外面 ヘラケズリ。	
2住 No. 7	高坏	1/2 中央・西壁・北西壁	① 11.2 ② 9.5 ③ 9.2 ④脚部径10.7	①褐色 ②鉱物粒を含む ③良	頸部からやや外反する口縁部となる。 外面 口縁部ヘラケズリ、頸部から胴部は縦ハケ。	
2住 No. 8	坏	ほぼ完形 東南隅	① 5.5 ② 12.5 ③ — ④ 4.5	①にぶい黄褐色 ②鉱物粒・砂粒を含む ③良	口縁部若干内傾。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	
2住 No. 9	小型碗	1/2 北東	① 4.3 ② 9.0 ③ 9.4 ④ 3.7	①明赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	口縁内湾し、底部は若干上げ底。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	
2住 No.10	小型碗	ほぼ完形 東南隅	① 4.1 ② 6.5 ③ — ④ 3.2	①にぶい赤褐色 ②鉱物粒・砂粒を含む ③良	手づくね状の小型品。口縁部若干内湾。胴部と底部を別々につくる。接合面には爪による圧痕が残っている。	

第三章 高野原遺跡

遺物 番号	種 類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
2住 No.11	高環脚 部	破片 覆土	① (4.0) ② - ③ - ④脚部径 (11.8)	①赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	脚端部はきれいに揃えている。 裾部がやや内湾。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラケズリ。	
2住 No.12	高環脚 部	脚部のみ 北西隅・ 東南隅	① (4.6) ② - ③ - ④脚部径9.7	①橙色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	裾部に向け若干外反する。 外面 ヘラ磨き。 内面 ナデ。	
2住 No.13	高環脚 部	脚部破片 北壁	① (5.0) ② - ③基部径 3.2 ④ -	①にぶい橙色 ②鉱物粒を含む ③良	接合部から裾部にかけてやや広がる。 外面 接合部で粗い削りが見え る。裾部にかけてヘラケズリ。	
2住 No.14	甕	胴部~底 部破片 東南隅	① (14.9) ② - ③ - ④ 8.4	①にぶい黄橙色 ②砂粒を含む ③不良	外面 ヘラ磨き。 内面 ナデ。	
2住 No.15	甕	口縁部欠 損2/3	① (29.8) ② - ③ 31.3 ④ 9.0	①黒褐色 ②鉱物粒を含む ③良	外面 ハケ調整でところにより指 頭痕が観察できる。	
2住 No.16	匙	柄のみ 北西壁	①柄の長さ(4.0)	①暗褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	
2住 No.17	紡錘車	1/2 北東隅	①径 6.0 ②厚さ 1.5 ③孔径 0.6 ④重さ 28.05g	①明茶褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	中央部の穴から放射状に短い線と周 辺をめぐる円状の線刻が施される。
2住 No.18	紡錘車	完形 ピット内	①径 3.0 ②厚さ 0.9 ③孔径 0.6 ④重さ 6.1g	①茶褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	
2住 No.19	紡錘車	完形 周溝内	①径 5.2 ②厚さ 1.2 ③孔径 0.6 ④重さ 40.4g	①灰白色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	土製。	
2住 No.20	紡錘車	1/2 北東壁	①径 5.4 ②厚さ 1.2 ③孔径 0.6 ④重さ -	①灰褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	
3住 No.1	壺	口縁部破 片 北東隅	① (6.0) ② (19.3) ③ - ④ -	①黄褐色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	巾広の折り返し口縁を持つ。 外面 折り返し部横ハケ、頸部ハ ケ調整。 内面 ヘラ磨き。	
3住 No.2	小型壺	口縁部~ 胴部破片 南中央壁	① (5.8) ② (9.9) ③ (9.5) ④ -	①茶褐色 ②鉱物粒を含む ③良	頸部から若干内湾きみに口縁部と なる。 外面 ヘラケズリ。	

遺物 番号	種 類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
3 住 No. 3	高坏脚 部	破片 南隅	① (2.0) ② — ③ — ④脚部径 (17.7)	①にぶい橙色 ②鉱物粒を含む ③良	裾部に大きく張り出す。 外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラケズリ。	
3 住 No. 4	高坏	ほぼ完形 南隅	① 11.6 ② 14.1 ③基部径 4.1 ④脚部径 17.8	①明黄褐色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	接合部から裾部に大きく開く。 外面 口縁部ヘラナデ、胴部ヘラ 磨き。 内面 ヘラ磨き。	
3 住 No. 5	埴	口縁部～ 胴部破片	① (3.6) ② (12.2) ③ — ④ —	①赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	口縁部から底部までなだらかな曲 線をもつ。 外面 口縁部横ナデ、胴部ヘラ磨 き。 内面 ヘラケズリ。	
3 住 No. 6	高坏	脚部 覆土	① (6.2) ② — ③基部径 3.5 ④脚部径(10.8)	①赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	外面 縦ヘラ磨き。 内面 横ヘラケズリ。	
3 住 No. 7	紡錘車	完形 南西隅	①径 5.4 ②厚さ 1.7 ③孔径 0.6 ④重さ 52.4g	①褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	
4 住 No. 1	甕	ほぼ完形 南西隅	① 31.9 ② 18.3 ③ 25.8 ④ 7.5	①黄褐色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	外面 口縁部横ナデ、胴部ヘラ磨 き。 内面 ヘラ磨き。	
4 住 No. 2	甕	口縁部～ 胴部	① (13.4) ② 21.8 ③ — ④ —	①褐色 ●砂粒を含む ③普通	折り返し口縁をもつ。 外面 ヘラ磨き。 内面 口縁部付近ヘラ磨き、下部 ヘラケズリ。	折り返し口縁の外面に、ハケ状工具 による爪形文状の文様が1周する。
4 住 No. 3	甕	口縁部 中央部	① (6.5) ② (17.5) ③ — ④ —	①明褐色 ②砂粒を含む ③良	頸部から口縁部にかけてゆるやか に立ち上がり、口管部で直になる。 外面 ハケメ調整。 内面 横ナデによる段がつく。	
4 住 No. 4	高坏	坏部のみ 南西壁	① (6.2) ② 13.9 ③基部径 3.3 ④脚径 —	①赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	接合部から口縁部にゆるく立ち上 がる。 外面 ヘラ磨き。 内面 口管内部横ナデ。	
4 住 No. 5	小型埴	完形 北壁	① 3.5 ② 8.0 ③ — ④ 3.7	①橙色 ②鉱物粒を含む ③良	平底で段をつけて口縁部にいた る。 外面 ヘラ磨き。	
4 住 No. 6	器台	脚部 中央部	① 4.3 ② — ③基部径 2.3 ④脚部径 5.6	①暗赤褐色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	接合部からあまり広がりを見せな い脚部を持つ。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	

第三章 高野原遺跡

遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
4住 No. 7	器台	脚部 南西隅	① (5.3) ② - ③基部径 3.4 ④脚部径 8.4	①赤褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラケズリ。	
4住 No. 8	紡錘車	完形 北壁	①径 5.4 ②厚さ 1.4 ③孔径 0.9 ④重さ 56.1g	①にぶい褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	土製。	
4住 No. 9	匙	完形 中央部	①長さ 10.5 ②匙部径 5.0 ③柄部径 1.9 ④匙部深さ 1.5	①にぶい橙色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	全体的に指頭による整形を行った 後、ハケ整形。	
5住 No. 1	甕	口縁部～ 胴部 北西隅	① (14.5) ② 17.1 ③ 24.3 ④ -	①明褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	S字状口縁をもつ。胴部はそれほ ど張らない。 外面 ハケ調整はみられず、斜 めのヘラケズリの後粗いヘラ磨き を施す。	
5住 No. 2	甕	口縁部～ 胴部 貯蔵穴覆 土	① (10.6) ② (15.7) ③ (17.8) ④ -	①暗褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	頸部から差ほど張り出さないで口 縁部となる。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	
5住 No. 3	甕	胴部～底 部 中央部・ 北西隅	① (11.9) ② - ③ (21.1) ④ 6.5	①赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	
5住 No. 4	器台	1/2 中央部	① 13.4 ② 12.9 ③基部径 3.7 ④脚部径 17.4	①赤褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	頸部から口縁部までは比較的直に 立ち上がる。接合部から裾部へは 大きく広がる。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	
5住 No. 5	小型壺	胴部～底 部 中央部	① (9.0) ② - ③ 12.1 ④ 5.3	①にぶい黄褐色 ②砂粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラケズリ。	
5住 No. 6	埴	ほぼ完形 南壁ピッ ト内	① 3.1 ② 8.3 ③ - ④ 4.2	①赤褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③普通	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。 底部でヘラによる面取り痕が観察 できる。	
5住 No. 7	埴	完形 覆土	① 4.7 ② 10.3 ③ - ④ 3.9	①明赤褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	外面 口縁部横ナデ、胴部以下は ヘラ磨き。底部はヘラによる面取 り痕が観察できる。胴部はヘラ磨 き。 内面 ヘラ磨き。	
5住 No. 8	埴	1/3 中央部	① 5.3 ② (14.2) ③ - ④ 4.0	①黄褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	外面 口縁部横ナデ、以下ヘラ磨 き。 内面 ヘラ磨き。	

遺物 番号	種 類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
5 住 No. 9	紡錘車	完形 北壁	①径 4.5 ②厚さ 1.5 ③孔径 0.6 ④重量 27.9g	①略褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	
5 住 No.10	紡錘車	完形 北壁	①径 4.5 ②厚さ 1.1 ③孔径 0.6 ④重さ 26.5g	①茶褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	
6 住 No. 1	甕	完形 南東隅	① 24.3 ② 35.0 ③ 17.1 ④ 5.4	①橙色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	最大径は胴下半部。口縁部は外反。 口唇端部は丸い。内外面ともヘラ 磨き。外面胴上半部で右下がり、 胴部で横、以下で縦。 内面は横。	口縁直下から頸部にかけて波状文を 施す。5 歯 1 単位。
6 住 No. 2	甕	完形 中央部	① 23.3 ② 15.6 ③ 19.0 ④ 6.4	①明赤褐色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	最大径は胴下半部。口縁部は外反。 口唇端部は丸い。外面口唇部横ナ デ、頸部ハケ調整、胴部ヘラ磨き。 内面ヘラ磨き、胴下半部は輪積み 痕をよく残す。	口縁部付近 4 歯 1 単位、頸部 6 歯 1 単位の波状文。
6 住 No. 3	甕	完形	① 24.4 ② 15.0 ③ 18.1 ④ 5.4	①明赤褐色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	最大径は胴下半部で、No. 1・2 ほ ど張らない。口縁部は外反。口唇 端部は丸い。外面口縁部横ナデ、 胴部ハケ調整。内面ハケ調整。	外面に 5～8 歯 1 単位の波状文。 頸部に 8 歯 1 単位の簾状文。
6 住 No. 4	甕	頸部 中央部	① (7.1) ② — ③ — ④ —	①にぶい黄褐色 ② 鉱物粒・砂粒 を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。 内面 ヘラ磨き。	頸部に 12 歯 1 単位の簾状文。3 連止 めで、6 単位の割付。波状文は単位 不明。
6 住 No. 5	甕	ほぼ完形 中央部	① 17.7 ② 13.2 ③ 15.1 ④ 5.5	①明赤褐色 ② 鉱物粒を含む ③良	最大径は胴中央部。口縁部は大き く外反。内外面ともヘラ磨き。	口縁部直下から頸部にかけて波状 文。6～8 歯 1 単位。
6 住 No. 6	小型甕	完形	① 7.7 ② 7.8 ③ 8.0 ④ 3.8	①にぶい褐色 ② 鉱物粒を含む ③良	内外面ともヘラケズリ。	4 歯 1 単位の波状文が大ざっぱに施 文。
6 住 No. 7	埴	1/2 南壁	① 5.4 ② 10.6 ③ — ④ 2.8径	①茶褐色 ② 鉱物粒・砂粒を 含む ③良	若干上げ底になっている。内外面 ともヘラ磨き。	
6 住 No. 8	甕	胴部～底 部 覆土	① (11.5) ② — ③ — ④ 9.3	①にぶい橙色 ② 鉱物粒・砂粒を 含む ③良	外面はヘラ磨きで、研磨痕が長い。 内面は指状のもので調整。	
6 住 No. 9	甕	胴部～底 部 覆土	① (13.7) ② — ③ 20.6 ④ 5.6	①明黄褐色 ② 鉱物粒・砂粒を 含む ③良	内外面ともヘラ磨き。	

第Ⅲ章 高野原遺跡

遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
6住 No.10	甌	完形 中央部	① 10.3 ② 19.8 ③ - ④ 4.6孔径1.3	①にぶい褐色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	鉢状に開く。口唇端部は丸い。 内外面ともヘラ磨き。	
6住 No.11	片口鉢	ほぼ完形 中央部	① 8.9 ② 11.0 ③ 12.0 ④ 6.6	①暗褐色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	最大径は口縁直下にある。片側に 注口をもつ。外面はヘラケズリの み。内面はヘラ磨き。	
6住 No.12	磨石	完形	①長さ 3.3 ②巾 2.7 ③厚さ 2.6 ④重さ 35.2g	①オリーブ黒色	黒色頁岩で、特に周辺をよく磨い ている。	
6住 No.13	磨石	完形 南壁	①長さ 4.0 ②巾 2.9 ③厚さ 1.9 ④重さ 33.5g	①黒色	蛇紋岩で、全体的によく磨かれて いる。	
6住 No.14	紡錘車	完形 覆土	①径 5.1 ②厚さ 1.7 ③孔径 0.6 ④重さ 51.0g	①暗褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	
7住 No. 1	台付き 小型盃	ほぼ完形 南壁ピッ ト内	① 8.2 ② 5.0 ③ 8.2 ④ 5.2	①にぶい橙色 ②鉱物粒を含を含む ③良	外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラケズリ。	
7住 No. 2	小型碗	ほぼ完形 中央部	① 3.6 ② 9.5 ③ - ④ 3.4	①橙色 ②鉱物粒・砂粒を 含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	
7住 No. 3	碗	1/3	① 5.1 ② 11.1 ③ - ④ 3.0	①暗赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	
7住 No. 4	鉢	1/3 北壁	① (5.7) ② (17.6) ③ - ④ -	①明赤褐色 ②鉱物粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	
7住 No. 5	紡錘車	完形 北壁	①径 5.0 ②厚さ 1.1 ③孔径 0.6 ④重さ 34.8g	①暗褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	中心部から放射状に線刻がある。
7住 No. 6	紡錘車	1/3 南壁ピッ ト内	①径 5.8 ②厚さ 1.2 ③孔径 0.6 ④重さ (16.0g)	①茶褐色 ②鉱物粒を含む ③良	土製。	
8住 No. 1	甕	ほぼ完形 南東隅	① 22.3 ② 14.6 ③ 18.4 ④ 6.9	①暗褐色 ②鉱物粒を含む ③良	最大径は胴中央部。頸部から口縁 部までは緩やかに開く。口縁端部 は丸い。内外面ともヘラ磨き。	口縁部から頸部まで9歯1単位の波 状文。頸部には9歯1単位の縷状文。 止めは無く1周する。

遺物 番号	種 類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
8住 No. 2	甕	底部欠損 南東隅	① (22.3) ② 12.4 ③ 13.8 ④ —	①にぶい褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	最大径は胴下半部。頸部から口縁 部までは緩やかに開く。口縁端部 は丸い。内外面ともヘラ磨き。	口縁部から頸部まで6歯1単位の波 状文。頸部は9歯1単位で2連止め、 4単位割付。簾状文を中心に上下に 波状文を配す。
8住 No. 3	甕	胴部～底 部 西隅	① (6.0) ② — ③ — ④ 7.8	①褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 すすが付着しており不明。	
8住 No. 4	甕	胴部～底 部 東拙張区	① 5.6 ② 14.1 ③ — ④ 4.4	①赤褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 ナデ。	
8住 No. 5	碗	ほぼ完形	① 5.6 ② 14.4 ③ — ④ 4.4	①明黄褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き、口縁部ナデ。 内面 ヘラ磨き。	
9住 No. 1	甕	破片 覆土		①灰黄褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラ磨き。	波状文は重複しており明確ではな いが、6歯1単位と考えられる。 簾状文は10歯1単位で2連止めが観 察できる。
9住 No. 2	甕	底部 覆土	① (1.9) ② — ③ — ④ (5.3)	①黒褐色 ②鉾物粒・砂粒を 含む ③良	ヘラケズリ。	
9住 No. 3	器台	脚部	① (6.8) ② — ③基部径2.6 ④脚部径7.7	①明赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	赤色塗彩。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラケズリ。	
10住 No. 1	甕	口縁部破 片 覆土上層		①明赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ整形後波状文と簾状文 を施文。 内面 ハケ調整。	口縁直下に3歯1単位の波状文。 簾状文は単位不明。
10住 No. 2	甕	口縁部破 片 覆土		①にぶい赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	口縁部が内湾する小型の土器。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	口縁直下に5歯1単位の波状文。
10住 No. 3	甕	口縁部破 片		①にぶい褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。 内面 ヘラ磨き。	4歯1単位(?)の波状文と頸部に 単位不明の簾状文。
10住 No. 4	甕	胴部破片 覆土		①褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。 内面 ヘラ磨き。	単位不明の簾状文と波状文が観察で きる。
11住 No. 1	壺	口縁部破 片 覆土		①褐色 ②鉾物粒を含む ③良	折り返し口縁をもつ。 内外面とも細かなハケ調整。	
11住 No. 2	甕	口縁部破 片 覆土		①褐色 ②鉾物粒を含む ③良	折り返し口縁をもつ。 内外面とも細かなハケ調整後ヘラ 磨き。赤色塗彩。	

第III章 高野原遺跡

遺物 番号	種 類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
11住 No. 3	甕	口縁部破 片 覆土		①暗褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。 内面 ハケ調整。	口縁直下から波状文で、4歯1単位 と思われる。
11住 No. 4	甕	口縁部破 片 覆土		①にぶい赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。 内面 ヘラケズリ。	4歯1単位(?)の波状文と、10歯 1単位の簾状文。簾状文は2連止め が観察できる。
11住 No. 5	甕	口縁部破 片 覆土		①にぶい褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。 内面 ヘラ磨き。	4歯1単位(?)の波状文と、8歯 1単位の簾状文。簾状文は2連止め が観察できる。
11住 No. 6	甕	口縁部破 片 覆土		①暗褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。 内面 ヘラ磨き。	4歯1単位の波状文と、10歯1単位 の簾状文。簾状文は2連止め。
11住 No. 7	甕	口縁部破 片 覆土		①にぶい褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。 内面 ヘラ磨き。	4歯1単位(?)の波状文と、10歯 1単位の簾状文。簾状文は2連止め が観察できる。
11住 No. 8	甕	口縁部破 片 覆土		①黒褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文を施文。 内面 ヘラ磨き。	4歯1単位の波状文が乱れた状態で 施文。
11住 No. 9	甕	口縁部破 片 覆土		①にぶい赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文を施文。 内面 ヘラ磨き。	4歯1単位の波状文。No. 8と同一 個体。
11住 No.10	甕	口縁部破 片 覆土		①黒褐色 ②砂粒を含む ③良	口縁部が若干肥大。 外面 ハケ調整後波状文を施文。 内面 ヘラ磨き。	7歯1単位の波状文。
11住 No.11	甕	口縁部破 片 覆土		①黒褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文を施文。 内面 ハケ調整。	単位不明の波状文。
11住 No.12	甕	口縁部破 片 覆土		①にぶい褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文を施文。 内面 ハケ調整。	波状文施文後、一部すり消されてい るため単位不明。
11住 No.13	甕	頸部破片 覆土		①にぶい褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文を施文。 内面 ハケ調整。	4歯1単位の波状文と、6歯1単位 3連止めの簾状文。
11住 No.14	甕	胴部破片 覆土		①橙色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文を施文。 内面 ハケ調整。	7歯1単位の波状文と、10歯1単位 簾状文。
11住 No.15	甕	頸部破片 覆土		①褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文を施文。 内面 ヘラ磨き。	4～6歯1単位の波状文を施文。 重複している。
11住 No.16	甕	頸部破片 覆土		①にぶい褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 を施文。以下ヘラ磨き。赤色塗彩。 内面 ハケ調整。	波状文は重複しており、単位は不明。 簾状文は10歯1単位で、7歯の櫛で 止める。
11住 No.17	甕	胴部破片 覆土		①赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き。赤色塗彩。 簾状文施文。	簾状文は12歯以上の単位で、4歯の 櫛で止める。

遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法量 (cm)	① 色調 ② 胎土 ③ 焼成	器形・整形の特徴	文様の特徴
11住 No.18	甕	胴部破片 覆土		①にぶい橙色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後簾状文施文。 赤色塗彩。 内面 ハケ調整。	簾状文の単位は不明。
11住 No.19	甕	頸部破片 覆土		①にぶい橙色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き後簾状文施文。 内面 ヘラ磨き。	簾状文の単位は不明。
11住 No.20	小型甕	底部破片 覆土	④ 4.4	①にぶい橙色 ②砂粒を含む ③良	底部との接点を指で押さえて整形。	
11住 No.21	紡錘車	完形 覆土	①径 4.3 ②厚さ 1.1 ③孔径 0.75 ④重さ 29.7 g	①暗緑灰色	土製。	
1号 土坑 No. 1	壺	胴下半部 ～底部欠損	① (29.3) ② 21.2 ③ 29.0	①橙色 ②砂粒を含む ③良	折り返し口縁をもつ。 外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	折り返し口縁部に3歯1単位の波状文、頸部に10歯1単位3連止め6単位割付の簾状文。胴部にかけて4歯1単位の波状文。
2号 土坑 No. 1	壺	口縁部～ 胴部上部	① (18.6) ② 17.3	①にぶい赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	折り返し口縁をもつ。 外面 口縁下から同上半部にかけてハケ調整後波状文と簾状文を施文。胴下半部はヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	折り返し口縁部に3歯1単位の波状文。頸部の簾状文をはさんで上下に4歯1単位の波状文。簾状文は、10歯1単位で2連止め、8単位割付。
2号 土坑 No. 2	甕	口縁～頸 部1/3	① (12.0) ② (18.1)	①にぶい赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	折り返し口縁をもつ。 外面 頸部までハケ整形後波状文施文。以下胴部ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。	折り返し口縁部に4歯1単位、頸部に3～5歯1単位の波状文。
2号 土坑 No. 3	壺	口縁～頸 部2/3	① (9.5) ② (18.0)	①にぶい明赤褐色 ②鉾物粒を含む ③良	外面 口縁部から頸部までヘラケズリ。頸部の波状文はその後施文。	簾状文は2段に施文されるが下部は欠損しており、単位は不明。上部の簾状文は、10歯1単位で2連止め、11単位割付。
2号 土坑 No. 4	高坏	胴部～基 部	① (14.1)	①赤褐色 ②砂粒を含む ③不良	外面 ヘラ磨き後赤色塗彩。 内面 ヘラ磨き後赤色塗彩。	
2号 墓坑 No. 1	甕	頸部破片 周溝中		①黒褐色 ②鉾物粒を含む ③良	ハケ整形後簾状文施文。	単位不明。
2号 墓坑 No. 2	高坏	脚部破片 周溝中		①赤色 ②砂粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き後赤色塗彩。 内面 ヘラケズリ。	
2号 墓坑 No. 3	甕	底部破片 周溝中		①にぶい赤褐色 ②鉄分粒を含む ③良	平底。 外面 ハケ整形。 内面 ヘラケズリ。	
2号 墓坑 No. 4	甕	底部破片 周溝中		①にぶい橙色 ②砂粒を含む ③不良	平底。 外面 ハケ整形。 内面 荒れており不明。	

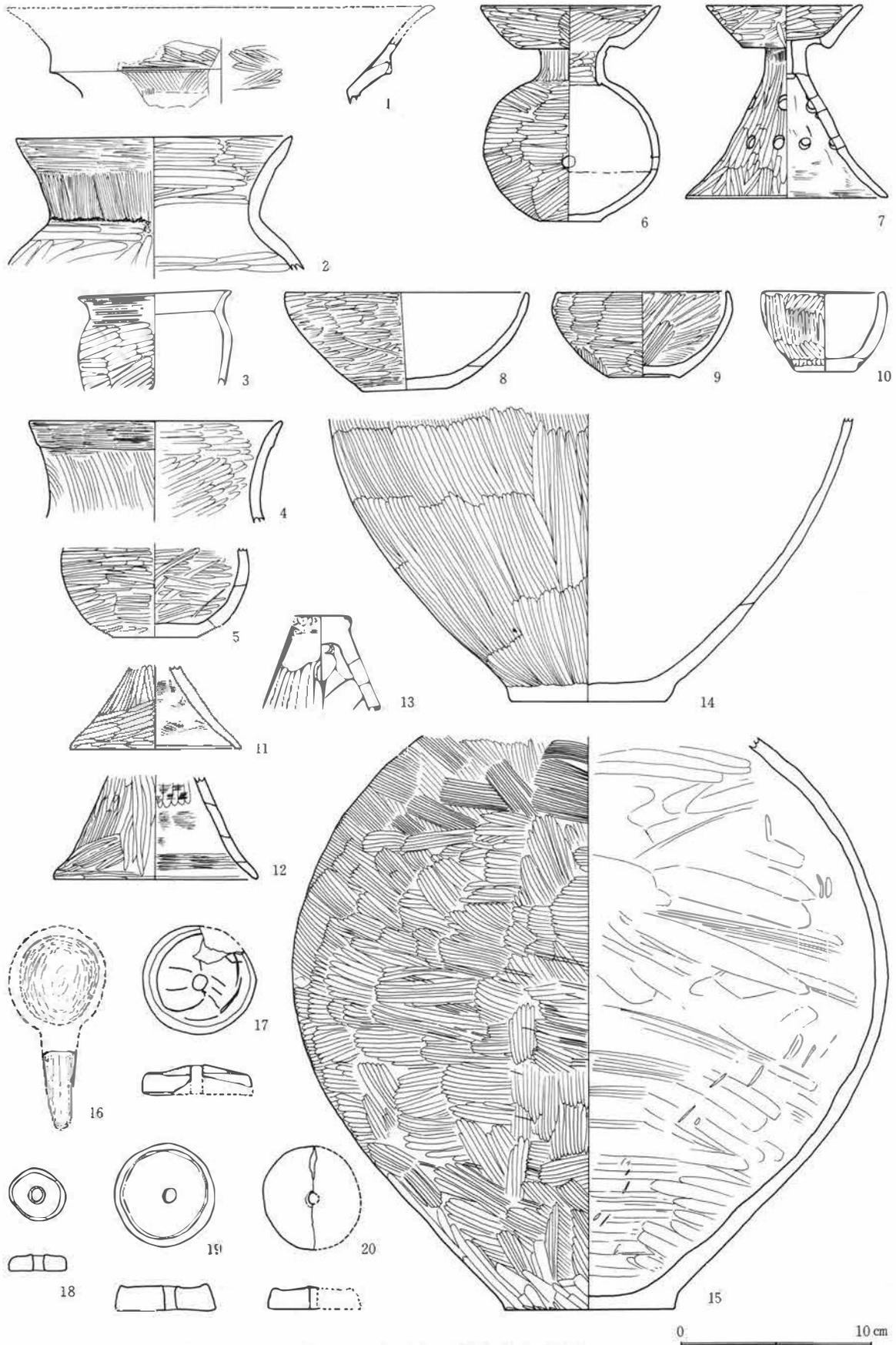
第III章 高野原遺跡

遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法量 (g)	① 色調 ② 胎土 ③ 焼成	器形・整形の特徴	文様の特徴
2号 墓坑 No. 5	甕	底部破片 周溝中	① (21.4)	①にぶい褐色 ②鉄分粒を含む ③良	若干上げ底風の平底。 外面 ヘラ磨き。底面はヘラケズリ。 内面 横に走る櫛状工具による条痕がある。	
4号 墓坑 No. 1	埴	底部のみ 表土	④ 6.4	①灰色 ②鉄分粒を含む ③不良	須恵器。 外面 右回転ロクロ整形。ロクロ目あり。底部回転糸切り。 内面 回転によるナデ。部分的に剥落あり。	
4号 墓坑 No. 2	埴	底部のみ 表土	④ 5.3	①灰白色 ②鉄分粒を含む ③不良	須恵器。 外面 右回転ロクロ整形。底部回転糸切り。	
4号 墓坑 No. 3	甕	底部破片 表土		①灰色 ②鉄分粒を含む ③不良	須恵器。 外面 右回転ロクロ整形。わずカロクロ目あり。底部ロクロ右回転糸切り。 内面 回転によるナデ。ロクロ目あり。	
4号 墓坑 No. 4	短頸壺	口縁部～ 同上部 1/2	① (8.5) ② 9.6 ③ (17.2)	①灰色 ②鉄分粒を含む ③不良	須恵器。 外面 右回転ロクロ整形。ロクロ目あり。体部下半に2条の沈線あり。 内面 回転によるナデ。ロクロ目あり。	
4号 墓坑 No. 5	脚付短 頸壺	頸部～脚 部1/3	① (10.3) ③ 11.9 ④ (7.42)	①灰白色 ②小石を含む ③不良	須恵器。 外面 右回転ロクロ整形後、更にナデを加える。上半にロクロ目あり。脚部は貼付。 内面 回転によるナデ。凹凸のあるロクロ目あり。	
4号 墓坑 No. 6	甕	底部破片 表土	① (5.0) ④ (11.8)	①灰白色 ②鉄分粒を含む ③不良	須恵器。 外面 右回転ロクロ整形。底部際にヘラ削りあり。底部は荒れているため不明。 内面 回転によるナデ。ロクロ目あり。	
4号 墓坑 No. 7	脚付短 頸壺	口縁～脚 部1/3 表土	① (16.8) ② (9.8) ③ (18.0) ④脚部径 (10.9)	①灰白色 ②鉄分粒を含む ③良	須恵器。 外面 右回転ロクロ整形。上半部にロクロ目あり。胴部最大径部に2本の横沈線。脚部は貼付。 内面 回転によるナデ。ロクロ目あり。	
4号 墓坑 No. 8	脚付短 頸壺	口縁～脚 部2/3 表土	① (17.9) ② 10.3 ③ (19.3) ●脚部径 (11.4)	①灰褐色 ●鉄分粒を含む ③良	須恵器。 外面 右回転ロクロ整形。捺痕を加える。脚部は貼付。 内面 回転によるナデ。シャープなロクロ目あり。	

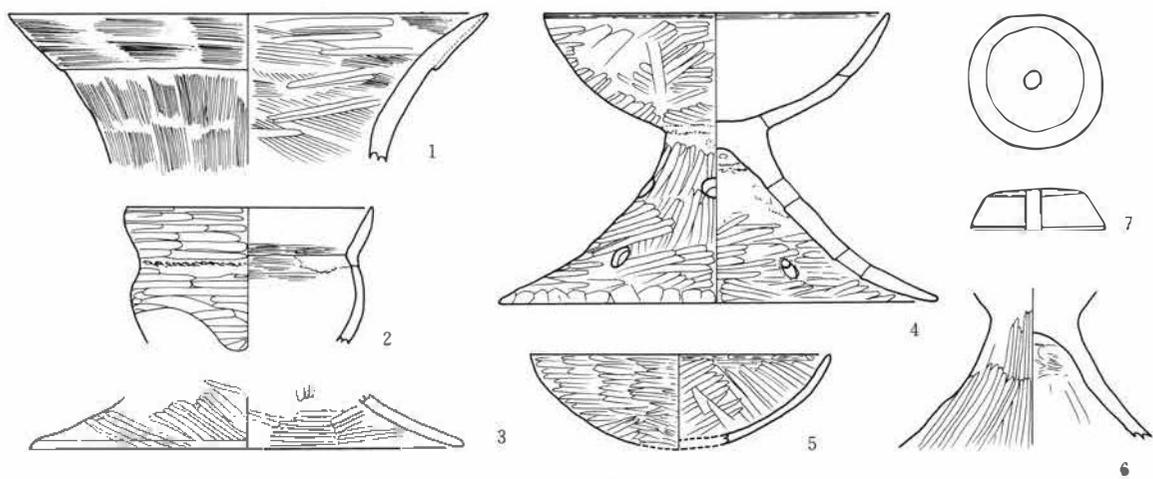
遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法量 (mm)	① 色調 ② 胎土 ③ 焼成	器形・整形の特徴	文様の特徴
グリ ット No. 1	甕	口縁部～ 底部1/3 P-00	① (32.2) ② (20.5) ③ (27.6) ④ 8.0	①にぶい橙色 ②鉍物粒を含む ③不良	頸部から緩やかに口縁部に向け外 反する。胴部もそれほど張らない。	R L斜縄文が口縁下から施文され る。部分によってすり消されている。
グリ ット No. 2	甕	口縁部～ 底部上位 1/3 J-06	① (11.4) ② (17.3)	①暗褐色 ②砂粒を含む ③不良	頸部から口縁部まで短い。口縁部 は折り返しをもつ。	R L斜縄文が折り返し口縁から胴部 上半部まで施される。部分によって すり消されている。
グリ ット No. 3	甕	口縁部～ 底部上位 1/3 J-06	① (14.4) ② (17.9)	①にぶい黄褐色 ②鉍物粒・砂粒を 含む ③不良	外面 ヘラケズリ。頸部ハケ調整 後波状文施文。 内面 ヘラケズリ。	口縁部から頸部にかけて3～7歯1 単位の波状文。
グリ ット No. 4	甕	口縁部～ 底部1/2 J-06	① (23.6) ② (17.4) ③ (22.0) ④ 7.7	①褐色 ②鉍物粒を含む ③不良	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラケズリ。	
グリ ット No. 5	甕	口縁部～ 底部1/3 O-06	① (9.8) ② (15.3)	①褐色 ②砂粒を含む ③不良	頸部から口縁部にむけて外反す る。 外面 口縁下は横ナデ。頸部まで ハケ整形、胴部はヘラケズリ。 内面 上部ヘラ磨き、胴部ハケ整 形。	
グリ ット No. 6	甕	口縁部～ 胴上半 1/3 P-02	① (7.8) ② (13.5)	●赤褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 口縁下は横ナデ、頸部まで ハケ整形、胴部はヘラケズリ。 内面 ヘラ磨き。	
グリ ット No. 7	甕	口縁部～ 胴上部 1/3 O-02	① (7.2) ② (13.4)	①にぶい赤褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 口縁下は横ナデ、頸部から 胴部にかけてはヘラケズリ。 内面 ヘラケズリ。	
グリ ット No. 8	碗	口縁部～ 胴部1/3 E-08	① (5.1) ② (13.3)	①希褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ヘラケズリ。 内面 ハケ調整。	
グリ ット No. 9	器台	器台の脚 基部破片 H-05	①基部径 (3.0)	①赤褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラケズリ。	
グリ ット No.10	高坏	脚部破片 G-03	①基部径 (3.8)	①明赤褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラケズリ。	
グリ ット No.11	高坏	脚部1/3 E-08	①基部径 (4.6) ②脚部径 (10.2)	①にぶい赤褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラケズリ。	
グリ ット No.12	高坏	脚部1/3 J-06	①基部径 (4.4) ②脚部径 (12.0)	①にぶい橙色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ヘラケズリ。 内面 粗いヘラケズリ。	

第三章 高野原遺跡

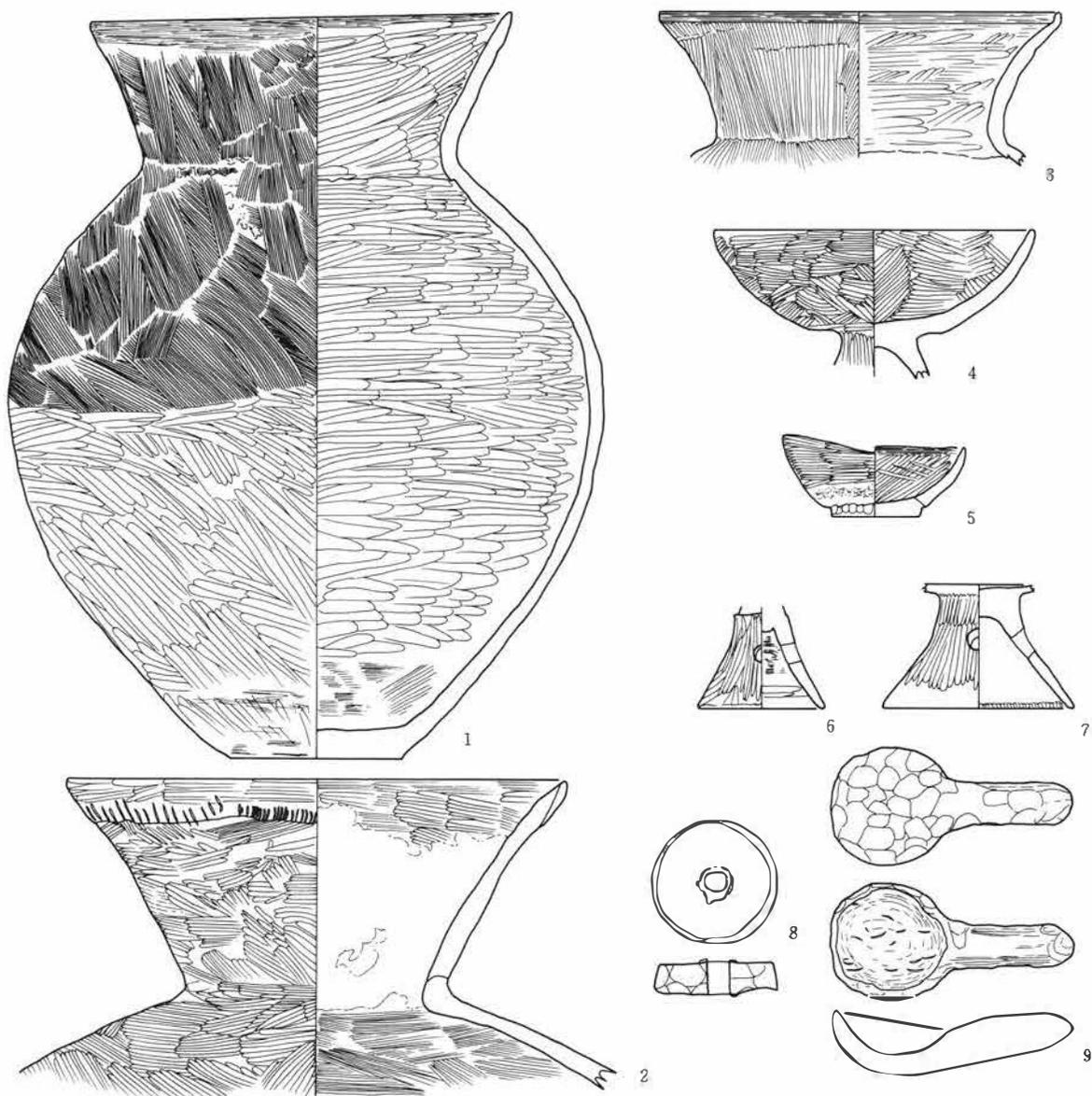
遺物番号	種類	残存状態 出土位置	法 量 (cm)	① 色 調 ② 胎 土 ③ 焼 成	器 形・整 形 の 特 徴	文 様 の 特 徴
グリ ット No.13	甌	底部のみ OP-01	① (2.7) ② 4.4 孔径1.0	①明赤褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ヘラケズリ。 内面 粗いヘラケズリ。	
グリ ット No.14	甌	底部破片 N-02	① (2.1) ④ (6.5)	●橙色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラケズリ。	
グリ ット No.15	甌	口縁部破片 D-06		①灰褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 施文。 内面 ヘラ磨き。	3～6歯1単位の波状文。9歯1単 位で2連止めの簾状文。
グリ ット No.16	甌	口縁部破片 J-01		①黒褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文。 内面 ヘラ磨き。	4歯1単位の波状文。
グリ ット No.17	甌	口縁部破片 M-06		①にぶい橙色 ②鉍物粒を含む ③良	折り返し口縁をもつ。 外面 ハケ調整後波状文。 内面 ヘラ磨き。	3～5歯1単位の波状文。
グリ ット No.18	甌	口縁部破片 N-01		①にぶい橙色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ヘラ磨き後波状文と簾状文 施文。 内面 ヘラ磨き。	3歯1単位の波状文。簾状文の単位 は不明。
グリ ット No.19	甌	口縁部破片 覆土		①にぶい褐色 ②砂粒を含む ③良	外面 ハケ整形後波状文施文。	7歯1単位の波状文。
グリ ット No.20	甌	口縁部破片 O-04		①にぶい褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ハケ整形後波状文と簾状文 施文。	3～4歯1単位の波状文。簾状文単 位不明。
グリ ット No.21	甌	胴部破片 D-06		①にぶい褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 上部はハケ整形後波状文と 簾状文施文。 内面 ヘラケズリ。	4歯1単位の波状文。簾状文の単位 不明。
グリ ット No.22	甌	頸部破片 D-06		①にぶい褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文と簾状文 施文。	3～4歯1単位の波状文。簾状文は 12歯1単位で、連止めが観察できる。
グリ ット No.23	甌	胴部破片 C-14		①にぶい褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 ハケ調整後波状文を施文赤 色塗彩。	6～7歯1単位の波状文。
グリ ット No.24	匙	柄破片 B-06		①褐色 ②鉍物粒を含む ③良	外面 削り痕が観察。	
グリ ット No.25	砥石	一方の端 部欠損	●縦 (9.1) ②横 3.2 ③幅 2.1			流紋岩製の砥沢と見られる。淡褐色の地に褐色の縞が入り。砥沢砥のう ち、虎砥と称される上質の砥石に近い。使用は、表・裏は全面、割部の 片側は旧割れ口でわずかに研磨あり、他方の片側は旧割れ口がわずか に見られ、他は研磨である。両小口のうち、図の手前小口は旧時の欠 損、奥小口は当初の面削り痕が残る。表・裏は、耗グセがあり、左上り、 右下りとなり使用者は、右利であったことを窺わせる。研磨主体は、砥 石の大きさと、研磨状況から、手持砥で、小形の主体物であったと考え られる。



第19図 高野原2号住居跡出土遺物



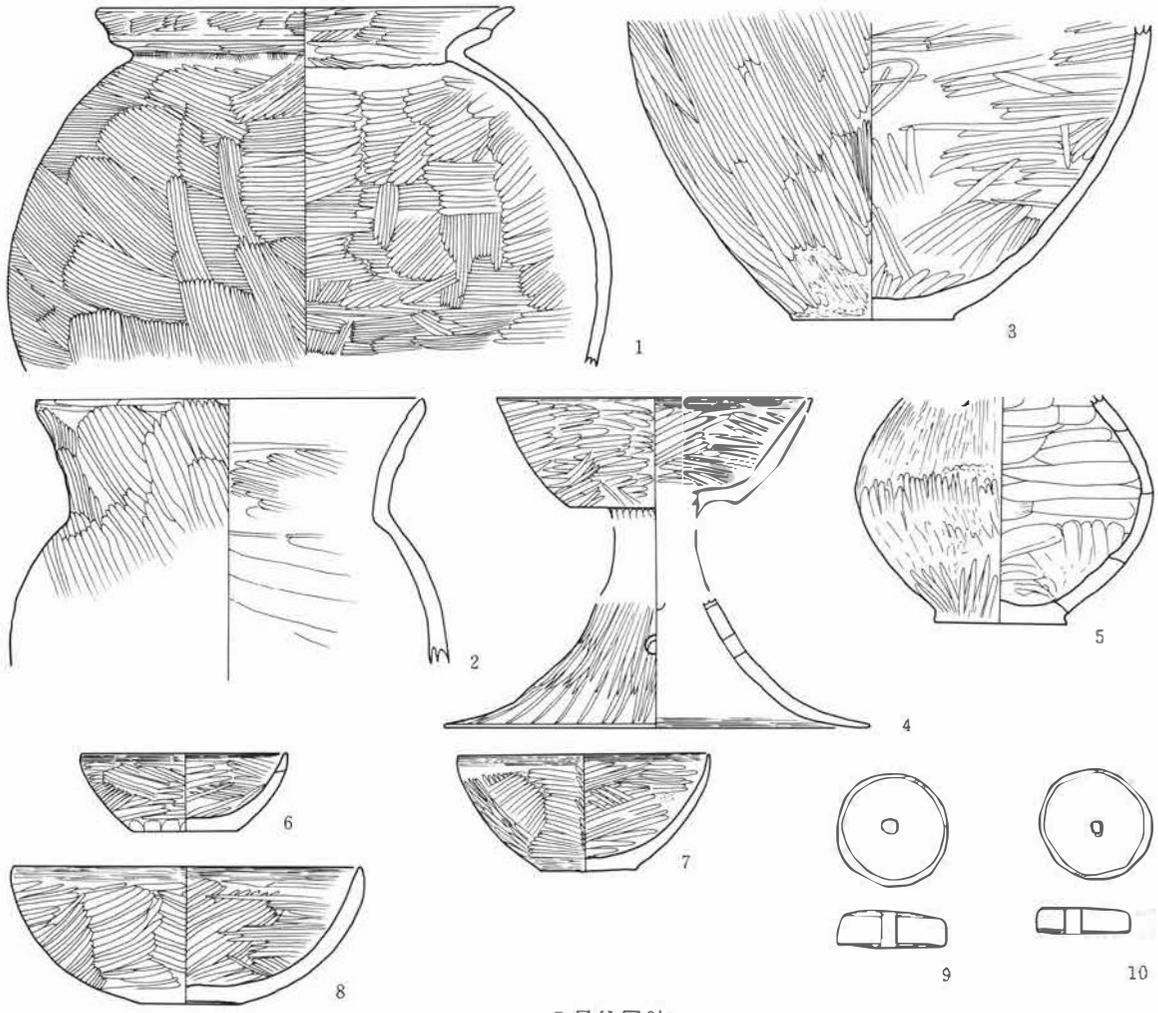
3号住居跡



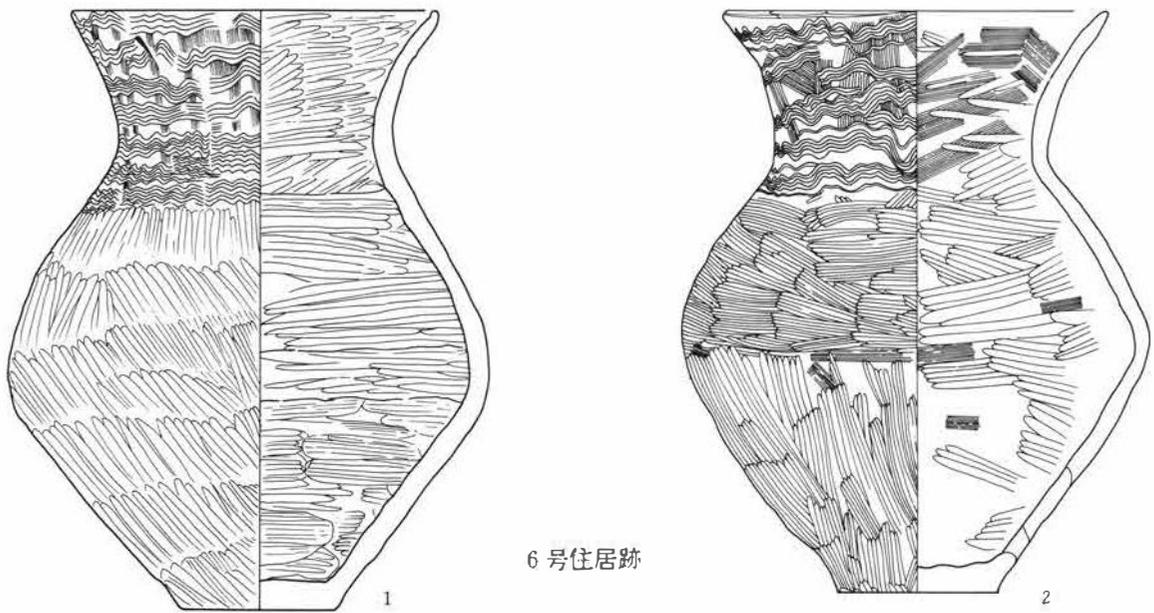
4号住居跡

第20図 高野原3・4号住居跡出土遺物

0 10cm



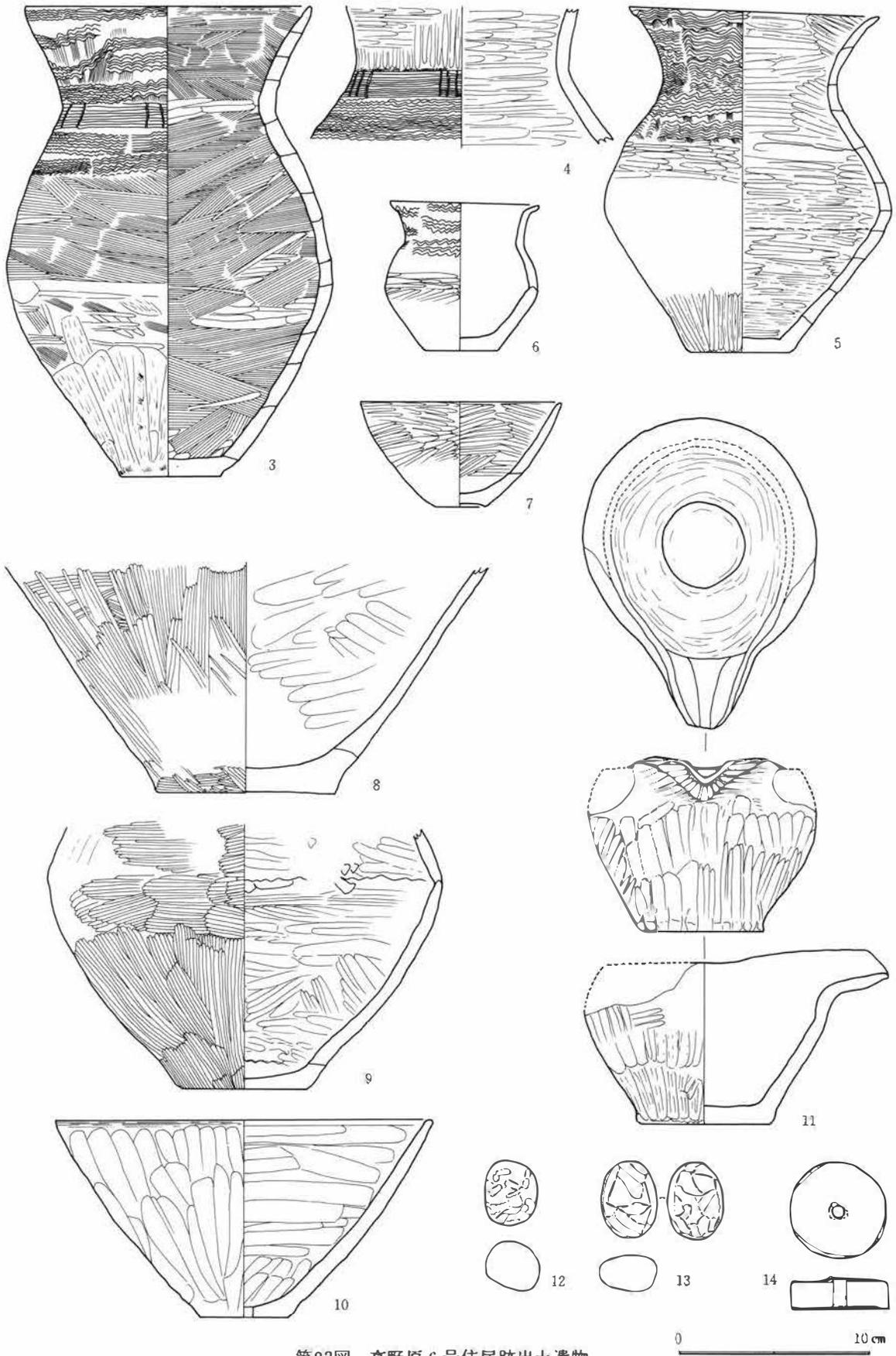
5号住居跡



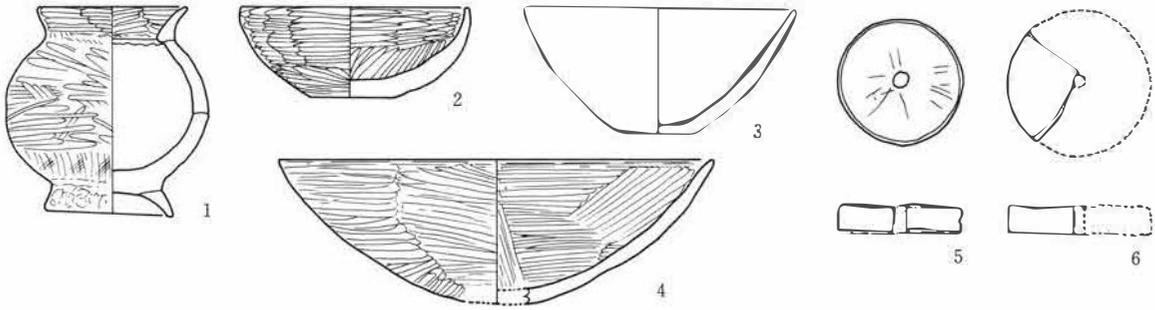
6号住居跡

第21図 高野原5・6号住居跡出土遺物

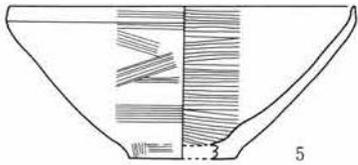
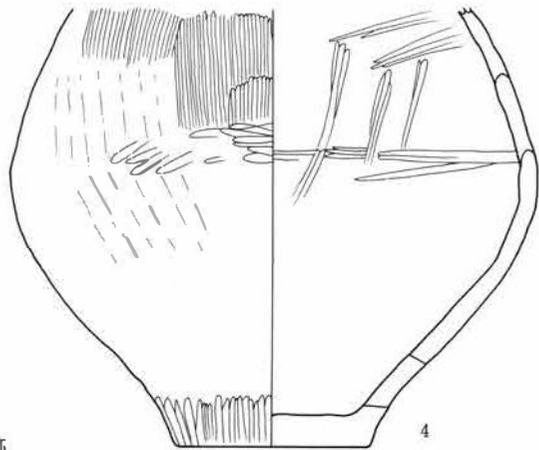
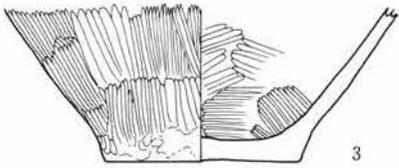
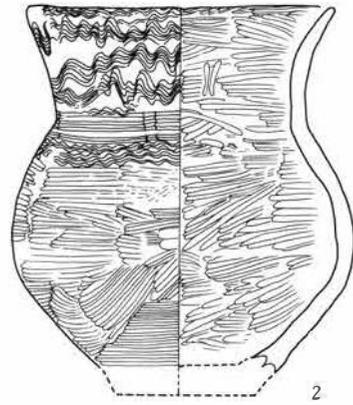
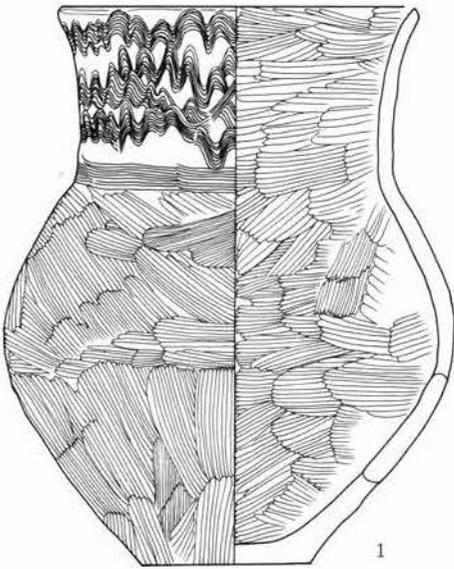




第22図 高野原6号住居跡出土遺物

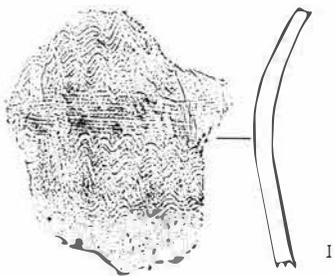


7号住居跡



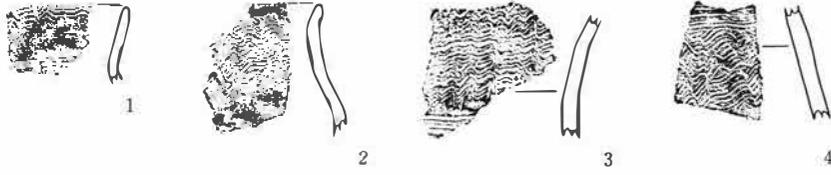
8号住居跡

9号住居跡

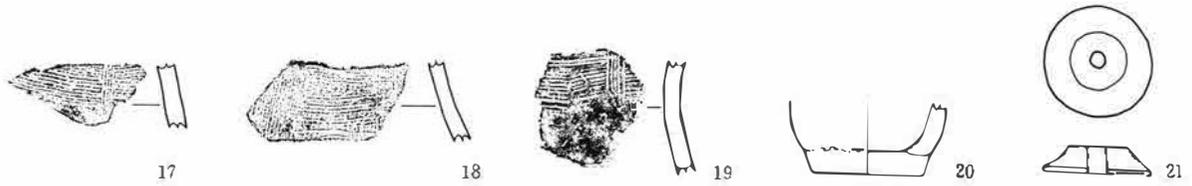
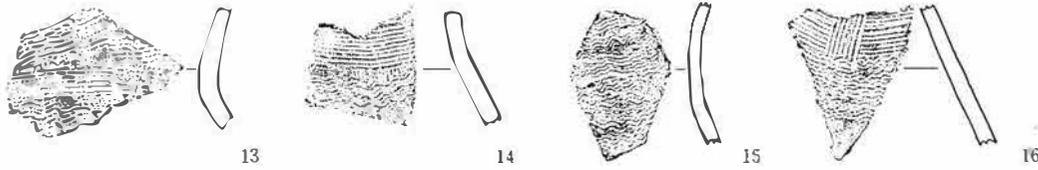
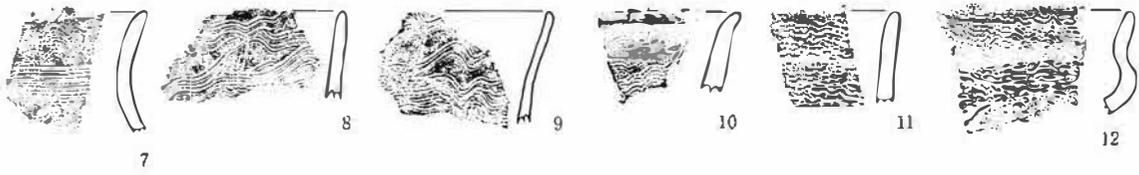
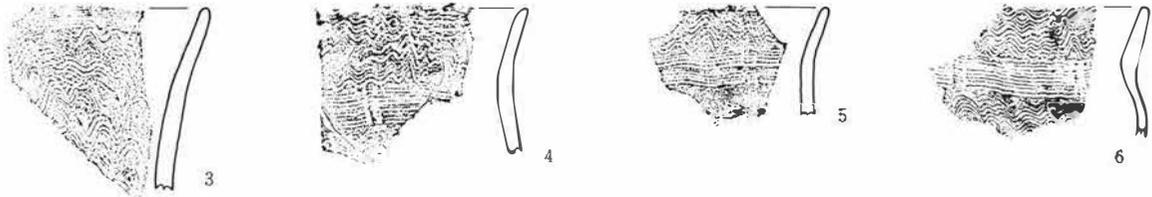
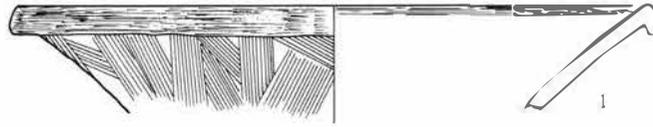


第23図 高野原7・8・9号住居跡出土遺物





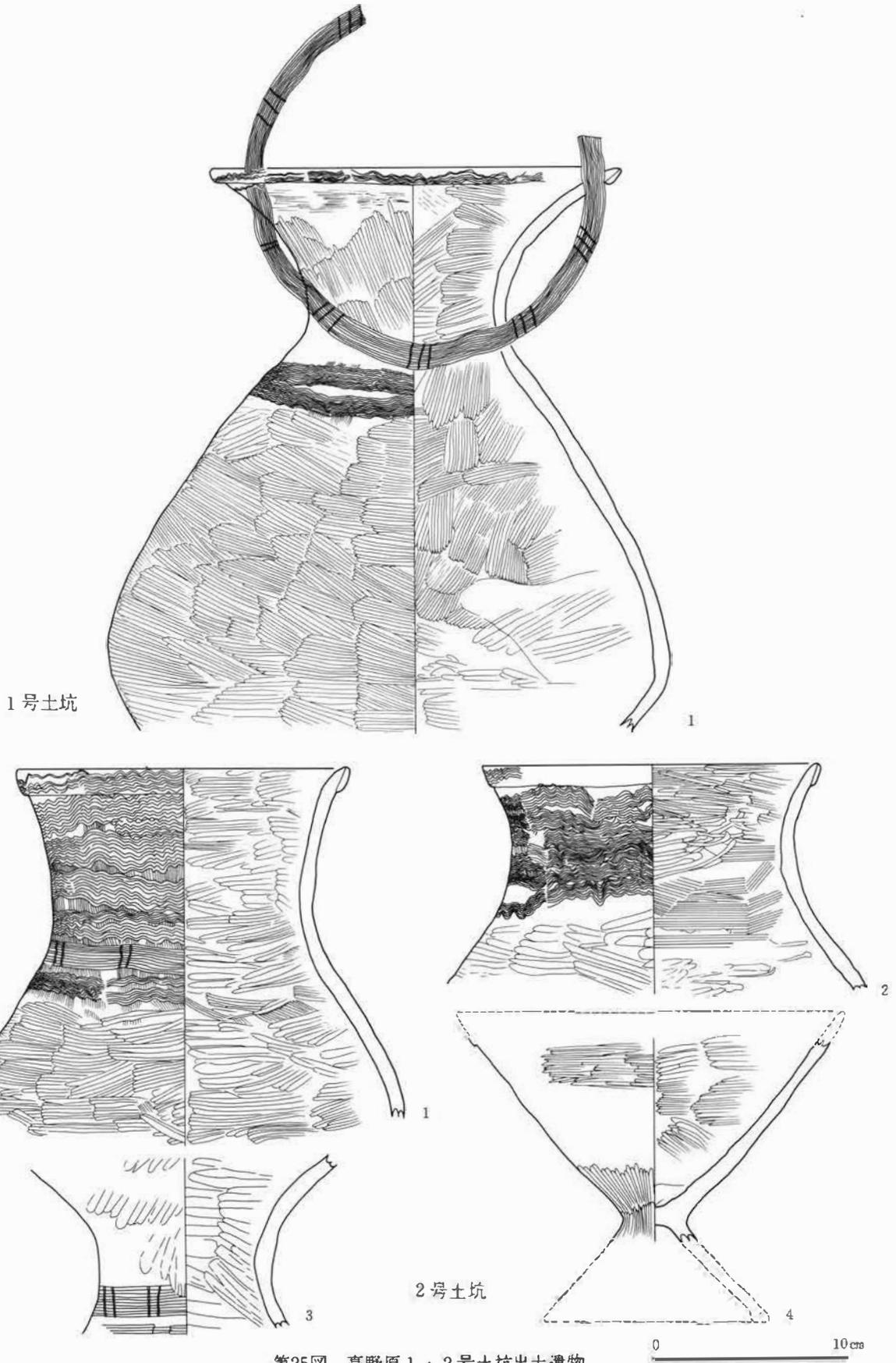
10号住居跡



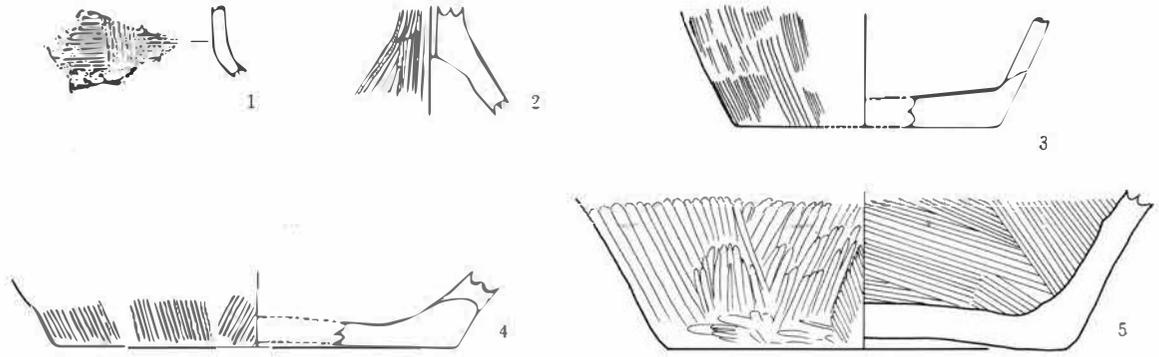
11号住居跡

第24図 高野原10・11号住居跡出土遺物

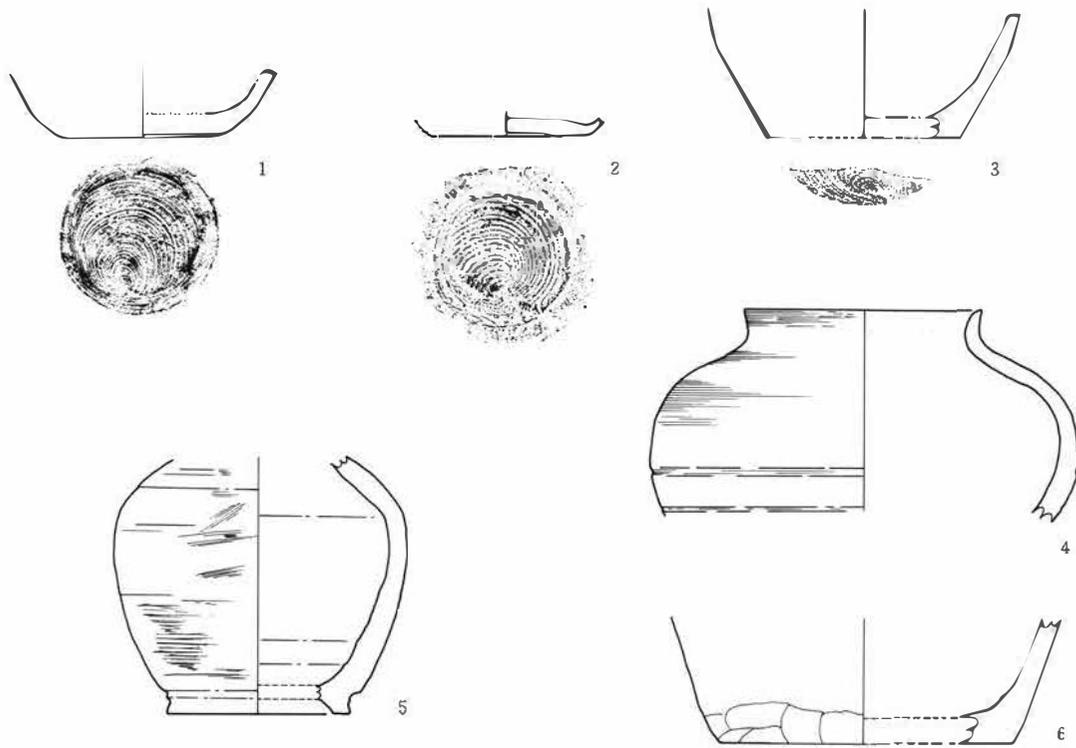




第Ⅲ章 高野原遺跡



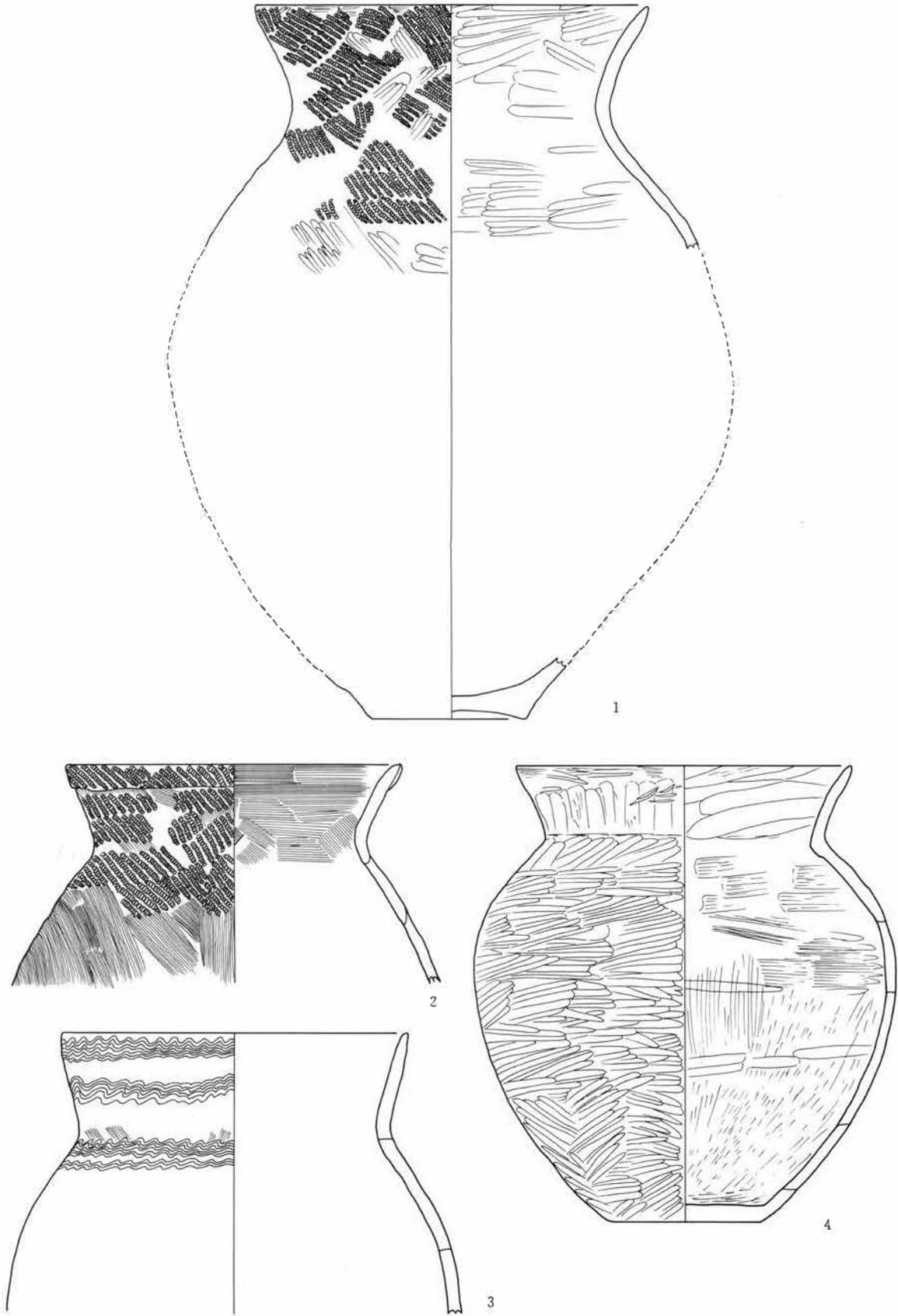
2号墓坑



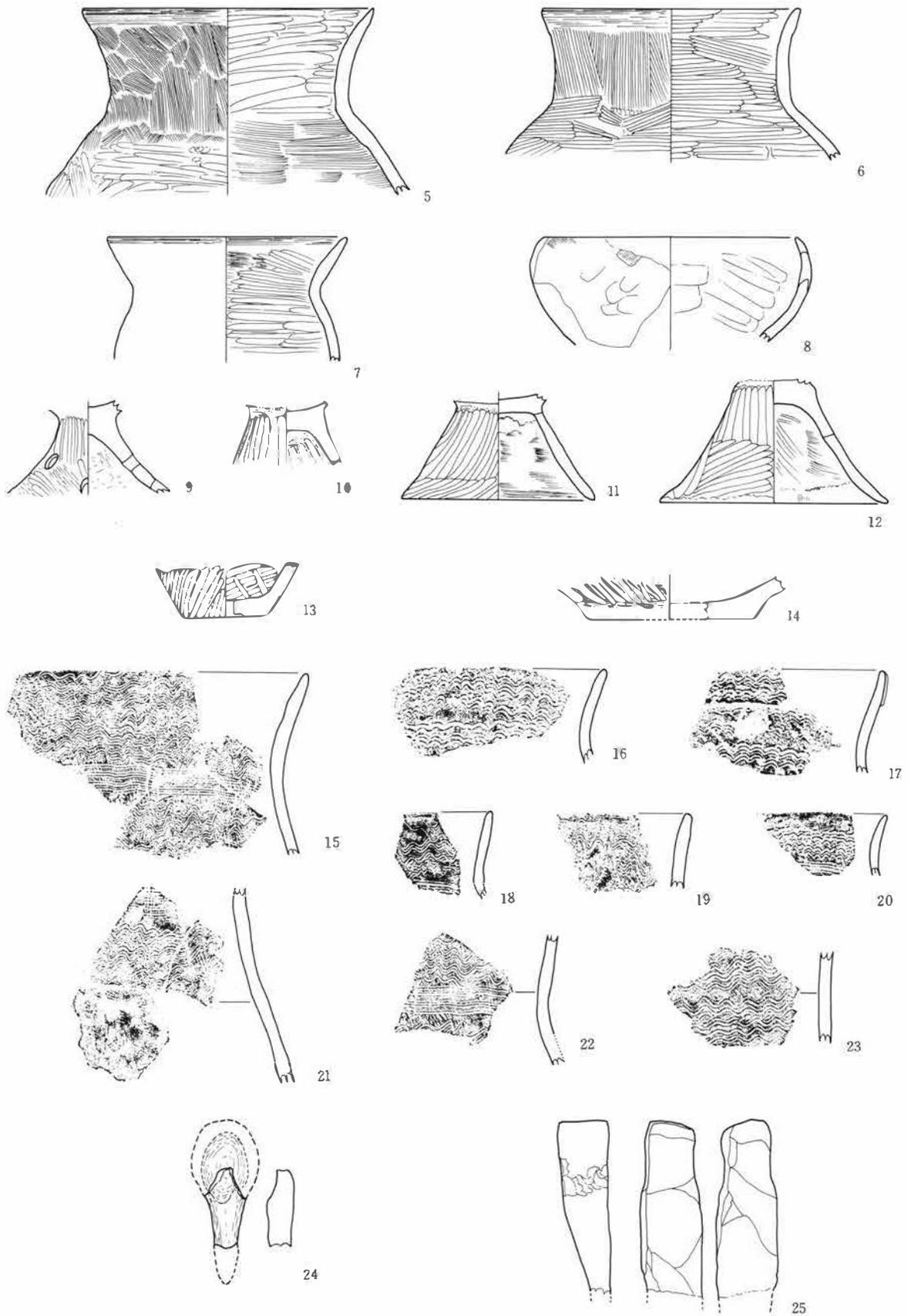
4号墓坑

0 10cm

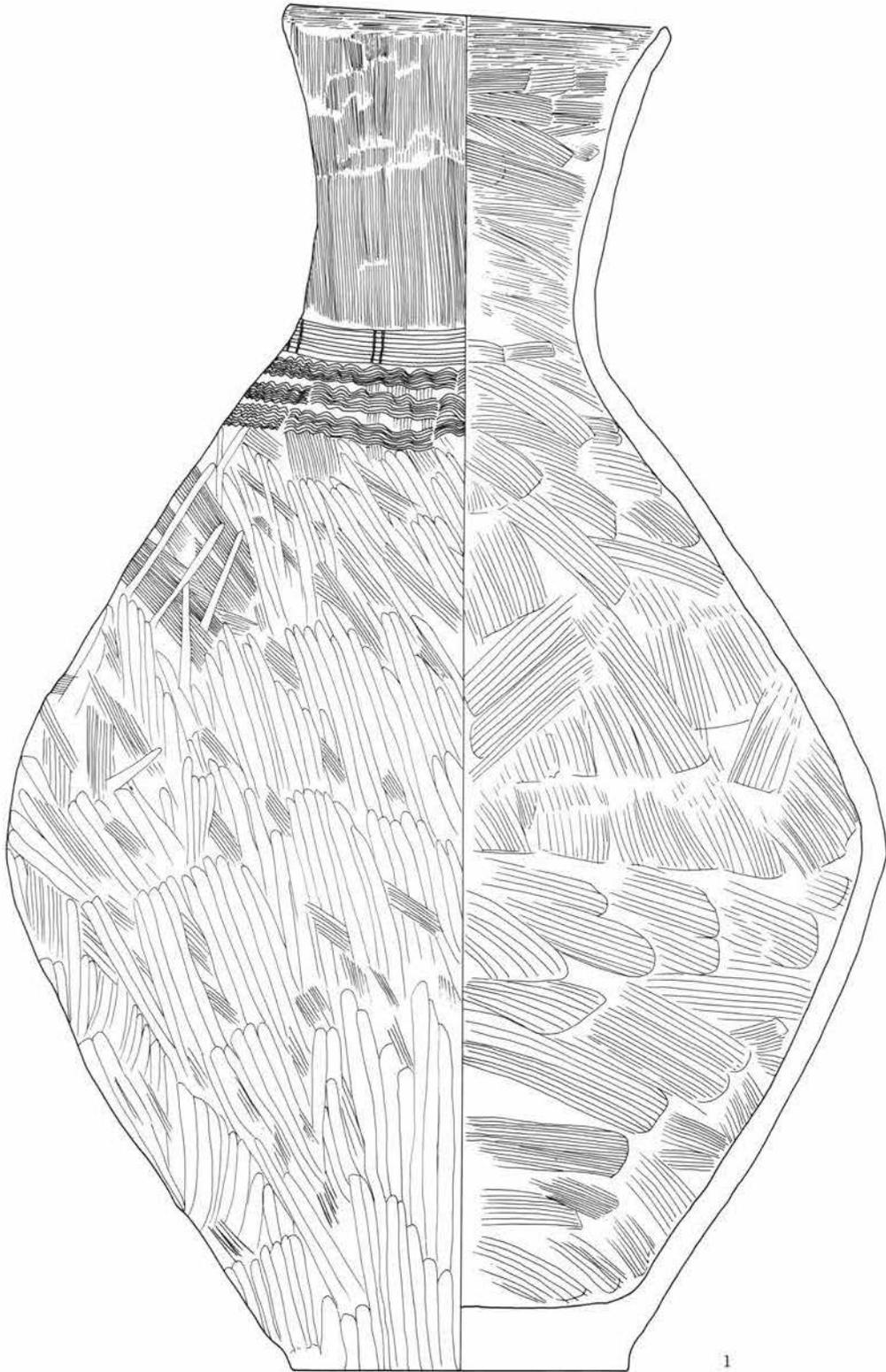
第26图 高野原2・4号墓坑出土遺物



第27図 高野原グリット出土遺物 (1)

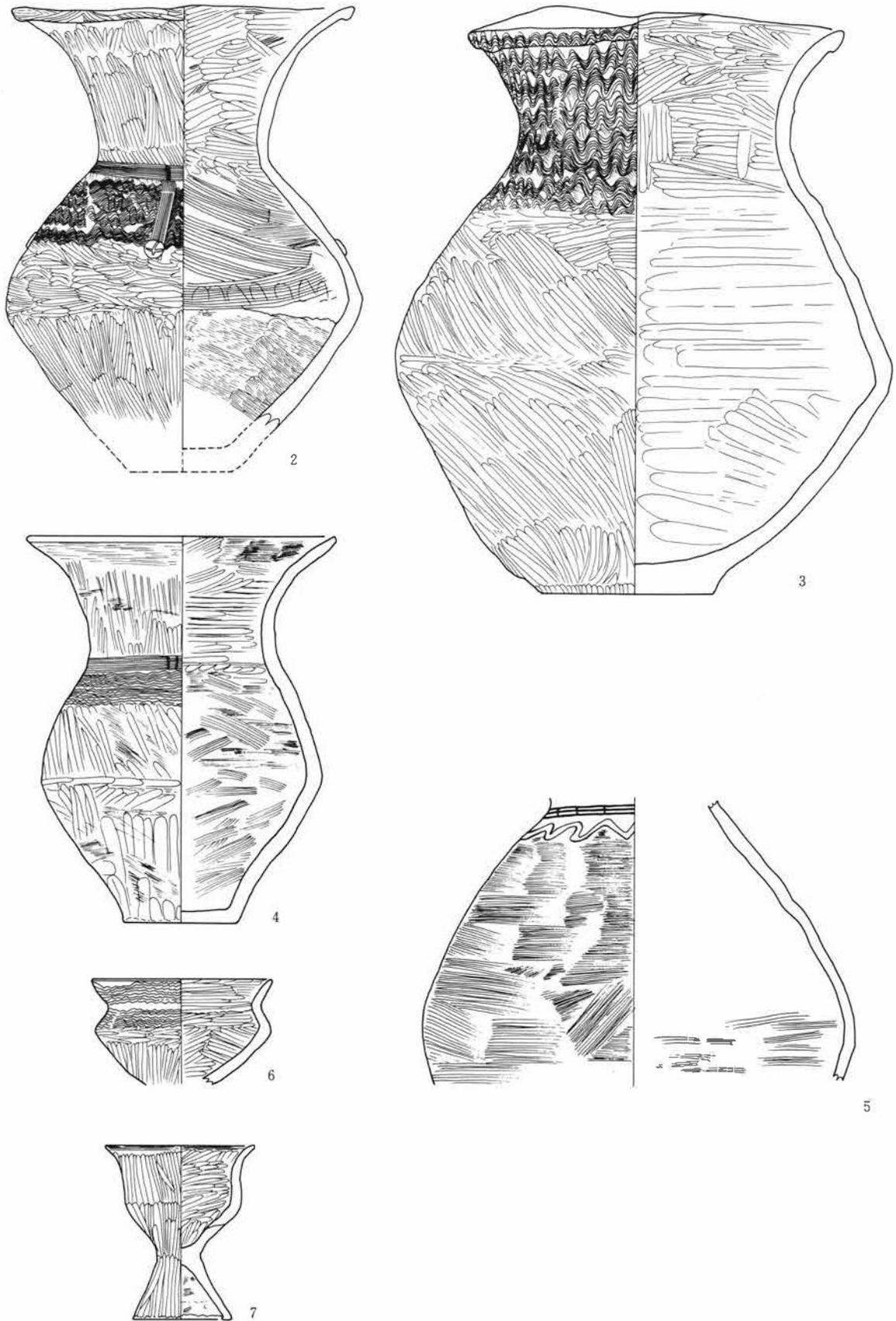


第28図 高野原グリット出土遺物(2)



第29図 関連資料 川場村公民館蔵弥生土器(1)

0 10 cm



第30図 関連資料 川場村公民館蔵弥生土器（2）

圖 版



1. 門前橋詰遺跡遠景



2. 門前橋詰遺跡トレンチ設定状況

図版 2



1. 橋詰 1 号住居跡



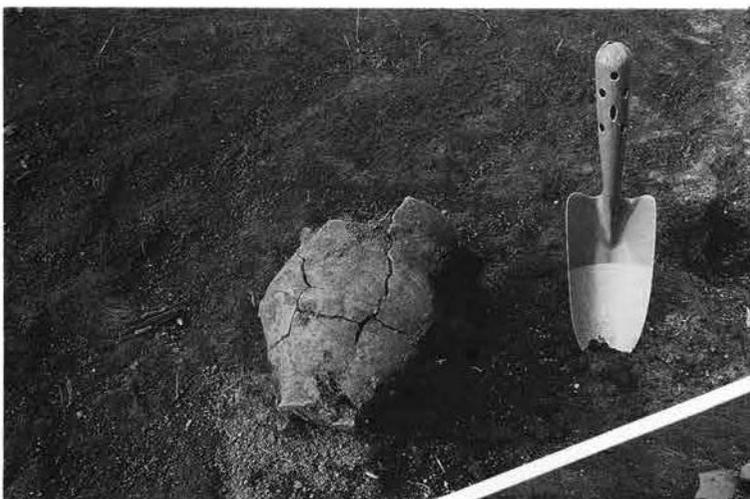
2. 橋詰 1 号住居跡の炉



3. 橋詰 1 号住居跡遺物出土状態



1. 橋詰 2 号住居跡



2. 橋詰 2 号住居跡遺物出土状態



3. 橋詰 2 号住居跡遺物出土状態

図版4



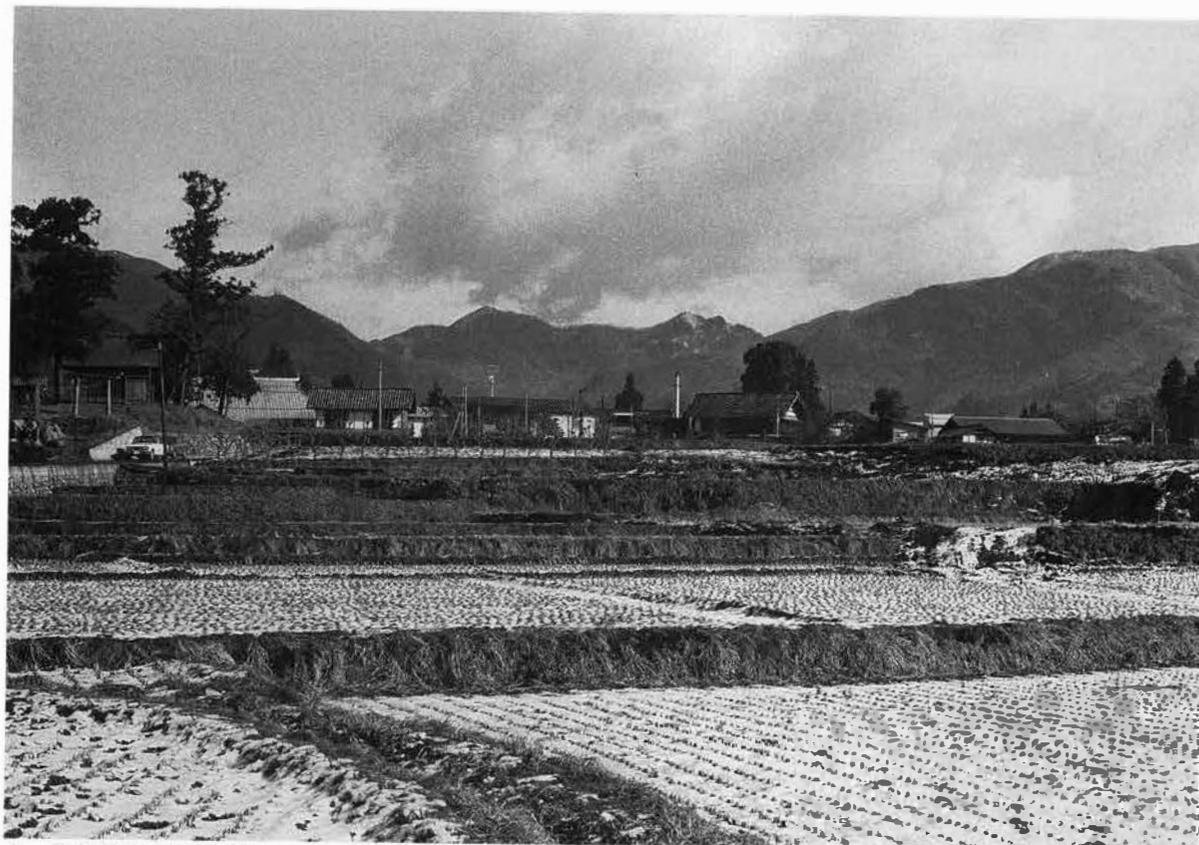
1. 橋詰3号住居跡と溝状遺構



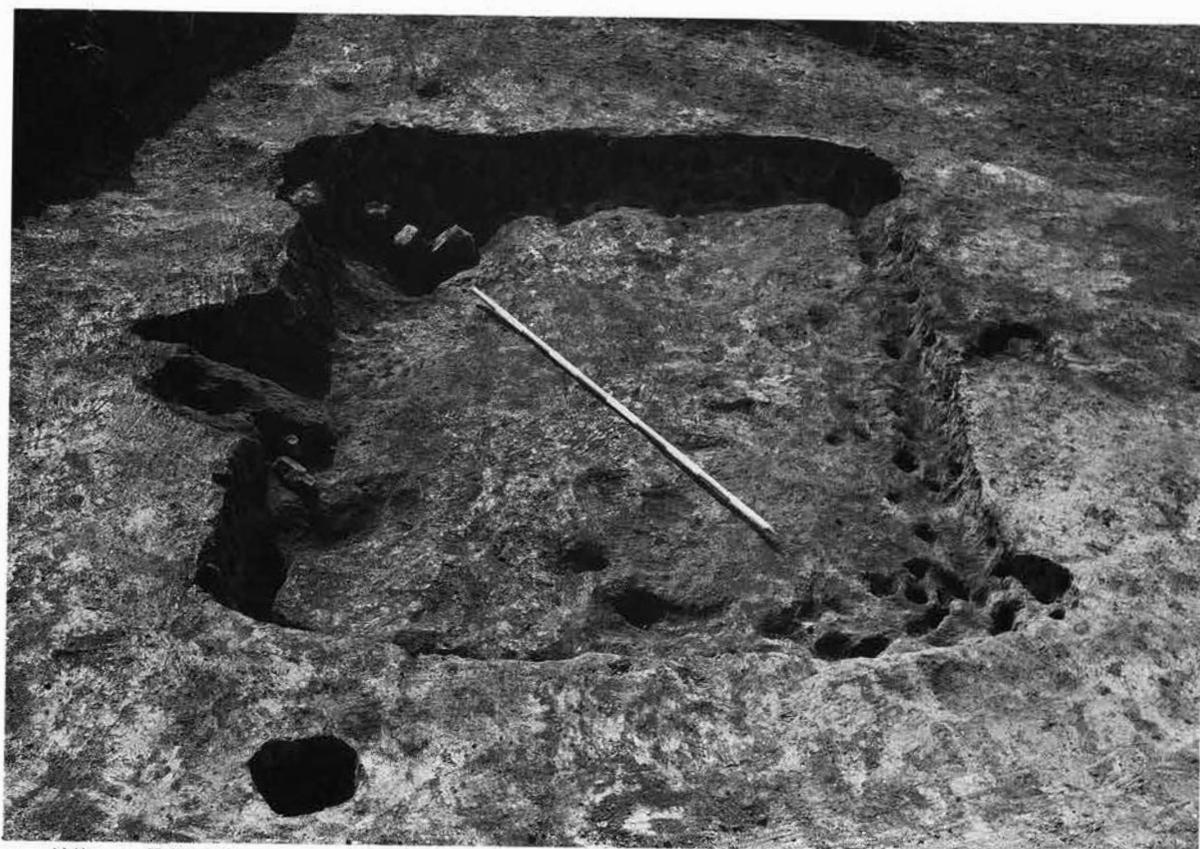
2. 溝状遺構



3. 橋詰3号住居跡遺物出土状態



1. 門前舩海戸遺跡遠景



2. 舩海戸1号住居跡

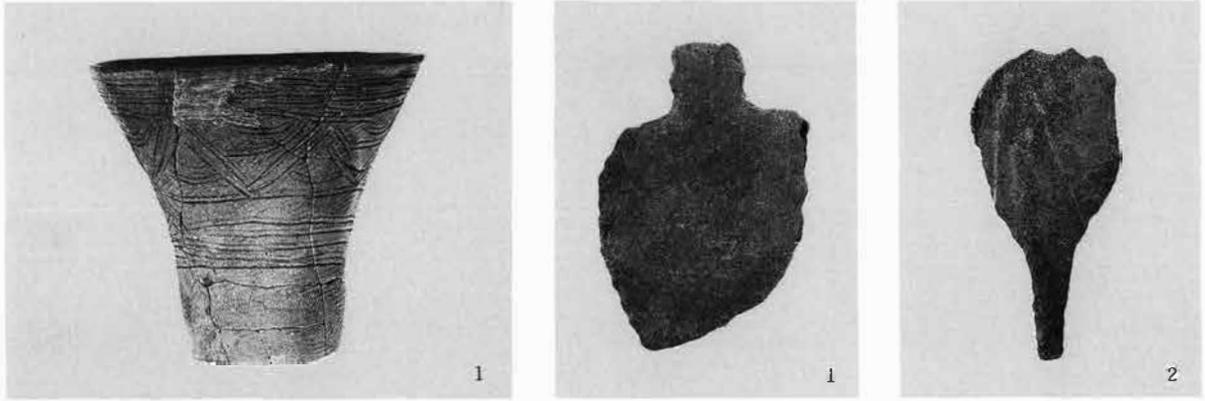
图版 6



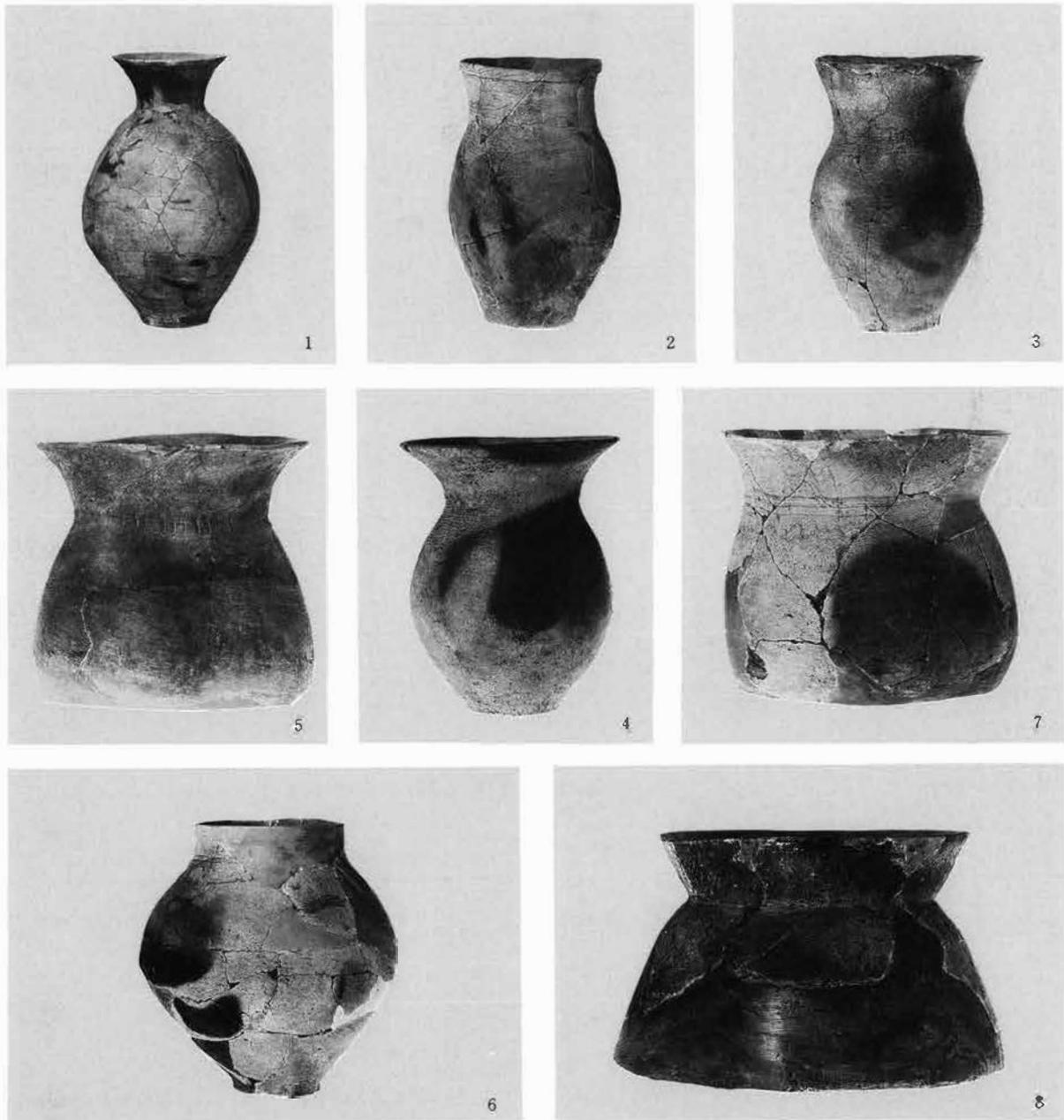
1. 舛海戸 2 号住居跡



2. 舛海戸 3 号住居跡

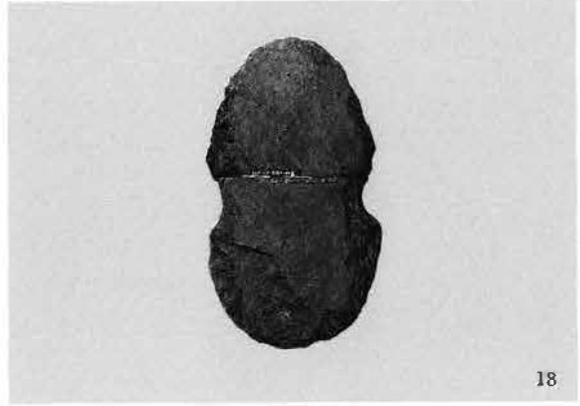


1. 橋詰1号住居跡出土遺物とグリット出土石器



2. 橋詰2号住居跡出土遺物 (1)

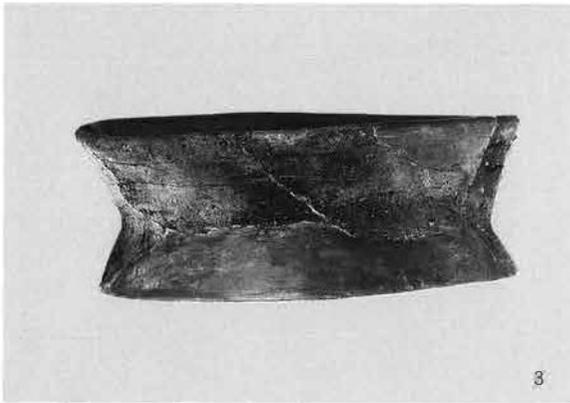
図版8



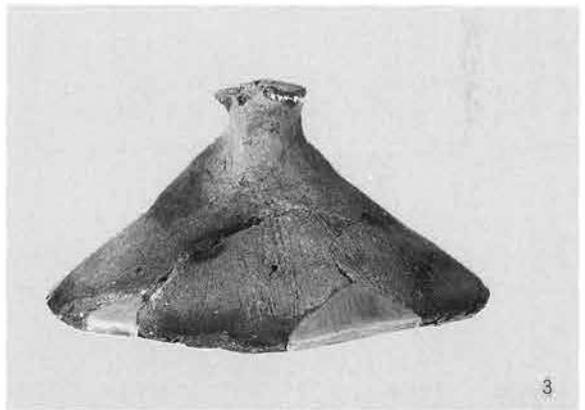
1. 橋詰 2号住居跡出土遺物 (2)



2. 橋詰 3号住居跡出土遺物



1. 外海戸2号住居跡出土遺物



2. 外海戸3号住居跡出土遺物と溝状遺構出土墨書土器

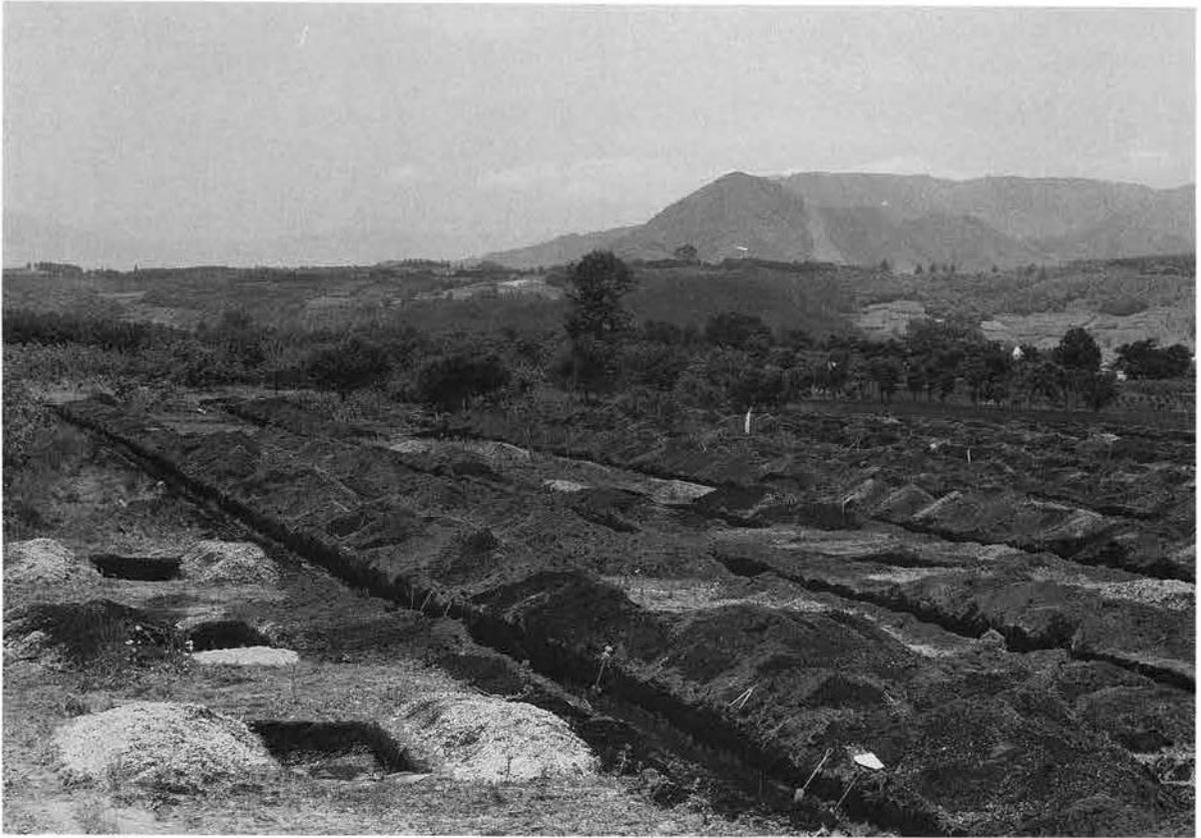
図版10



1. 高野原遺跡遠景（北東より）



2. 高野原遺跡全景（北より）



1. 高野原遺跡トレンチ設定状況(南西より)

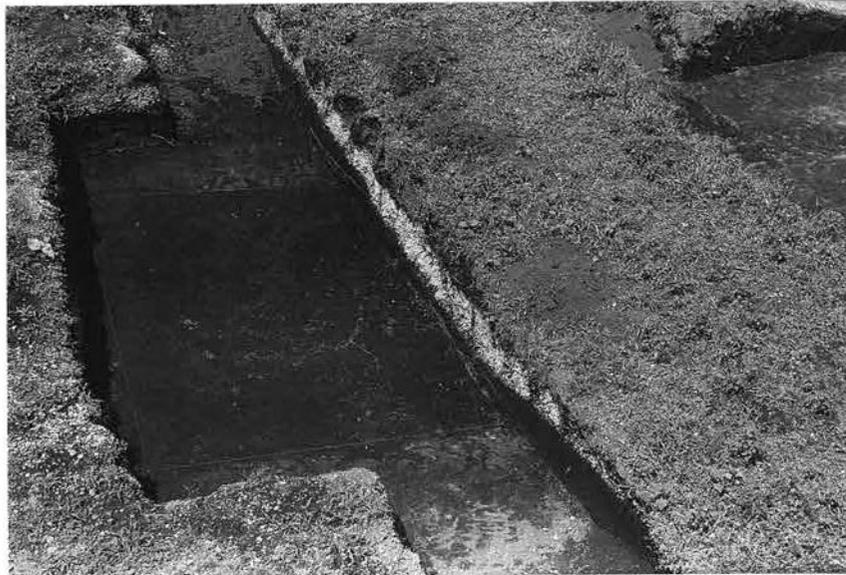


2. 高野原遺跡調査風景

図版12



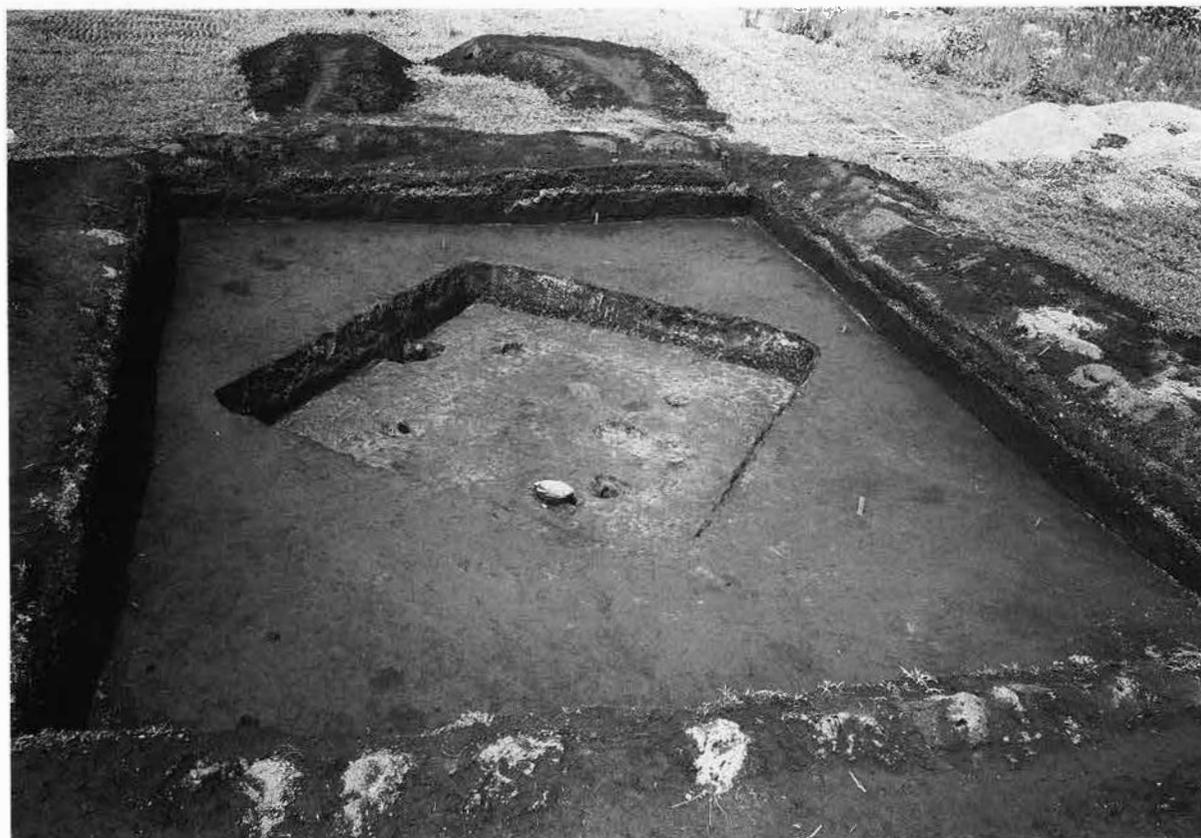
1. 高野原7号住居跡
上面のF P



2. 高野原12号住居跡
上面のF P



3. 高野原3号墳
周溝上面のF P



1. 高野原2号住居跡（東より）



2. 高野原2号住居跡遺物出土状態（北より）

図版14



1. 高野原3号住居跡（西より）



2. 高野原3号住居跡遺物出土状態（北西より）



1. 高野原4号住居跡 (南より)



2. 高野原4号住居跡遺物出土状態



1. 高野原5号住居跡（西より）



2. 高野原6号住居跡（南より）



1. 高野原7号住居跡（西より）



2. 高野原7号住居跡遺物出土状態（東より）



1. 高野原8号住居跡 (南東より)



2. 高野原遺跡見学会の参加状況

1. 高野原1号土坑
(南より)



2. 高野原2号土坑上面の状況
(南東より)



3. 高野原2号土坑下面の状況
(南より)





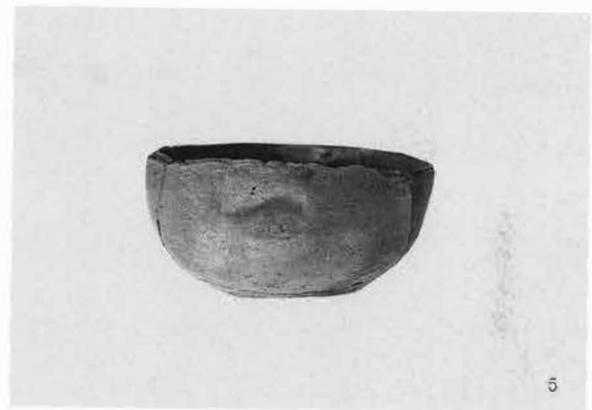
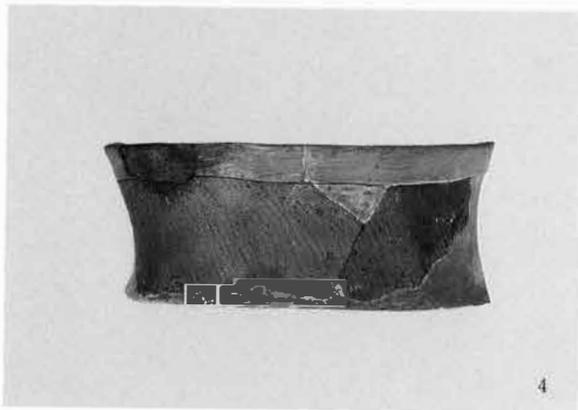
1. 高野原1号墳
(西より)



2. 高野原3号墳
(北西より)

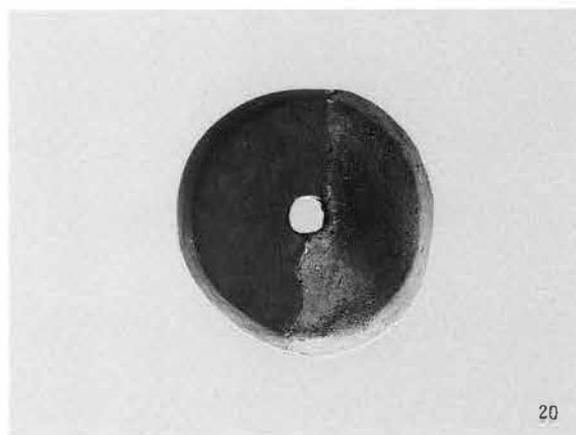
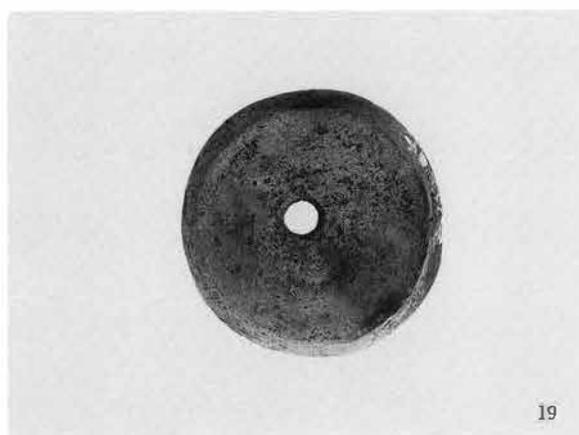
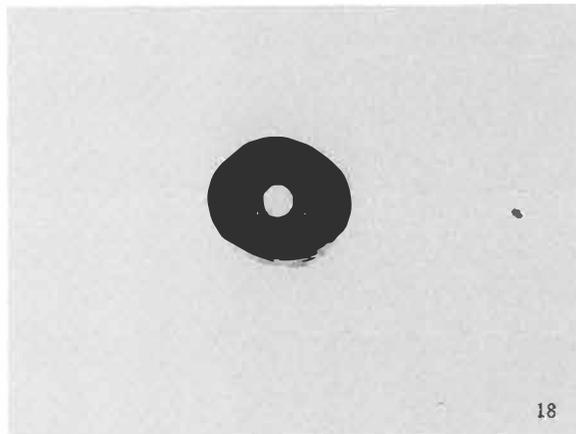
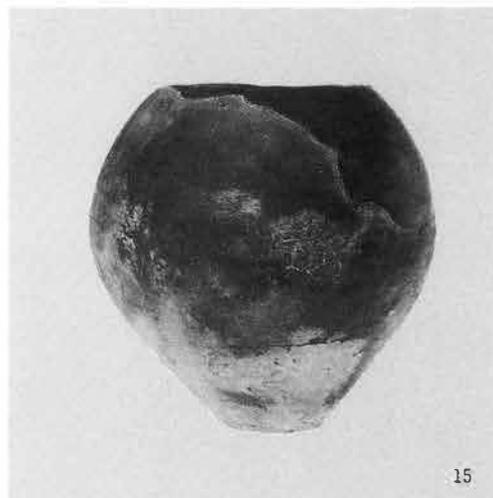


3. 高野原4号墳と1～4号
墓坑(東より)

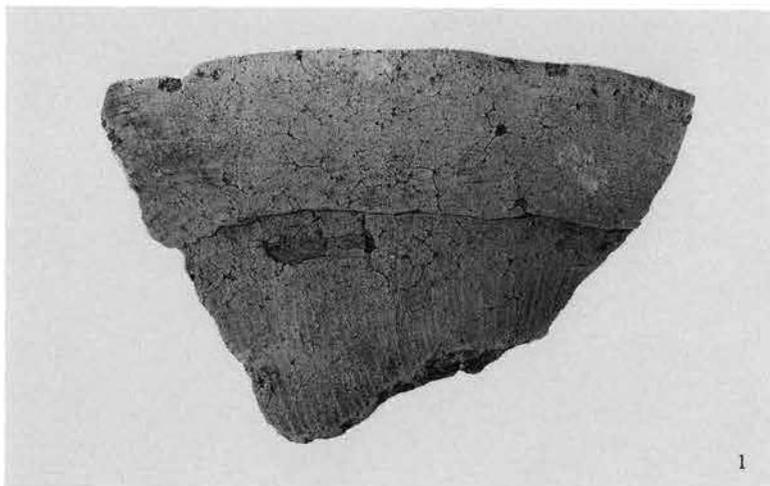


高野原2号住居跡出土遺物(1)

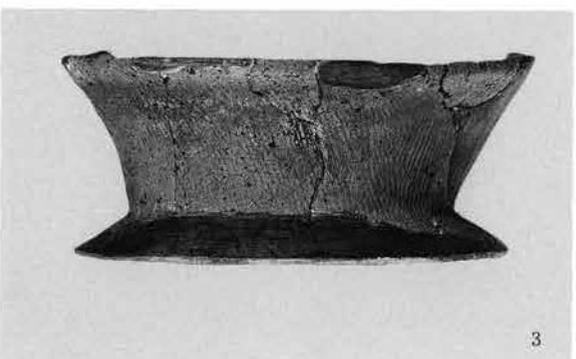
図版22



高野原2号住居跡出土遺物(2)

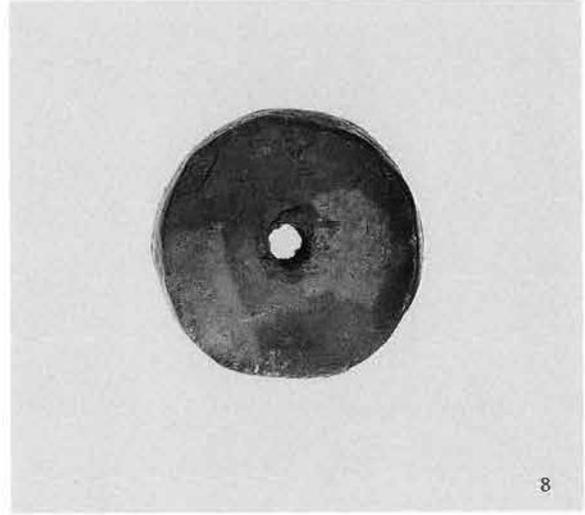
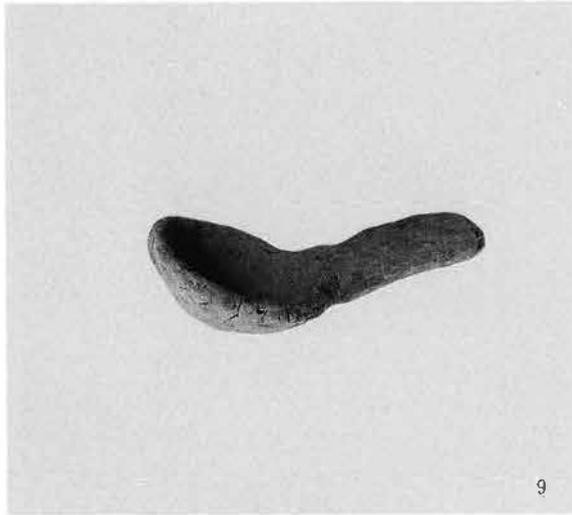
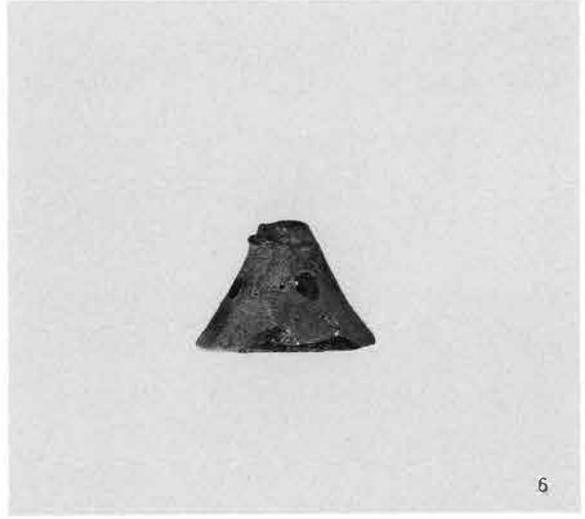
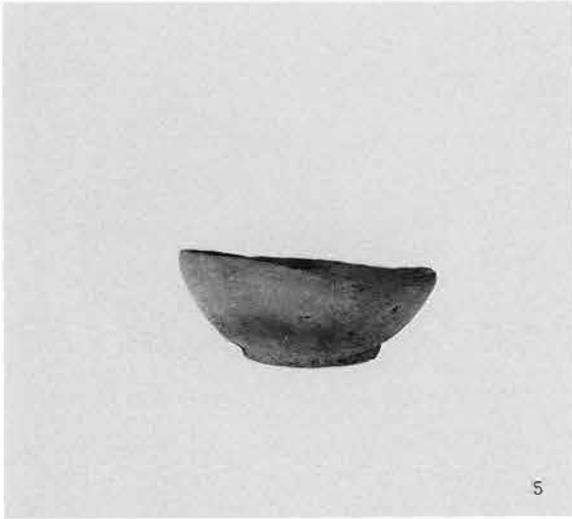


1. 高野原3号住居跡出土遺物



2. 高野原4号住居跡出土遺物(1)

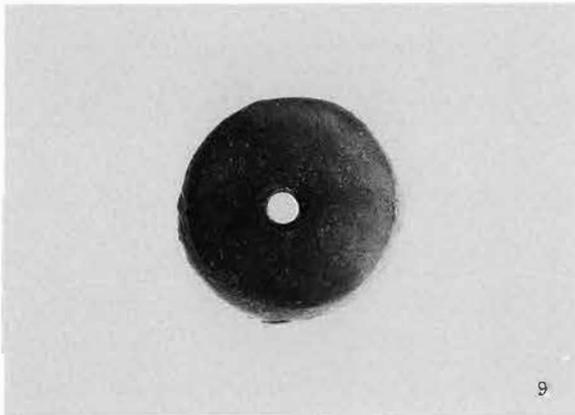
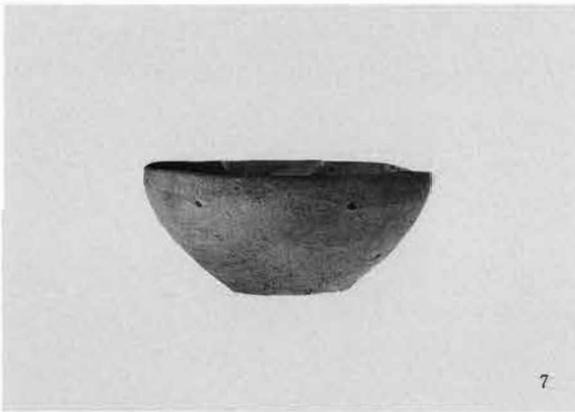
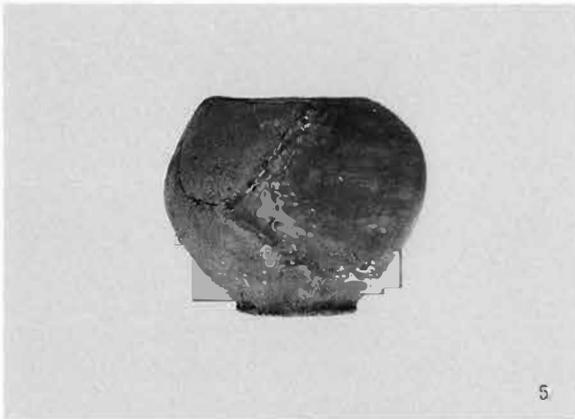
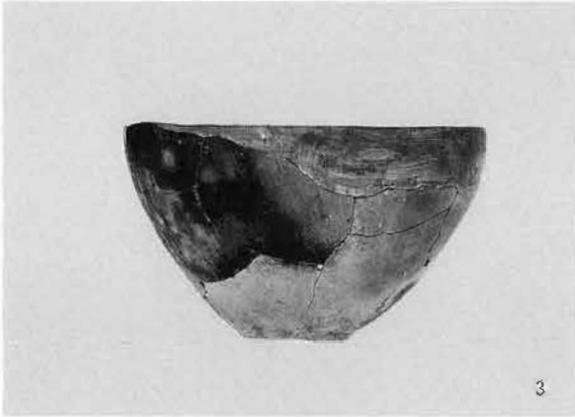
图版24



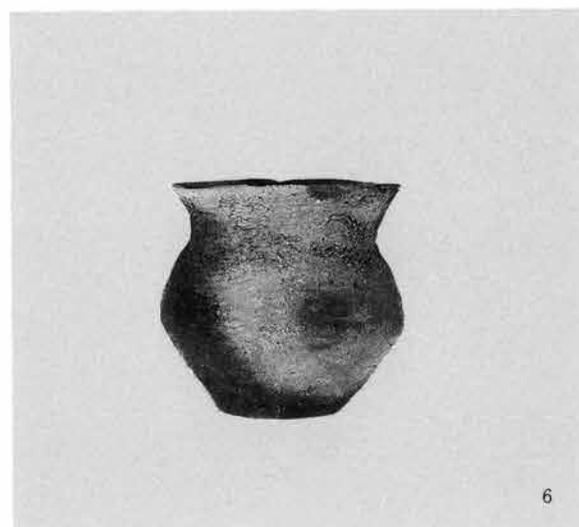
1. 高野原4号住居跡出土遺物(2)



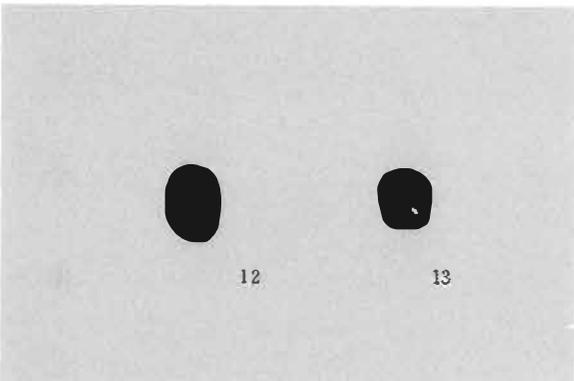
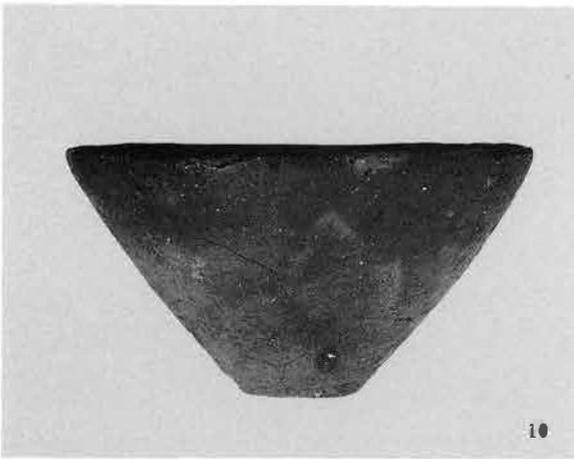
2. 高野原5号住居跡出土遺物(1)



高野原5号住居跡出土遺物(2)

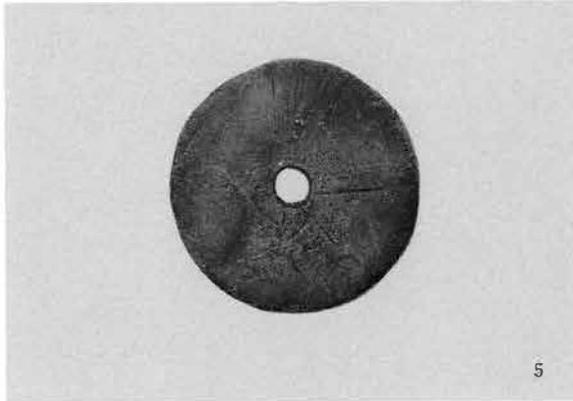


高野原6号住居跡出土遺物 (1)

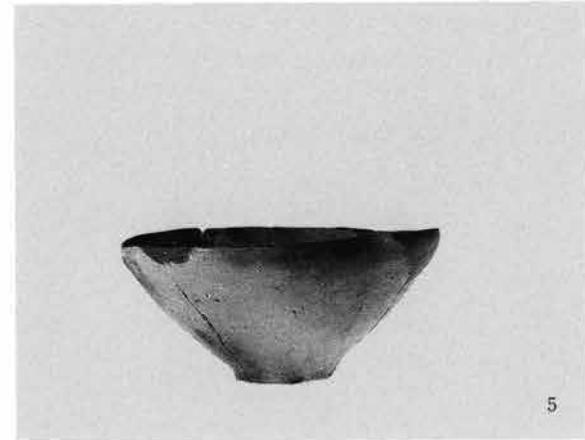


高野原6号住居跡出土遺物(2)

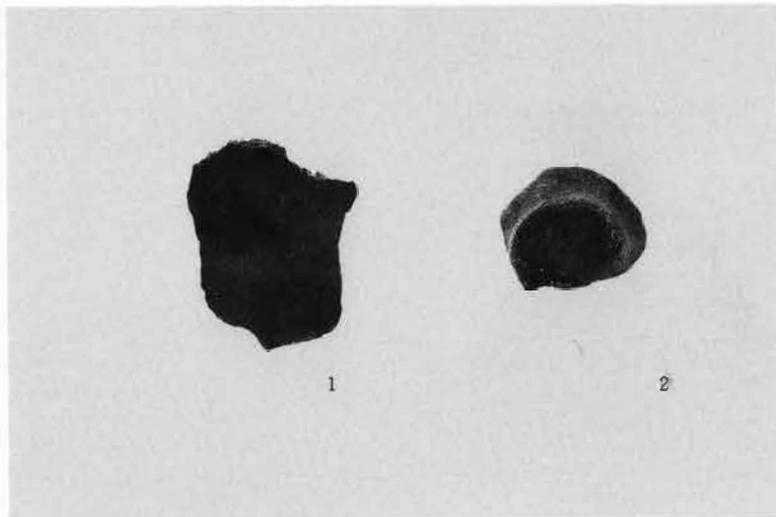
図版28



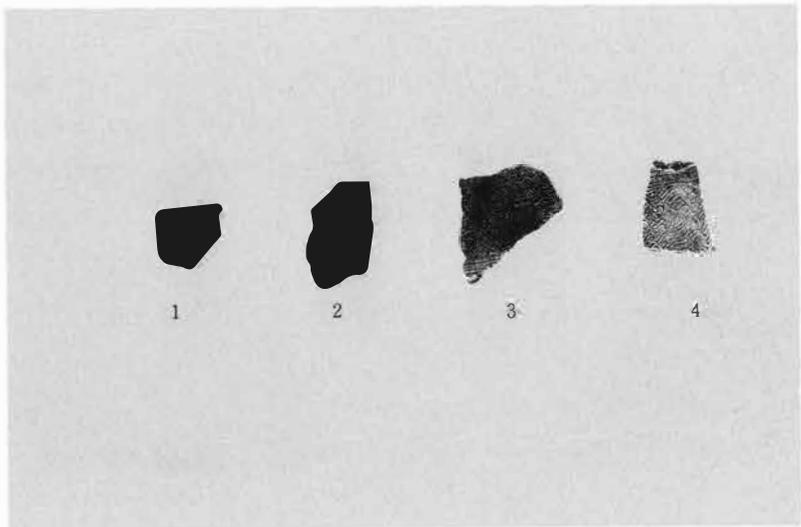
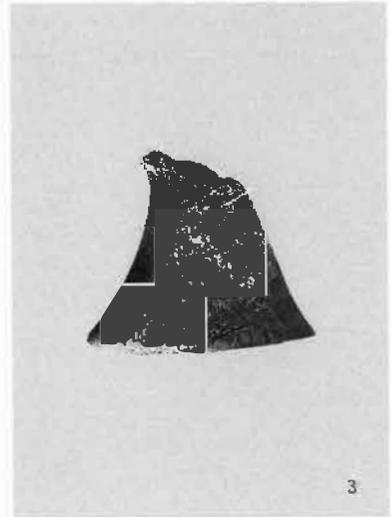
1. 高野原7号住居跡出土遺物



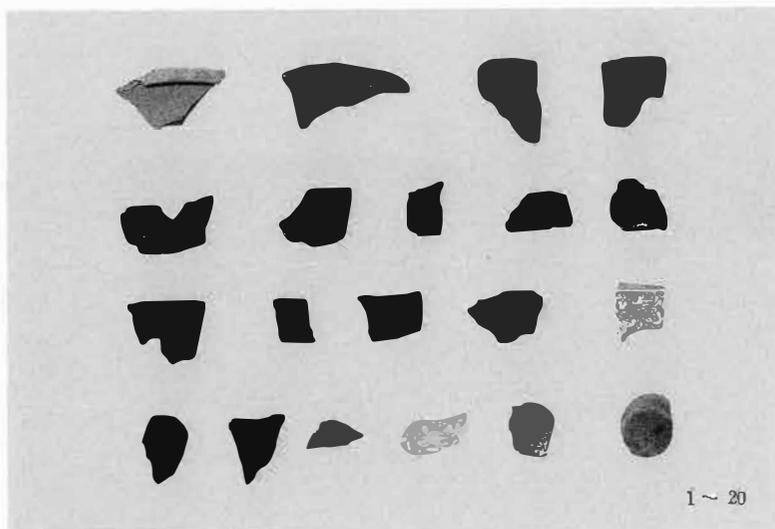
2. 高野原8号住居跡出土遺物



1. 高野原9号住居跡出土遺物



2. 高野原10号住居跡出土遺物



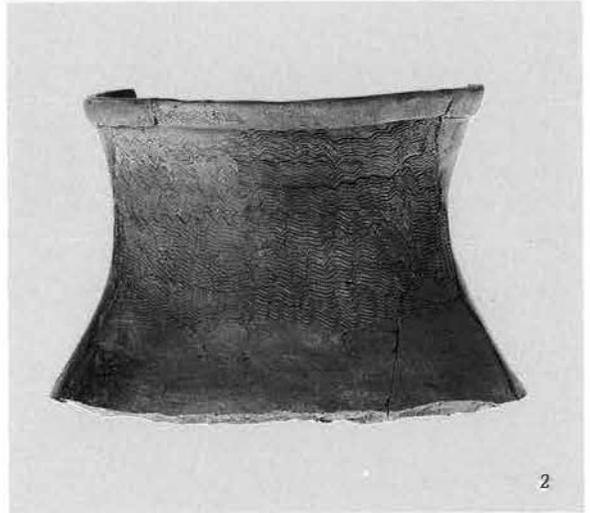
3. 高野原11号住居跡出土遺物



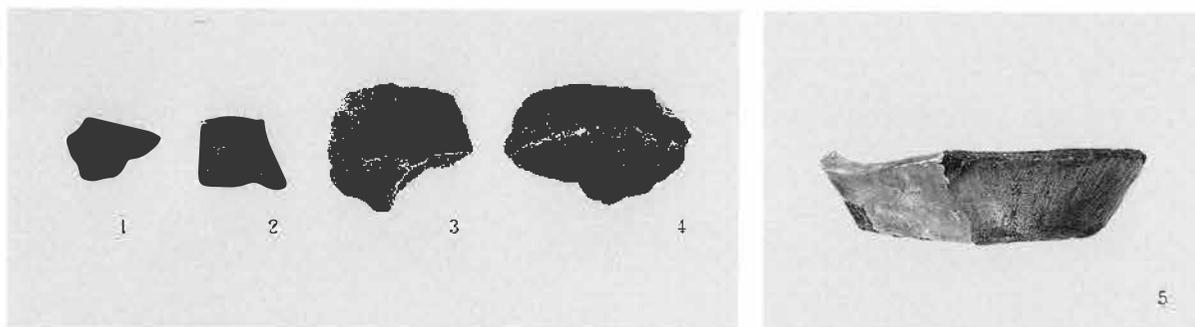
图版30



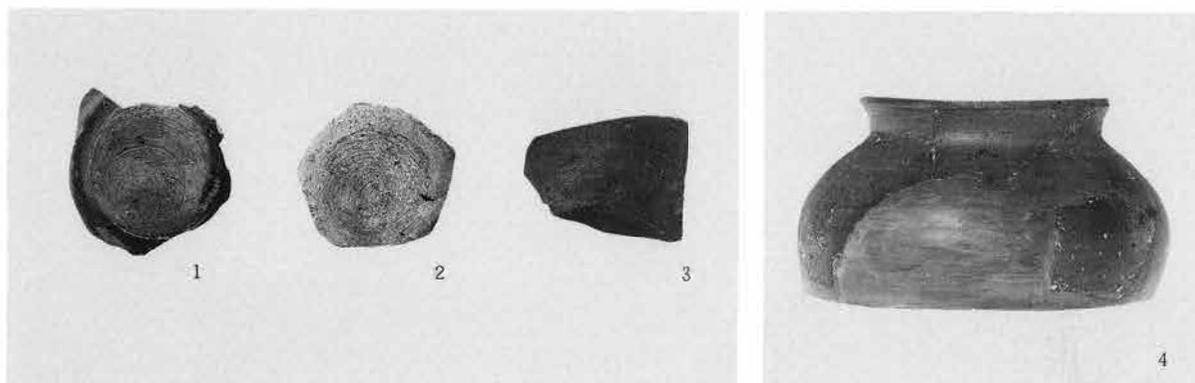
1. 高野原1号土坑出土遺物



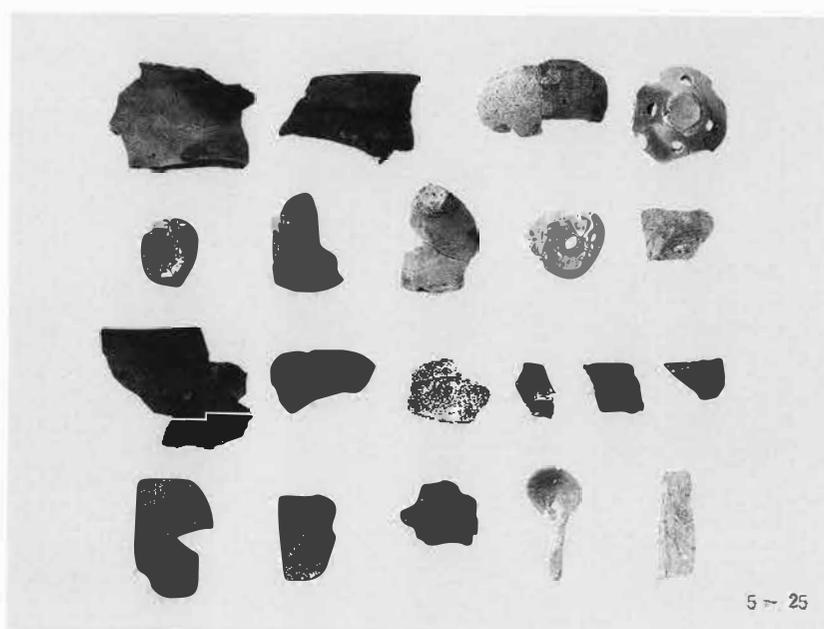
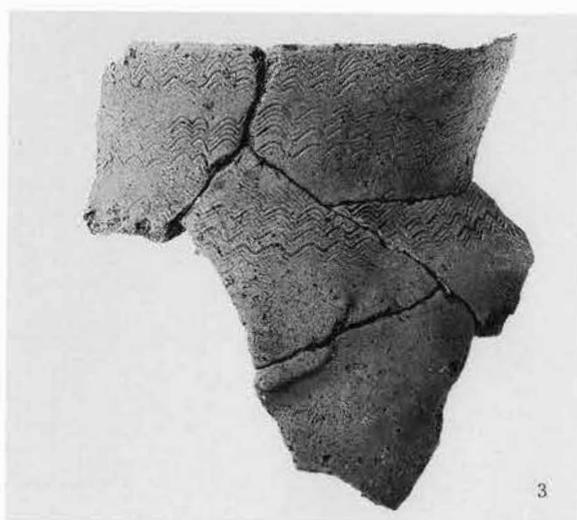
2. 高野原2号土坑出土遺物



1. 高野原 2号墓坑出土遺物



2. 高野原 4号墓坑出土遺物



グリット出土遺物

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第83集

門前橋詰・外海戸遺跡
高野原遺跡

公共開発関連出
土品等整理報告書

平成元年3月15日 印刷

平成元年3月31日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所